

読売新聞に見る明治期講談（その三）

菊池真一

明治四十一年から四十五年までの講談関連記事を抜き出し、更に明治四十年以前の分について洩れていたのを追加する。

明治四十一年（1908）

一月十日（1908.1.10）

○●猫遊軒若円死す 伯知の門弟にて現時講談界中若手の売出しなる若円こと南剣次は昨年九月以来肋膜炎にて本所区亀沢町二丁目四番地の宅に療養中なりしが七日午後五時三十分二十九歳を一期として死去せり若円は十三年小石川関口に生れ父は故田中久重氏の経営せる芝浦製作所の技師たりしより築地の工手学校に入学せしめしも半途にて退学し夫より松本楓湖翁の門に入り楓楊と称し頻りに画筆を舐るうち講談の趣味を感じ十九歳にして伯知の門弟となり初め知鏡と云ひ昨年三代目若円の名を襲ぎたるなり葬儀は昨日午前小石川茗荷谷の伝妙寺にて執行せり

一月二十七日（1908.1.27）

●本郷座の名物会

東京名物会第一回演奏会は昨日午後一時から本郷座で開かれた、出し物は筑前琵琶、長唄、落語、曲芸、常磐津、薩摩琵琶、講談、手踊りと云ふ二の膳付御馳走たつぷりの上にヴァイオリンの合奏、ピアノの独奏をも聴かせるとあつたので下戸も上戸も毛色の変つた処を買つてかぎ蓋を明けて見ると中々の大入り機敷などは間もなく満員となつた▲真龍齋貞水の講談「出世の大盃」は稍や余計なお喋舌をする嫌ひはあるけれど甲良の生えて居るだけに耳煩はしい点はない……

二月五日（1908.2.5）

●本郷座に現はる、美当一調氏（顔写真紹介）

二月八日（1908.2.8）

●▲本郷座の美当一調 今日午後五時より開場する美当一調の演題は「日露戦争」義士銘々

伝の内「岡野金右衛門」なり……

二月十日（1908.2.10）

○●老耄せる美当一調

八日の晩に本郷座で旗拳した美当一調の初日を聴いた、話し上手な伊藤痴遊が例の中江兆民居士の物語りにドツと笑はせて引込むとお次は橘旭翁の筑前琵琶「扇の的」、長たらしい手前味噌の前口上には聊か恐れ入らざるを得なかつたが選りに選つてアンナ平凡の曲を出しながら而も充分に筑前琵琶其もの、真価を發揮しおはせたのは流石にお腕前ぢやと感服の外はない。其れからは愈々御本尊一調の出現となつた、電車内の広告にある写真そつくりの面影なので一見してハ、アと知られる、態度悠悠言語明晰「何分本年六十二歳云々」の前駆を二度も三度も立てた上で偕弁じ述べたる芸題は前席が「仁川港に於ける千代田艦の苦心」に後席が義士銘々伝の抜読「勝田新左衛門の伝」である、三味線は調子も高く抑揚にも面白い処があつて関東派の其れよりも稍や研究した跡が見えるけれど肝腎な口演の方は節が全然チヨボクレ式で張り扇の叩き按排なども何となく木魚の調子になづんで居る又後席の時に二度ばかりサワリを入れたけれど単に吟変りがしたばかりで少しもものになつて居ない、僅に良かったのは早調子で言葉から言葉へ躍つて行く追込みの節ばかりだ。会話も無論下の下なるもので口跡に毫も変化がないため甲者の言葉と乙者の言葉を聴き分けるには甚大の骨が折れる。若し夫れ筋の取り方に至つてはテンデ御沙汰の限りではなく瓜生中将与木越少将の談話の如き、千代田艦上に於ける諸将校の談話の如き仁川市街に於ける人心動揺の形容の如き、新左衛門が暇乞の際に庭下駄で殿らる如き、慌て、銭湯から飛出した？之助が読売を買つて悠々と義士の連名を読上げ且つ一々其人に就いての述懐に耽るが如きは、事実の穿孔を欠き前後の撞着すること最も甚しいもので苟くも檜舞台の真只中で堂々と名乗りを挙げる芸人としては余りに不用意千万なことと思ふ、数年前はいざ知らず少くも今日の一調は恣くの如き欠点だらけの俗に云ふ田舎廻りに過ぎぬのである、人格必ずしも芸を伴はず、いくら一調の前身は豪くつても、いくら平素の篤行は見上げたものでも、芸人としては彼れの上には何

等の敬服すべき又何等の尊重すべきもの、なかつたのを僕は切に、失望し且つ慨嘆する者である。終りに臨んで敢へて弁ず、一調は元来下手ではないが如何せん本年六十二歳、今や既に老耄の境に入ったのだと。(蝶々子)

二月十一日 (1908. 2. 11)

○▲演芸講話会 十一日午前十時より上野広小路の鈴木亭にて催す番組は左の如し

暁星五郎 (如燕) 素人芝居 (田左) 関根弥次郎 (南玉) 五郎正宗 (小燕林) おかふい (金馬) 錦名竹 (右猿)

二月二十四日 (1908. 2. 24)

●昨日の廢病院 ……尚午後一時より余興として高峰瑞峯女史の「赤垣」其他二三の筑前琵琶及び伊藤痴遊の講談「中井桜洲」「西郷隆盛」等の寄附演芸ありき……

二月二十七日 (1908. 2. 27)

○▲青年会館慈善演芸 神田の青年会館にては予報の如く廿五六の両夜慈善演芸会を開きたるが其目的は同館に於て基督信者の人々が毎日曜に軍人慰勞会を開き居る慈善の資に供する為めの催しにて九女八の鷺娘と安宅勸進帳は流石に見耐へありて七十に近い老嫗とは思はれずお伽会員の牛若弁慶と新かちく山何時見ても興あり其外に高峯筑風の琵琶と貞水の講談あり来会者は多く紳士淑女にて極めて静肅に最も清き会合なりし

三月十九日 (1908. 3. 19)

○▲横浜羽衣座 来廿一日より五日間午後五時開場日本能弁学会の趣旨に基き開会の演題は日露戦争談 (小田富子十六才) 教育歴史譚 (小田仙子十四才) 現在社会の情勢 (小田昇十才) 外に三名の席上揮毫、佐倉義民伝、元禄義士伝 (燕林) 寛永武勇伝 (小燕林) にて小田の三少年少女は故小松宮殿下御前講談の栄を賜ひし九州の神童と称せられたるものなりと

三月十九日 (1908. 3. 19)

●▲日本育兒院慈善演芸会 ……来る二十、二十一の両日神田青年会館にて催す番組は
△廿日夜 講談 (元禄義士伝) 桃川燕林、……

△廿一日昼 講談 (木村重成堪忍談) 桃川燕林、……

三月二十八日 (1908. 3. 28)

○●辰雄と痴遊 来る三十、三十一の両日午後五時より横浜の羽衣座にて開演し其純益は全部育兒同仁社に寄附する由

四月十七日 (1908. 4. 17)

●▲演芸講話会 十九日午前十時より上野広小路の鈴木亭に於て催す番組は
浅香三四郎 (如燕) ……越後日記 (南玉) ……

●第八回読売新聞読者懇親会

……

▲余興▼

……

講談 (烈婦高の伝)

真龍齋貞水 (寄附出演)

四月十八日 (1908. 4. 18)

●▲軍人後援会寄附慈善演芸会 明十九日正午より神田橋外和強楽堂にて開く其番組は

講談義士銘々伝 (真龍齋貞水) ……

●第八回読売新聞読者懇親会

……

▲余興▼

……

講談 (烈婦高の伝)

真龍齋貞水 (寄附出演)

四月十九日 (1908. 4. 19)

●第八回読売新聞読者懇親会

……

▲余興▼

……

講談 (烈婦高の伝)

四月二十九日 (1908. 4. 29)

●第八回読売新聞読者懇親会

……

▲余興▼

……

講談 真龍齋貞水 (寄附出演)

六月二十一日 (1908. 6. 21)

●劇となりたる鏡花氏の小説 小山内薫

……

一体鏡花氏の小説を愛読する人の心持は丁度巧い講釈師の話をして居る人の心持と同じ手、話し方が巧いので偽な事もつひ真に聴かれるのだ。……鏡花の話し方の巧いのは地の文と云ふもの、無い脚本にまで出て来て、出て来る人出て来る人の台詞が、如何しても講釈師

の台詞だ、近代劇作者の台詞ではない。講釈乃至落語の会話だ、劇の会話と云ふものではない。……

六月二十八日 (1908. 6. 28)

●貸本屋の昨今

……▲講談類 は格別従前と大差はなけれど浪花節に唱へらる、種類のもの最も多きに居るが如し伊原青々園著の新講話ものは却々盛んにて宝息子はわけてよく出ると……

七月十日 (1908. 7. 10)

●▲伊藤痴遊 浪花文界を脱して正義派に入会し又々落語の柳派に加入すると云ふ

八月十日 (1908. 8. 10)

○●横浜の演芸大会 横浜演芸雑誌社主催にて来十五日午後六時より横浜港町浜港館に於て諸芸大研究会を開催する由なるが出しものは浪花節、義太夫、落語、講談、新内、常磐津、清元、琴平踊等

九月二十七日 (1908. 9. 27)

○△演芸講話会 午前十時より上野広小路鈴木亭にて出演者は

鯉橋、南凌、田橋、南玉、田歌、如燕、田右、田左、小田遊、りう馬、義太夫、薫、三福

十月二十八日 (1908. 10. 28)

○面白き講談予告

●赤穂義士伝

一心亭辰雄講談

赤穂義士伝は是れまで或ひは芝居に或ひは講談に常に世人から大喝采を受けて居ましたが皆な少しづつ、間違つて居るのは甚だ残念である依て吾社は長く肥後屋敷に秘蔵せられたる「忠誠後鑑録」「忠誠後鑑録感説」及び義士自筆の覚え書等が目下幸ひに農科大学教授横井博士の手に在るを借用し其の他二三の珍書をも参考して各義士の伝記より讐討に至るまで正真正銘一点の間違も無き義士伝を掲ぐる事に致しました真実の義士伝は従来の間違つた義士伝に比べてずつと面白く又有益であります況して語るのは大評判の一心亭辰雄、面白くない筈がない

十一月一日の紙上より載せませす

十月三十日 (1908. 10. 30)

○面白き講談予告

●〔真正新説〕赤穂義士伝

一心亭辰雄講談

赤穂義士伝は是れまで或ひは芝居に或ひは講談に常に世人から大喝采を受けて居ましたが皆

な少しづつ、間違つて居るのは甚だ残念である依て吾社は長く肥後屋敷に秘蔵せられたる「忠誠後鑑録」「忠誠後鑑録感説」及び義士自筆の覚え書等が目下幸ひに農科大学教授横井博士の手に在るを借用し其の他二三の珍書をも参考して各義士の伝記より讐討に至るまで正真正銘一点の間違も無き義士伝を掲ぐる事に致しました真実の義士伝は従来の間違つた義士伝に比べてずつと面白く又有益であります況して語るのは大評判の一心亭辰雄、面白くない筈がない

十一月一日の紙上より載せませす

十月三十一日 (1908. 10. 31)

○面白き講談予告

●〔真正新説〕赤穂義士伝

一心亭辰雄講談

赤穂義士伝は是れまで或ひは芝居に或ひは講談に常に世人から大喝采を受けて居ましたが皆な少しづつ、間違つて居るのは甚だ残念である依て吾社は長く肥後屋敷に秘蔵せられたる「忠誠後鑑録」「忠誠後鑑録感説」及び義士自筆の覚え書等が目下幸ひに農科大学教授横井博士の手に在るを借用し其の他二三の珍書をも参考して各義士の伝記より讐討に至るまで正真正銘一点の間違も無き義士伝を掲ぐる事に致しました真実の義士伝は従来の間違つた義士伝に比べてずつと面白く又有益であります況して語るのは大評判の一心亭辰雄、面白くない筈がない

十一月一日の紙上より載せませす

十一月一日 (1908. 11. 1)

●▲新史料に拠れる新講談

赤穂義士伝

一心亭辰雄口演

天野屋利兵衛伝 (一)

(本文省略)

十二月二日 (1908. 12. 2)

●高等演芸場の開場式

有楽町に十二万円を投じて新説せられたる高等演芸場有楽座は昨日午後五時知名の士数百名を招待して開場式を行ふ……▲元來本場は芝居、能楽、講談等各種の演芸を興行する筈なるが興行時間は極く短く行る積なれば食堂、運動場の設けなく又喫煙は廊下に限られたり……

十二月十日 (1908. 12. 10)

●講談師の和解祝 同志正義の一派は是迄ゴタ／＼なし居りたるが今回某々顔役の仲裁にて和解となり十日外神田福田家にて講談二百余名ら和解祝を開く由

十二月十四日 (1908.12.14)

●第六回紅葉祭 十六日午後一時より芝紅葉館内にて催さる、筈なるが参会自由にして会費は金二円なり祭場の順序及び余興は

▲開会の辞 (巖谷小波) ▲紅葉山人の吉野行 (江見水蔭) ▲講談鼻毛大名 (細川風谷) ……

十二月十七日 (1908.12.17)

○▲辰雄の水戸行 病気全快後蠅殺町の喜撰亭にて毎夜客留の好人気であった一心亭辰雄は十六日水戸市に乘込み常盤座にて十八日より三日間「義士伝」と「三日月」を講ずる由

十二月二十六日 (1908.12.26)

○▲演芸講話慈善会 廿六、七の両日午後六時より愛宕下の桃桜亭にて桃川如燕主任となりて同会を開く純益は谷中の慈善学校へ寄附

○▲講談独演会 廿六、七の両日正午十二時より神田白梅にて演者伊藤痴遊

明治四十二年 (1909)

一月六日 (1909.1.6)

○▲講話会発会 十日鈴木亭にて

倉橋伝助 (如燕) ……日露実記 (南凌) ……黄金米櫃 (南玉)

一月十六日 (1909.1.16)

●藪人の図書館

日比谷図書館の入口に「五十六両日は商家の徒弟に限り商業書籍小説お伽書類を書棚に陳列して随意に閲覧を許す」と云ふ貼札が出て居る…

▲読んでる書物 年から云へば十八九の所が多い生意気に最うコスメチックの句なぞさせて頭を気にしながらカード式簿記法を読んで居るボーイ風の少年も居る支那経済全書と領事報告の日本貿易統計とを開けて熱心に筆記する者もあるが概して小説が大受けて「欺かざる記」「おのこいしめ」「青春」「金色夜叉」等が最う出切つて居た講談では「赤穂義士伝」「荒木又右衛門」「宮本武蔵」「野狐三次」などを面白さうに読んで居る者もある併し近頃流行の冒険小説が小僧さん達に向かないのは如何したものか…

一月十六日 (1909.1.16)

○●東京亭 日本橋南伝馬町の同亭には十五日より十八日迄伊藤痴遊の独談あり番組は

(十六日) 近藤重蔵、最後の石田三成、洪沢栄一、会津小鉄 (十七日) 大塩平八郎、僧日蓮、福沢諭吉、国定忠次 (十八日) 秀吉中国引返し、僧日蓮、江川太郎左衛門、国定忠次

一月二十日 (1909.1.20)

●新史料に拠れる新講談

赤穂義士伝

一心亭辰雄口演

大石内蔵之助伝 (一)

(本文省略)

一月三十一日 (1909.1.31)

○●痴遊峰吉春海 関西地方巡業の爲め卅一日先づ浜松の勝鬃亭へ乗込みたり

▲辰雄の二月上席 一心亭辰雄は二月一日より京橋南伝馬町の東京亭にかゝり赤穂義士伝等前後三席を長講すべしと

二月一日 (1909.2.1)

●商工青年一日会の発会 ……細川風谷の立志講談等ある筈なり

二月一日 (1909.2.1)

○●細川風谷独演会 巖谷小波、石橋思案、岡村柿紅、今村次郎の四氏発起となり細川風谷の爲め十三日午後五時半より常盤木俱樂部にて風谷独演会を催す由、当日の出し物は文学物、旧談物、西洋物等都合四席

○▲演芸講話会 七日鈴木亭の番組は

伊達騒動 (如燕) 大阪落語 (左近) 塚原卜伝 (南凌) 文違ひ (金馬) 神出鬼没 (大川新) 勘当 (円歌) 江戸の花 (円橋)

二月十五日 (1909.2.15)

●新史料に拠れる新講談

赤穂義士伝

一心亭辰雄口演

潮田又之丞伝 (一)

(本文省略)

二月二十一日 (1909.2.22)

●新史料に拠れる新講談

赤穂義士伝

一心亭辰雄口演

前原伊助伝 (一)

(本文省略)

二月二十六日 (1909.2.26)

●新史料に拠れる新講談

赤穂義士伝

一心亭辰雄口演

片山万蔵伝 (一)

(本文省略)

三月二日 (1909. 3. 2)

●講釈師愈よ分離

如燕一派と馬琴一派

講談師界の正義派を以て任ずる如燕、南龍、若燕、右円、花清 (旧白馬) 小燕林外冊名が同志派の馬琴、天山、伯知外数十名と紛擾を醸せしは去月廿日の事なるが遂に両派共手を切りて独立行動を取るに至れり其原因は同志派なる馬琴の弟子寄席小柳亭の主人琴調と馬琴の弟天山等が講談席の範圍を定め此定席以外に出席したる者は二百円の懲戒金を出さしむる事に相談を決め小柳、永花、金車、若宮外十二軒を定席とし他席へ出る者をも併せて排斥する旨同業者へ通知せしに前記の各席と同志派の面々は直ちに賛成し松鯉、馨、桃葉、伯山、南玉等も又洪々乍ら賛同せり、然るに如燕一派はこんな規約は日進の今日服従し得べきものにあらず客の招きに依ては如何なる席へも出るが当然と主張し之には又大金白梅深川巴桃桜鈴木花月小岩明治豊川小林其他の席亭が同情し其上大阪よりは一道伯円等の応援あり斯て二十一日正義派は若燕宅に同志派は浅草区森下町の松鯉宅に何れも会合して熟議の結果愈々両派分立する事に極まり正義派は一日より如燕 (鈴木亭) 若燕 (小岩亭) 南龍 (花月亭) 大川 (新巴亭) 小燕林 (小林亭) 花清 (深川亭) 右円 (桃桜亭) 一道 (横浜森下亭) 等へ出席する事となれり

三月十六日 (1909. 3. 16)

○▲辰雄の下席 一心亭辰雄は今夜より本所吉岡町の清水亭にかゝり例の如く三席長講談をなす由演題は未定

三月二十六日 (1909. 3. 26)

○▲演芸講話会 廿八日鈴木亭にて大阪落語 (左近) 柳生又十郎 (南龍) 新作落語 (円左) 一目上り (円歌) 転宅 (円橋) よいゝ蕎麦 (金馬) 義士拾遺 (如燕) 新講談 (大川新) 人情話 (りう馬)

四月二十八日 (1909. 4. 28)

○▲改良講談会 来月一日午前十時より三十日間馬喰町の常磐亭にて開催南龍、一道、龍谷、如燕の一派出勤し木戸均一制にて小物代無し

四月二十九日 (1909. 4. 29)

○▲西尾麟慶 門下を引きつれ廿八日出発大阪へ乗込み一日より北区天満新門の宝来亭へ出席し六月一日は神戸の虎屋席と極りし由

五月二十三日 (1909. 5. 23)

○▲辰雄辰雄講演会 正午より高等演芸館にて南部坂雪の別れ、横川勘兵衛の二席 (辰燕) 天の屋利兵衛、大石瀬左衛門の二席 (辰雄)

五月二十六日 (1909. 5. 26)

○▲地久節講話会 廿八日鈴木亭にて開会し東西の貞婦伝のみを講演す

前田善良院 (如燕) 松の操 (宝来) 妻の心得 (円橋) 貞婦の黄金 (金馬) ワシントンの妻 (大川新) 母の鑑 (左近) 山内一豊の妻 (円玉) 孝女ひさ (りう馬) 井上静子 (南龍) おく

しの伝 (小円遊) 使婦お秀 (円歌)

六月十日 (1909. 6. 10)

○▲神田伯山の金儲策 嘗て正義派を脱し同志会へ入たる神田伯山は同社会にては綽名を親父 (とつ) さん小僧と呼ぶる、大の貯蓄家にて先頃から宝珠の玉へ無暗に銀貨を投げ入れたが数日前最早や余程溜りしならんと打壊して見ると大枚百廿円六十五銭となつてより▲伯山の喜び一方ならず之を基本として席を買ひ込み席亭出方兼帯で金を叩き集めんと思案の結果内縁の妻にて同じ貯金主義の浅草公園芸妓中村家染吉に計り同人より出金させ正義派所属の深川区西元町の深川亭が千八百円で売物に出てるを買込み自分で叩いて儲けんと思案せしまでは至極よかりしが二丁と離れぬ高橋には栄花亭と云ふ同志会附属の席ありて苦情の出るは知れた事なるより買主は自分なれど席主を他人名義とし講談の跡にて浅草公園の剣舞を催さんと連に計画中なるを早くも斯と聞たる正義派は▲大に憤怒し之れまで深川亭へ出席してた伊沢宝来、右円、如燕等の連中は同所の八名川亭へ昼席の看板を掲げ伯山へ対戦せんと準備中なり

○▲演芸講話会 十三日午前十一時より上野広小路鈴木亭にて

音曲ばなし (円新) 故郷へ錦 (鯉橋) 作虫源助 (南龍) 衛生理科 (左近) 作新語落 (金馬) 風流線続き (大川新) 岸柳島 (円橋) 俠客権兵衛 (宝来) 勘当 (円歌) 隅田夕立 (小円遊)

人情ばなし (りう馬) 武家評林 (如燕)

七月三日 (1909. 7. 3)

○▲講話通 よし町 三太郎

現今東京の釈師中で真に其の名に恥ぢない物は先づ典山、文慶、桃葉、松鯉、馬琴、南玉、南窓、伯山、貞山、貞吉、麟慶等だ。中でも典山が名人の称がある。其の「伊達」等彼に及ぶ者はない。「伊達」と「天保六歌仙」と「小牧山」の三席をちゃんとこなす者は亦彼の外にない。其の諄々たる口調おつとりとした声巧いものだ。文慶と桃葉は世話物に於て伯仲の

観がある。前者は「河内山」後者は「木内宗吾」を十八番としてゐる。馬琴は公園の鬼丸に総ての点が似てゐる。「軍談物」は蘆州が亡くなつてから此の人の天下だ。南玉は典山の貧乏臭くなつたやうな人だ。「中山大納言」はよく調べた。此人は素敵に熱心だ。南窓は新派の高田に比べ得る。其の「西遊記」は他人の及ぶ所にあらずだ。伯山と貞山は現今の人気者だ。双方に巧い所もある。又欠点もある。前者は「竹川盛太郎」後者は「伊賀の水月」其の十八番物だ。貞吉に至つては全く離れた芸だあの流れるやうな調子で浪六の「五人男」をやられたら実に胸が躍るよ。が髻だけは止して貰ひたい。麟慶は心地のいい、講釈だ。「鼠小僧」が中でも好い。伯痴はコケ嚇かしだが、チヨイ／＼巧い所がある。琴凌の「幡随院」も悪くはないがああキイ／＼声が耳につく。桃林カラツ下手。首計り振るのは誰だつて出来る。親仁が冥土で泣いてるだらう。その他貞豊、葉柳、琴龍等の輩があるがいづれもあれ丈ものらしい。鶴窓は将来恐るべきものであつたが今は何所へ行つたか。文車、千山は軽妙、一時神童の称があつた吉右衛門も今は一才子に過ぎなくなつた。目下有望な青年は先づ貞一であらう。故一山の遺子名人典山の元にある。まだ沢山あるが他日にゆづる。

八月十二日 (1909. 8. 12)

●赤穂義士伝

一心亭辰雄講演

南部坂雪の別れ 第一回

(本文省略)

八月二十八日 (1909. 8. 28)

○講釈師の仮装旅行

桃川如燕三遊亭小円遊同円歌同金馬土橋亭りう馬等下谷の定席鈴本亭杯にて組織せる演芸講話会の連中二十名はフロツクコートの紳士姿或は糸立姿の田舎者杯に仮装し来る三十日新橋発の汽車にて金沢八景の見物かた／＼鎌倉江の島へ押出し不景気挽回の爲め太陽気に騒ぎ廻る苦なるが仮装の趣向は各自秘密になし当日新橋駅の二等待合室に落合ひ呀つと云はせる計画なり

○文学士の恋病ひ 講談師宝井馬琴は娘お花 (二十三) を十五歳の時迄柳橋で半玉をさせて置たが奮然として悟る処あり芸妓にするのを中止して本郷の女子職業学校へ通はせる事としたが其の粹な女学生姿に埼玉県の豪農高田某と云ふ文学士が懸想し如何あつても妻にせではと一日跡を尾けて馬琴と云ふこと丈は解つたが探るに従つてお花には山崎とか云ふ潮染の阿兄が附て居る事迄知れて大いに悄気返り遂々古風な恋病ひとなり昨今の暑さに頭から布団を引被つて寝て居るとか記者は可愛相に思ひ馬琴を訪て潮染の実否を正せば「飛でもない、結婚前の女に其様噂を立てられては迷惑です故何卒貴下の新聞で取消て置て下さい」

と云ふ高田さん脈はあるよ

○三銭の寄席 正義派の講談師伊沢宝来は去る十六日夜より八丁堀豊久亭へ出席し毎夜一人にて五席宛立読をなしたる上木戸銭四銭としたれば毎夜客止の大景気は附近の席の大打撃となり来月よりは三銭にせんと協議中なり

九月十日 (1909. 9. 10)

○貞水の義氣 講談師貞水は席亭の頑冥なると仲間が勢力争ひのみをなし技芸に心を入れざるを憤慨し久しく何れの席へも出演せず熱心に技芸を研究したる結果昨今は上流社会よりの招待に日も亦足らざるの有様なれど今回浅草茶屋町の大金亭へ門人鏡水が真打として打つて出るより時々無給金にて出演し義士伝或は最近の出来事を演ずる為め毎夜大入にて鏡水は以外の利益を得て喜び居れり

九月十二日 (1909. 9. 12)

○河豚喰た酬ひ 本所区原庭三五講談師水雲齋龍玉事小川定次郎 (五十二) は十日夜八時頃近所の露店より河豚を買ひ来り手料理にて一杯聞し召したる間もなく苦悶し始め一時間程経て死亡したり

九月十二日 (1909. 9. 12)

●義士伝の流行 生方敏郎

▽ロシヤばんと活動写真と赤穂義士伝記とは今年に於ける流行の三幅対也。

……

▽大石良雄は之と異り。彼には多くの伝道師あり。浪花節語り諸氏は其れ也。此一兩年に於ける伝道の勢力は天理教にも將た流行病にも優るべし。洪水の如く暴風の如く人に逼れり。吾人は到る所に義士伝のピラを見、ペコペンなる三絃と一種異様な濁声を聞かざる事なし。

……

▽彼等の武士道を普及するに巧みなる、一方はキリスト教の故智を学んで下層社会より始めて方回々教が寺院を自ら建てず、他宗の教会を乗取つて之を我物となしたる如く、彼等は到処の寄席より講談落語義太夫色物を追出だして之を武士道の説教場となしたり。否、彼等の中には十四歳の少年にして都下の大劇場をすら乗取つたるものある也。但し彼等は久しく其経文を有たざりき。

……

九月十二日 (1909. 9. 12)

●赤穂義士伝

一心亭辰雄講演

罇屋宗伴(第一回)

(本文省略)

九月十五日(1909.9.15)

●▲芸人消息……▲桃川如燕 は十六日より牛込の大和亭に出席得意の義士伝を改訂し某博士より贈られたる古書に依て実説を口演す……

九月二十七日(1909.9.27)

●赤穂義士伝

一心亭辰雄講演

間重次郎(第一回)

(本文省略)

十月十一日(1909.10.11)

○●桃川黒猿 正義派の講談師小燕林改め黒猿は久しく腸胃を病み居たるが八日午前二時深川大工町の自宅にて死去せり行年卅七歳

十一月三十日(1909.11.30)

●赤穂義士伝

一心亭辰雄講演

三村次郎左衛門(一回)

(本文省略)

十二月十四日(1909.12.14)

○●講談師の行倒れ 講談師松林伯鯉(四五)は予て心臓内膜炎とレウマチスを併発し居りしが十三日午後三時神田通新石町一六地先通行の際俄然途上に倒れ人事不省と為り応急手当の上区吏に引渡したるが生命危篤なり

明治四十三年(1910)

一月十七日(1910.1.17)

●赤穂義士伝

一心亭辰雄講演

間瀬久太夫(第一回)

(本文省略)

一月二十九日(1910.1.29)

○▲芝俱樂部は今回正義派に加入し二月一日夜より桃川如燕の一派出勤義士伝会を催す
二月二日(1910.2.2)

○●講談名人会 伊藤痴遊主宰者となり今後日曜毎に神田の白梅亭を定席として開会すべし其発会は来る六日正午

二月七日(1910.2.7)

○●講談師斬らる 六日午前十時頃神奈川県三浦郡浦郷村字田浦木賃宿房州屋事岸野トシ方にて止宿人の津滝音松(六七)と講談師塚手金次郎(六〇)の両人酒の末喧嘩を始め津滝は鉈にて斬付け数ヶ所の重傷を負はせ生命覚束なし

二月九日(1910.2.9)

○▲高等演芸館 神崎家十代目の末孫勝蔵翁毎夜臨場の桃川如燕の紹介にて霞ヶ関忍耐話の一節を口演をし居れり

四月八日(1910.4.8)

○●邑井一の危篤 昨年来神経衰弱症に罹りて永らく席を休み浅草区千束町三の一九の自宅にて療養中なる講談師邑井一事邑井徳一(七十)は其後漸次重体となり七日朝来昏睡状態に陥りたり

六月一日(1910.6.1)

○●滑稽侯爵夫人 三十一日の夜九時新橋停車場構内で二十歳計りに見える盛装した貴婦人が傍らを通る酔払ひが「彼女は妾だ」と云たとて駅員を捕らへて苦情を並べ飽迄私は名譽を恢復しなければならぬと云ふ「一体貴女は何誰様です」と伺ふと「英国の貴族ヘンリーの妻で、夫ヘンリーは衆議院議員です」と威丈高になる貴族で下院議員は少々可笑いと尚も根掘り葉掘り伺ふ程に遂々講釈師ヘンリーの令夫人と判り群衆は「何だヘンリー講釈の妾ぢやげ」と大笑ひになり侯爵夫人はコンコンと逃出してしまつた

六月十四日(1910.6.14)

●赤穂義士伝

一心亭辰雄講演

義士討入り(第一回)

(本文省略)

六月二十六日(1910.6.26)

○新講談予告

前後数年に亘り大好評を博し来りたる一心亭辰雄氏の講談赤穂義士伝も愈々近日の内に目出度大団円を告ぐる運びに至りたるを以て本社は更に是に代るに当時講談界に名人の聞えある真龍齋貞水氏に囑し氏が最も得意の読物たる

武士道銘々伝

真龍齋貞水講演

をば引続いて掲載する事となしたり貞水氏の講演の如何に教育的にして然も趣味多きかは世既に定評あれども本講談は特に材料の蒐集詮索に力を用ひたるものなれば掲載の暁は必ずや読者を満足せしむるに足るべきを疑はざる所也

六月二十七日 (1910. 6. 27)

○新講談予告

前後数年に亘り大好評を博し来りたる一心亭辰雄氏の講談赤穂義士伝も愈々近日の内に目出度大団円を告ぐる運びに至りたるを以て本社は更に是に代るに当時講談界に名人の聞えある真龍齋貞水氏に囑し氏が最も得意の読物たる

武士道銘々伝

真龍齋貞水講演

をば引続いて掲載する事となしたり貞水氏の講演の如何に教育的にして然も趣味多きかは世既に定評あれども本講談は特に材料の蒐集詮索に力を用ひたるものなれば掲載の暁は必ずや読者を満足せしむるに足るべきを疑はざる所也

六月二十八日 (1910. 6. 28)

○新講談予告

前後数年に亘り大好評を博し来りたる一心亭辰雄氏の講談赤穂義士伝も愈々近日の内に目出度大団円を告ぐる運びに至りたるを以て本社は更に是に代るに当時講談界に名人の聞えある真龍齋貞水氏に囑し氏が最も得意の読物たる

武士道銘々伝

真龍齋貞水講演

をば引続いて掲載する事となしたり貞水氏の講演の如何に教育的にして然も趣味多きかは世既に定評あれども本講談は特に材料の蒐集詮索に力を用ひたるものなれば掲載の暁は必ずや読者を満足せしむるに足るべきを疑はざる所也

六月三十日 (1910. 6. 30)

○新講談予告

前後数年に亘り大好評を博し来りたる一心亭辰雄氏の講談赤穂義士伝も愈々近日の内に目出度大団円を告ぐる運びに至りたるを以て本社は更に是に代るに当時講談界に名人の聞えある真龍齋貞水氏に囑し氏が最も得意の読物たる

武士道銘々伝

真龍齋貞水講演

をば引続いて掲載する事となしたり貞水氏の講演の如何に教育的にして然も趣味多きかは世既に定評あれども本講談は特に材料の蒐集詮索に力を用ひたるものなれば掲載の暁は必ずや

読者を満足せしむるに足るべきを疑はざる所也

七月一日 (1910. 7. 1)

●赤穂義士伝

一心亭辰雄講演

義士最後 (第一回)

(本文省略)

七月一日 (1910. 7. 1)

○新講談予告

前後数年に亘り大好評を博し来りたる一心亭辰雄氏の講談赤穂義士伝も愈々近日の内に目出度大団円を告ぐる運びに至りたるを以て本社は更に是に代るに当時講談界に名人の聞えある真龍齋貞水氏に囑し氏が最も得意の読物たる

武士道銘々伝

真龍齋貞水講演

をば引続いて掲載する事となしたり貞水氏の講演の如何に教育的にして然も趣味多きかは世既に定評あれども本講談は特に材料の蒐集詮索に力を用ひたるものなれば掲載の暁は必ずや読者を満足せしむるに足るべきを疑はざる所也

七月二日 (1910. 7. 2)

○新講談予告

前後数年に亘り大好評を博し来りたる一心亭辰雄氏の講談赤穂義士伝も愈々近日の内に目出度大団円を告ぐる運びに至りたるを以て本社は更に是に代るに当時講談界に名人の聞えある真龍齋貞水氏に囑し氏が最も得意の読物たる

武士道銘々伝

真龍齋貞水講演

をば引続いて掲載する事となしたり貞水氏の講演の如何に教育的にして然も趣味多きかは世既に定評あれども本講談は特に材料の蒐集詮索に力を用ひたるものなれば掲載の暁は必ずや読者を満足せしむるに足るべきを疑はざる所也

七月三日 (1910. 7. 3)

○癩患者を慰問す

埼玉県所沢町の原田勇吉 (五七) は二十有余年間魚商を営み今日にては数万の財産を積みたるも曾て一日も怠らず家業を励みつゝある間に神仏を崇めて喜捨を為せる事も尠ばなりしが此頃北多摩郡東村山村に設置されし全生病院を訪ひ癩患者を見て其憐れなる有様に深く同情し団扇と五もく寿司の折詰とを患者全体に寄贈せりと云ふ尚講談師南鶴は同院を訪ひ得意の講談に半日の慰藉を与へたりといふ

七月三日 (1910. 7. 3)

○新講談予告

前後数年に亘り大好評を博し来りたる一心亭辰雄氏の講談赤穂義士伝も愈々近日の内に目出度大団円を告ぐる運びに至りたるを以て本社は更に是に代るに当時講談界に名人の聞えある真龍齋貞水氏に囑し氏が最も得意の読物たる

武士道銘々伝

真龍齋貞水講演

をば引続いて掲載する事となしたり貞水氏の講演の如何に教育的にして然も趣味多きかは世既に定評あれども本講談は特に材料の蒐集詮索に力を用ひたるものなれば掲載の暁は必ずや読者を満足せしむるに足るべきを疑はざる所也

七月四日 (1910. 7. 4)

●武士道銘々伝

真龍齋貞水講演

深堀喧嘩騒動 (一)

(本文省略)

九月十八日 (1910. 9. 18)

○(広告)

趣味津々近來の読物

桃川如燕君演

由井正雪

実働卅五銭郵税四銭

春陽堂 東京日本橋振一六一七

十月三十日 (1910. 10. 30)

●(講談)頼朝

松林伯知口演

今回御社の一万二千号の御祝典によつて、伯知へも一席口演いたすやう仰を受け、伯知身に取りますては此の上の光栄は御座いません、尤も伯知は御社に数年前御掲載になりました、藤野君の平壤包圍攻撃、平田君の黄海海戦誌等、伯知署名で御広め下さいました為め忝けなくも或るやんごとなき御方の御前に口演いたしました光栄も御座いますれば、何か珍しきものと存じましたが、是と云ふ新材料を見出しませんから、源氏の棟梁となる兵衛佐頼朝が蛭ヶ小島より討て出で、源氏一統の世と為した事の端緒を口演いたします、(以下省略)
十二月十五日 (1910. 12. 15)

●高輪中学校の赤穂義士祭典

高輪中学の赤穂義士祭典は例年の如く昨日午前九時から講堂を祭場に宛て、執行された……やがて提灯行列の予定時の五時になつて……午後八時頃帰校し桃川如燕の講談、高橋某の薩摩琵琶等の余興があつて義士に因める甘茶の接待あり午後十時頃散会した
十二月三十一日 (1910. 12. 31)

○●痴遊独演会 一月二日より八日まで午前十一時より神田の川竹に出演初日は西郷南洲三

たび流罪の事情、中井桜洲、征長中止と宮島談判

○●一心亭辰雄 今回浅草新福富町二事務所を設け一日よりは馬喰町の常盤へ出演す

明治四十四年 (1911)

二月二日 (1911. 2. 2)

●武士道銘々伝

(禁転載)

真龍齋貞水講演

関口弥太郎 (一)

(本文省略)

二月八日 (1911. 2. 8)

●三崎座の名人大会 三崎座主が営利の目的を外にして演芸趣味の普及を計る為東京名人大

会なる会名の下に今回同座に都下第一流の名人連を招き低廉な場代で開場したのは同座とし

て実に破天荒な興行である、……第五風谷の新講話「心中船」もう一息突込んだらと思はれ

る節もあつたが時間の都合もあらうからこれも先づよし……

三月十九日 (1911. 3. 19)

●幸福

上司小剣

▲私は新聞に出る講談の続きものを読むのが好きになつた。下らないと思ひながら矢張読

む。武士道とか俠気とか義理とか云ふ軌道にキチンと嵌つて、スラ／＼と進んで行くのであ

るから、この次は何うなると云ふことがチャンと分つてゐるが、分つて居ても読まずにはあ

られない。

……

三月二十一日 (1911. 3. 21)

○●燕林の渡英 奇行講師桃川燕林事坂本忠一郎(四五)は今回英帝戴冠式拝観の為め来

月十二日横浜出帆の加茂丸にて渡英する由なるが今回は興行或は随行に非ずして全く漫遊の

為め渡英する物にて帰途巴里及び羅馬市の博覧会を見物旁々同地の興行物演芸界の視察を為すといふ同人は至つて気概ある者にて奇行多く仲間中にては氣違ひ燕林など、云ひ居れど本人は一向平氣にて時々奇行を行へり今其の一例を挙げんに未だ小燕林と云へる時代一夜漂然羽織袴を借着して某華族家家令に化け赤坂某待合に乗込み数名の芸妓を招きて騒ぎたるが流石本職丈けに其の声色は実に巧みなりしと然れど遂には化の皮表はれて馬を引きて家へ帰ったりと猶同人は去る廿四年軍艦金剛に乗りて北亞米利より南洋に趣けるが帰途布哇の内乱が生じて我浪花艦が同地へ趣く事となりしに便乗し数回忠義義烈の講演を為せる事あり時の艦長は今の東郷大将にて東伏見宮殿下には未だ海軍少尉にておはせしと今度同人が乗船するが加茂丸には又同殿下東郷大将及び乃木大将も乗船さる、由なれば今度も又殿下の御前にて講演出来るると大喜びなりといふ(顔写真付き)

四月十一日 (1911. 4. 11)

●〔第九回〕読売新聞読者懇親会

一昨日本郷座にて開催

……

▲風谷氏の講談

……次ぎは細川風谷氏の講談「茶碗割」と言ふ出物で元祿の俳人北条団水の昼夜用心記の一節に氏一流の味をつけたもの曾て紅葉山人が新講談として試られしものだと言ふ因縁のあるものなり無闇と張扇を叩きつけ、そして薄汚ない事をペラ／＼喋る者と相場がきまつてゐる中に流石は風谷氏なりと感服せしめたるもの少からざりき

四月十八日 (1911. 4. 18)

○晴風翁のお祝ひ 玩具博士と綽名された清水晴風翁の還暦祝賀会は愈十六日午後一時から神田連雀町の金清楼で催された式後講武所芸妓連の踊、貞水の講談、晴風翁作品陳列室の文字焼、どっこい、みつ豆、同翁作画玩具図の抽籤、宝引など趣味ある余興あり尚來賓には飛騨名産一位一刀彫記念印材を頒つて夕方散会

五月二日 (1911. 5. 2)

○講談落語浄るり会 二日四谷見附外大泉にて宝集家金蔵催主と成り故人若扇、錦城齋一山追善の爲め講談落語浄るりの大会を開会すと

○講談奨励会 講談師若手連の組織せる同会は其第三回を来る十三日午後五時より常磐木俱樂部に於て催す筈

五月十一日 (1911. 5. 11)

○講談奨励会 十三日午後六時より常磐木俱樂部にて

六月七日 (1911. 6. 7)

○▲家庭講談会 新講談師大谷内越山は戸川残花加藤咄堂両氏の後援を得て家庭講談会を起し第一回を来る十一日日本大学構内に開くと演題は「大谷刑部」「妖怪」等にて残花咄堂両氏の大演説ある由

六月十日 (1911. 6. 10)

●通俗教育の一方面

危険思想を含んだ文書とか、淫猥に近いことを並べた演劇とかは、嚴重に過ぐると思はれる程に取締が行はれてゐるが、仁義や忠孝や義勇や、さう云ふものを表看板にして、裏面には殺伐、残忍、粗暴、蛮行を教へてゐる講談稗史或は演劇の類の毫も制裁を加へられないばかりでなく、寧ろ健全なる読み物や観もの、やうに奨励される傾きもあるのは、笑ふべきこと、と云ふよりは悲むべき次第である。先頃或る地方で小学校の児童が其の友に小刀で斬り付けて重傷を負はしたことがあつた、それを段々調べて見ると、何やらの講談に、自分と同じ年齢の子供が鎌を以つて一悪漢の脇腹を刺してこれを殺し、大に其の勇気を誉められたが、此の子後に立派な勇士になつて名を挙げたと云ふことのアつたのを聴いて、子供心にむら／＼と其の講談中の架空人物になつて見たい心を起し、些細のことから友と争いくふたの機会に刃傷沙汰を起したのであつたさうな。

……

六月十五日 (1911. 6. 15)

○講談奨励会 十七日(土曜)午後六時より常磐木俱樂部にて

○柳連の演芸大集会 十六、七の両日午後五時より本郷の若竹亭にて

七月十五日 (1911. 7. 15)

●各演芸会 △落語講談有名会(神田白梅亭) △お伽娯楽大会(牛込高等演芸館) 以上十五日正午より……

七月三十日 (1911. 7. 30)

○若燕帰る 桃川若燕は昨夏より朝鮮支那を巡業し居り今回帰京し新講談「朝鮮」「通俗教育百種談」と銘を打ち昼は四谷の京山亭夜は麻布の一の亭へ出演すると

八月十六日 (1911. 8. 16)

○如燕独講 桃川如燕は本日夜より神田松ヶ枝亭にて新講談「沖の船唄」「和久半太夫子別」「大石瀨左衛門賊調べ」「原惣右衛門実伝」の四席

八月十九日 (1911. 8. 19)

●武士道銘々伝

(禁転載)

真龍齋貞水講演

宮本武蔵（一）

（本文省略）

八月二十五日（1911. 8. 25）

○▲通俗教育講談会 東京府教育会の第四回通俗教育講談会は本日午後七時より神田和強楽堂に開き二本博士の腹式呼吸に就ての講話神田松鯉の講談赤穂義士伝の外数番の活動写真ありと

九月四日（1911. 9. 4）

○▲講談奨励会 来る九日午後六時より常盤木倶楽部にて典山、伯山の二名も補助に加はると

九月三十日（1911. 9. 30）

○●講談奨励会の園遊会 講談奨励会は昨日午前十時より大森八景園にて創立記念園遊会を催せり来会者百余名貞山、貞丈、伯遊等の講釈師連に小さん、金馬、むらく等の落語研究会員がお客に來りて合併の相撲もあり競落会の芸出しには梅坊主が法界坊のやうな姿しての阿呆陀羅經殊に好評を博し馳て模擬店が開かれ折柄の雨にもめげず突体もないことに騒ぎ廻つて午後三時頃散会せり

十月十三日（1911. 10. 13）

●▲演芸有名大会 滞京中なる桂文吾の爲め円右、小さんの兩名発企となり十五日（日曜）午前十一時より神田立花亭にて催す番組左の如し

……堀部安兵衛印籠？（貞山）……

十一月十三日（1911. 11. 13）

○▲雑誌講談倶楽部 本郷団子坂の講談社より去る天長節を以て発刊せる雑誌講談倶楽部は従来同種のもの絶無なるを以て頗る世人に歓迎せられ今回三版を發行せりと

十一月十七日（1911. 11. 17）

●▲隣の噂 シヤク師の伊藤痴遊君は浅草で府會議員に當選して以来エラクなつた▲明十八日開催する下谷簡易図書館講演の余興として何か一席と相談に及ぶと痴遊君巖然威儀を但し我輩は余興などには出ぬ▲吏員如才なく「演題西郷南洲論講演者府會議員伊藤仁太郎君」と書いて如何でしょうと御意を伺ふと▲伊藤府會議員破顔一笑「ウム講釈料はいらぬ下れツ」……

十二月十二日（1911. 12. 12）

○▲若燕の清国動乱講演 桃川若燕は清国漫遊中計らず大動乱起り実況を見聞せしとかにて其状況を十六日の夜より神田白梅にて演ずと

十二月十四日（1911. 12. 14）

○▲義士伝大会 十四日午前十一時より人形町の末広にて開催の番組は

南部坂（貞吉） 不破数右衛門（伯鶴） 村松三太夫（英昌） 二度目の清書（馬琴） 弥次郎と大石の出家（南玉） 西入（松鯉） 堀部安兵衛（桃葉）

十一月十五日（1911. 12. 15）

●▲赤穂義士討入の日 昨十四日は赤穂義士討入りの記念日なれば墳墓の所在地たる芝高輪泉岳寺にては高輪中学校主催となり同日正午より講堂に於て第五回義士会を開き……それより余興場に於て桃川若燕の講談及び薩摩琵琶等あり……

明治四十五年（1912）

一月三十一日（1912. 1. 31）

○●講談を聞いて賊 福島県田村郡三春町三七又次郎長男鈴木庄司（二二）は日本橋区村松町三一帽子製造業山田達春方に雇はれ中昨年十二月両国立花亭にて鼠小僧の講談を聞き俄に悪心を起し同二十日家出して両国回向院内の鼠小僧の墓に詣り市内千軒より金品を窃取する迄逮捕されぬやうにと祈願し浅草区浅草町三一木賃宿千屋田方に止宿し同十二月十日夜本郷区湯島天神町一の三豆腐商原沢屋方に忍び入り現金三十円を窃取せし以来外六十八ヶ所に八百余円の金品を盗み贓品を入質して吉原京町新宝来楼将棋中将（二二）の許に浮れ居たるが一日坂本署の手に押へられ昨日検事局へ送らる

二月十日（1912. 2. 10）

○▲講談落語三人会 十一日正午より神田の立花亭にて

二月二十五日（1912. 2. 15）

○▲美当一芳愈々来る 先きに報じたる美当一調の二世一芳は愈々昨日午後二時新橋着の汽車にて上京し在郷軍人保護会の主催にて二十五日帝国ホテルにて試演の上同日午後六時より牛込の高等演芸館に出演する由、同人が師の称号は先年小松宮大妃殿下より特に賜りたる者にて最も得意の戦況談は旅順閉塞の一段なりと

二月二十六日（1912. 2. 26）

○●一芳の新軍談 昨日午後二時より帝国ホテルに於て美当一芳の「駆逐艦隊の旅順夜襲」を聴く、節が内容に合はして勇壮管竹以至極上品なのが何より嬉しかつた、そして義士伝等の如く後人の捏造や空想で作上げたものと違つて吾々の父なり兄なりが実際に経て来た恐るべき戦争を事実其俚に語るののであるが、事実といふ偉大なる力は百千の名人が有ゆる技巧を積重ねて語り聞かせるよりは遙に聴衆の心を惹附けた、此の軍談に依つて日本の軍人が如何に勇敢であつたかといふ事がよく窺はれる、真に近來の血湧き肉躍る聞物であらう

○▲演芸館の一芳 昨日より開場せし高等演芸館の美当一芳は向ふ十日間出演の筈にて本日

よりは昼夜二回(昼は正午より)の開演に改め軍人学生等の便を計る由

二月二十八日(1912.2.28)

●△赤行燈と先祖様

B 記者

▲赤行燈から講釈 ……四人で赤行燈を出てから「豆ヤア、熱かい豆」屋に此の近所の講釈席を問ねる。色物席と女義席だけを訓へてくれる、四人で須田町まで歩く、小柳亭に入つたり、不如帰通のジョンさん、伯知の不如帰を聞きたい、とではなかつたが私等が聞かせたかつたのなり。文慶、桃林、いづれも駄洒落が多くて私には浪花節の方が結句い、洒落なら落語家にお馴染あり、且つは「講釈師本田が出れば」といふ修羅場が新派なり、不如帰の戦争なり。私は不如帰だけで帰つたのなれば後から本物が出たかどうかは知らず。Aさらいか。

三月十二日(1912.3.12)

○家庭新講談(細川風谷著実業之日本社発行)

細川風谷君は嘗て尾崎紅葉君、巖谷小波君、江見水蔭君など一代の才人が寄り集つて組織したる硯友社の同人で、少しは文章も書いた人。一念発起するところあつて身をやつして講談師となり、貴婦人や紳士の面前に立て滔々と喋舌り来り喋舌り去る、うまからぬではなけれども苦勞するほど人に聞かれず、是れは文章も作つて見、学問もして見た結果、無学無文の人のするやうに馬鹿も云へば嘘も申されず、ごまかしは勿論出来ず、場所柄も考へたりなどして、そして無学無文の人のすることを云ふ、面白からう筈がなし。まして活字は平らなものなれば、声のやうに抑揚頓挫喜怒哀楽の調なき故に、此の本ねから興味なきもの、と云つてしまへば夫れまでなれど、家庭向の講談なり、いやらしき文字のなきだけを取柄にすべし。「誉の夫婦」「孝子正宗」「貞婦間かの」「烈女吉村れつ」「貞婦清水美代」「堀部妙海尼」「正直久助」「永井の局」「大政所」の九篇、先づは無難のものばかり。「惺」(四六版三百十頁価五十銭)

四月一日(1912.4.1)

○▲講談落語大会 講談社の主催にて、来る三日午前十時牛込高等演芸館に同大会を開き伯知、小円遊其他の名人出演する由

四月二日(1912.4.2)

○講談と戦記物

△読書趣味の推移▽

近頃はどう云ふ本が読まれるかと云ふに、場所にも依り、程度にも依つて、読者と図書館との関係は何処も同じではあらうが一の図書館の状態を以て其の都市全体の状態と見ることは

勿論出来ない。併し最も通俗的であつて、学術的研究のと云ふよりも寧ろ一般的享樂的に傾いてゐる図書館の景況は或は都市の一面に於ける読書界の状況を語る者であるかも知れぬ。即ち日比谷図書館に於て之を見た「惺」

傾向と云へば云ふものの、何に原因するかは分らぬが近頃最も多く読まれるのは相場に關した書籍で、重に株の事を書いたものである。其の次が戦記もので、日露戦争に關した、例へば「此一戦」とか、「鉄蹄夜話」とか、「血煙」とか、そう云つたやうなものが読まれ、それから伝記もので、更に読まれないのは専門的のもの、又は教育的のものである。殊に教育的なものなどは読者皆無と云つても善いくらゐる。

▼修養談と講談 欧米漫遊の紀行文なども相当に見られ、写真帖なども中々見るものがある。文芸の書に至つては、どちらかと云へば所謂世話ものが最も多く読まれて、純文芸的のもの余り読まれない。名士の修養談なども非常に好況で、講談ものも多し中に赤穂義士に關したものは何に關はず最も多くの読者を有してゐる。雑誌も学術的とか知識などを考へて作られたものよりも娛樂的のものが多く見られてゐる。

▼投機的傾向 之を要するに、世は益々物質的に進歩發達して投機的知識は増し、社会の複雑となるに従つて精神の慰安を求むるに傾く。人は實際世間の實際的狀態に飽いて、更に空間に向つて何事かを計画し企図してゐることが分るであらう。相場の本が最も読まれ、之に次ぐに戦記物、伝記物、講談物、紀行談、写真帖などが読まれ、嘗て非常に読まれた養鶏法とか農業に關した本などは殆ど見やうと云ふものもなくなつてゐる。移行行く世の現象とは云ひながら、文芸委員会のために広告された本も少しは見られるが、蓋しそれも極めて少数で、矢張り人の眼は利の爲めに輝いてゐる。

四月十三日(1912.4.13)

●▲東西名人会 十三日は

……伊賀の水月(貞山)……

四月十八日(1912.4.18)

●▲立花亭の三遊会 十八、九の両日開演の番組は……後藤半四郎、近江文次(貞山)……

四月二十九日(1912.4.29)

○▲如燕、貞水舌戦会 廿九日夜京橋山村亭にて言行一致、今世力士伝(貞水) 隅田川出世の駒(如燕)

●▲立花亭 廿九日より左の番組

……義士伝(貞山)……

四月三十日(1912.4.30)

○●迪宮殿下の御誕生日

△貞水の講談を聴かせらる

昨廿九日は皇孫迪宮裕仁親王殿下第十二回の御誕生日に当らせらる、より東宮御所にては講
釈師早川貞水を召させられ東宮妃殿下を始め三皇孫殿下の御前にて「富士の巻狩」「小野川
と雷電の相撲」「長短槍の試合」の三席を語らしめ給ひいと御感興を催させ給ひしが去る廿
七には麻布御殿にて常宮、周宮、泰宮、富美宮の四殿下お揃にて同じく貞水を召させられ
「神崎の堪忍袋」「山本昆寛の伝」の二席を語らしめ給ひいと御感興に入らせられしが一代の
光栄を身に負ひし貞水はいと面目を施して恭しく御前を退出したり

六月三日 (1912. 6. 3)

●▲真砂座演芸会 三日の番組は

△講談 (伯鶴) ……

六月十四日 (1912. 6. 14)

○▲貞水の帰朝 南満鉄に招待されて満韓を巡遊し至る処に講演したる早川貞水は来る十七
日帰朝する筈

六月二十一日 (1912. 6. 21)

○●〔満州〕お喋り旅行

△講談師貞水帰る

内務省の囑託講談師として将たまた本紙の講談担当者として夙に声名ある教育講談士早川貞
水は曩に南満鉄の招聘に応じて同社の従業員及び同地在住者慰藉の爲め同地に赴いたが昨日
午後二時新橋着の汽車にて無事帰朝した、何にせよ三十三日間も昼夜立続けの長講とて嘸か
し疲れ果て、居るならんと思ひの外不変の元氣にて次の如く記者に語る

▲甲板へお辞儀 何しろ卅三日間ものべつ幕無しに口演したんですからその折の事などを詳
しく申上げて居た日にはそれこそ一日費つて了ひます、丁度大連へ上陸すると直ぐでした、常
磐艦長の小笠原子爵から御招待に預つて疲れても居やうが是非との事で同地の扇芳亭で、子
爵の御藩中の方々が彼方にも沢山御いでになりますから其方々に「閑院宮殿下」と「長短槍
試合」の二席を御聴かせ致しました、それに就ては面白い話があるんです、丁度小笠原艦長
や国沢副総裁なんて御歴々の御乗船になりました船も矢張私の乗りました台南丸でござ
いましたので、それは後にわかりました、其船中で黒い質素な背広服をお着けになつた一
人の方がニコ／＼笑ひながら私のそばへ来られて「君は確か貞水君だつたね、毎度君の噂
は福岡から聞くが過日の皇孫殿下の御前講は大層御意に召したやうだね、先日殿下にあのう
ち何れが一番御意に召しましたと伺つたら「長短槍試合」が殊に面白かつたと仰せられ非常
にお喜びになつていらされたよ」と云はれるので何れ高貴の方に違ひ無いが「どなた様で
いらつしやいますか」と伺つたら「十二海軍の者だよ」とばかり仰言つて笑つてゐられるの

で氣付いて見ると小笠原様、トンだ失礼を致しましたと慌て、お辞儀をしたら船の中の事と
てコッソリと頭を陀つたやうなわけで大滑稽ツマリその縁から御招待に預つた訳なんです
▲百五十回の口演 それから船中では国沢副総裁殿の御好みで乗合一同に「言行一致」を一
席口演致しましたそれで大連に参つてからは貞水よく来てくれたツてんで白仁民政長官から
先づ御招待に預り昼飯の御馳走になつて長官の御好みで同地の中華学堂に於て中学生徒、お
役人等約千人の前で「柳重兵衛の天狗問答」「小野川に雷電」の長講をやつたのを始めと
し各学校の依頼、又は星野参謀長其他陸海軍等の御歴々の御招待で旅順へ行つてやつ
たのを合せて丁度百五十回といふもの朝、昼、晩と碌に休憩して間もないやうな有様で
皆三時間宛も口演したのですから歯も何もたまりませんこんな壊してしまひました、其他
いろ／＼の滑稽談やら馬賊の中を通つた事やらお話したい事は沢山にありますが余り長くな
つてはいけませんまいから止めて置きます云々

六月二十三日 (1912. 6. 23)

○▲講談琵琶三人会 本日午後六時半より神田橋際なる和強楽堂に開催出演者は琵琶側、永
田、田村、有坂講談側、細川、大島の五名

六月二十四日 (1912. 6. 24)

○▲寄席の木戸銭改革 都下の寄席は従来の木戸銭場内一般均一制度なるが今度下谷の鈴木
亭主卒先者となり来月一日より場内の客席を二分して一等、二等に分ち一等席は従来より多
少値上げとなるも其代り二等席は十銭に値下げし棧敷の外は全部二等席に宛る事となし他席
の思惑如何に拘はらず自席丈け実行する由

七月七日 (1912. 7. 7)

●芝居と寄席

徳田秋声

……

そんな有様であるから、単に古い芝居ばかりしてゐる歌舞伎座とか、或は講談や落語の旧
来の寄席などは著しく影が淡くなつて来た。……旧来の寄席なども矢張夏向きに出来てゐ
る。講談の寄席などには、昼寝をするにも夜の涼みにも適當してゐるところがある。……

七月二十一日 (1912. 7. 21)

○▲興行物遠慮

目下興行中の都下各劇場中歌舞伎座の雲右衛門は廿日限り中止することとなし又帝国劇場当
事者は停止しては却つて不敬に亘らざるやと極めて慎重なる態度を以て興行を続ける考へな
りと語り其の他明治、新富、東京、宮戸の四座は警視庁より何とか通達のある迄は興行を続
くる由、尚ほ其れ以外の小劇場或は寄席中には御遠慮申上げる所もまたその俣になし居る所

もありて一様ならず併し市内一般殊に花柳界などにて此際音曲をも御遠慮するが宜しからんとて各自謹慎の態度を取ることとなせるより昨夜の如きは何となく寂寥を感じしめたり

七月二十二日 (1912. 7. 22)

●▲寄席は休まず

△活動は午後丈興行

都下の各寄席中色物席は神田の白梅亭を始め廿余軒何れも太鼓三味線等の鳴物を抜きて静粛に興行し居れるが中に金沢亭は廿日夜より全く休席し宮松、若竹等の重なる義太夫席は警察の達示を待ち居れり尚ほ講談席も未だ休席に至らず……

大正元年八月三十日 (1912. 8. 30)

○▲蘆州独演会 小金井蘆州は卅一日夜四谷喜よし亭で独演会を開き得意の塩原馬の別、千葉の三島の槍、宗吾直訴、国定忠次、首実検の四席を口演する由

大正元年九月三日 (1912. 9. 3)

○▲各席の謹慎休業 都下の寄席全部は来る十三日の御大葬当日は勿論引続き十五日迄何れも謹慎休業を決議せり

大正元年九月二十五日 (1912. 9. 25)

○▲予告

〔講談〕乃木大将伝〔来月一日より掲載〕

早川貞水講演

千古武士道の典型たる乃木大将一代の事蹟は、講談の形を以つて来る一日より本紙上に連載せらるべし。講演者は斯壇の大家にして現に本紙の為に「武士道銘々伝」を講じて喝采を博しつ、ある早川貞水なり。貞水軍に三十七八年役に従ひて観戦の経歴あり、故大将にも面謁して其の高潔なる風格に接したることあり、大将の薨ずるや、平生手録せる処の材料に、新らしく蒐集したるものを加へて一篇の「乃木大将伝」は組み立てられたり。此の篇陣営に於ける大将はもとより、生立の初めより、家庭に於ける大将の生活、並びに貞烈無比の最後を遂げたる大将夫人の日常にも及び、有髯男子の必読を要するのみならず、婦人小児の読みもとして教訓の中に幾多の高雅なる趣味を掬するを得ん。尚従来掲載の「武士道銘々伝」は中止することなくして続載し「新版御伽草子」は第五面に移して、是れまた続載すべし。

大正元年九月二十六日 (1912. 9. 26)

○▲予告

〔講談〕乃木大将伝〔来月一日より掲載〕

早川貞水講演

千古武士道の典型たる乃木大将一代の事蹟は、講談の形を以つて来る一日より本紙上に連載

せらるべし。講演者は斯壇の大家にして現に本紙の為に「武士道銘々伝」を講じて喝采を博しつ、ある早川貞水なり。貞水軍に三十七八年役に従ひて観戦の経歴あり、故大将にも面謁して其の高潔なる風格に接したることあり、大将の薨ずるや、平生手録せる処の材料に、新らしく蒐集したるものを加へて一篇の「乃木大将伝」は組み立てられたり。此の篇陣営に於ける大将はもとより、生立の初めより、家庭に於ける大将の生活、並びに貞烈無比の最後を遂げたる大将夫人の日常にも及び、有髯男子の必読を要するのみならず、婦人小児の読みもとして教訓の中に幾多の高雅なる趣味を掬するを得ん。尚従来掲載の「武士道銘々伝」は中止することなくして続載し「新版御伽草子」は第五面に移して、是れまた続載すべし。

大正元年九月二十七日 (1912. 9. 27)

○▲予告

〔講談〕乃木大将伝〔来月一日より掲載〕

早川貞水講演

千古武士道の典型たる乃木大将一代の事蹟は、講談の形を以つて来る一日より本紙上に連載せらるべし。講演者は斯壇の大家にして現に本紙の為に「武士道銘々伝」を講じて喝采を博しつ、ある早川貞水なり。貞水軍に三十七八年役に従ひて観戦の経歴あり、故大将にも面謁して其の高潔なる風格に接したることあり、大将の薨ずるや、平生手録せる処の材料に、新らしく蒐集したるものを加へて一篇の「乃木大将伝」は組み立てられたり。此の篇陣営に於ける大将はもとより、生立の初めより、家庭に於ける大将の生活、並びに貞烈無比の最後を遂げたる大将夫人の日常にも及び、有髯男子の必読を要するのみならず、婦人小児の読みもとして教訓の中に幾多の高雅なる趣味を掬するを得ん。尚従来掲載の「武士道銘々伝」は中止することなくして続載し「新版御伽草子」は第五面に移して、是れまた続載すべし。

大正元年九月二十八日 (1912. 9. 28)

○▲予告

〔講談〕乃木大将伝〔来月一日より掲載〕

早川貞水講演

千古武士道の典型たる乃木大将一代の事蹟は、講談の形を以つて来る一日より本紙上に連載せらるべし。講演者は斯壇の大家にして現に本紙の為に「武士道銘々伝」を講じて喝采を博しつ、ある早川貞水なり。貞水軍に三十七八年役に従ひて観戦の経歴あり、故大将にも面謁して其の高潔なる風格に接したることあり、大将の薨ずるや、平生手録せる処の材料に、新らしく蒐集したるものを加へて一篇の「乃木大将伝」は組み立てられたり。此の篇陣営に於ける大将はもとより、生立の初めより、家庭に於ける大将の生活、並びに貞烈無比の最後を遂げたる大将夫人の日常にも及び、有髯男子の必読を要するのみならず、婦人小児の読みも

のとして教訓の中に幾多の高雅なる趣味を掬するを得ん。尚従来掲載の「武士道銘々伝」は中止することなくして続載し「新版御伽草子」は第五面に移して、是れまた続載すべし。
大正元年九月二十九日 (1912. 9. 29)

○▲予告

〔講談〕乃木大将伝〔来月一日より掲載〕

早川貞水講演

千古武士道の典型たる乃木大将一代の事蹟は、講談の形を以つて来る一日より本紙上に連載せらるべし。講演者は斯壇の大家にして現に本紙の為に「武士道銘々伝」を講じて喝采を博しつ、ある早川貞水なり。貞水軍に三十七八年役に従ひて観戦の経歴あり、故大将にも面謁して其の高潔なる風格に接したることあり、大将の薨ずるや、平生手録せる処の材料に、新らしく蒐集したるものを加へて一篇の「乃木大将伝」は組み立てられたり。此の篇陣営に於ける大将はもとより、生立の初めより、家庭に於ける大将の生活、並びに貞烈無比の最後を遂げたる大将夫人の日常にも及び、有髻男子の必読を要するのみならず、婦人小児の読みものとして教訓の中に幾多の高雅なる趣味を掬するを得ん。尚従来掲載の「武士道銘々伝」は中止することなくして続載し「新版御伽草子」は第五面に移して、是れまた続載すべし。
大正元年九月三十日 (1912. 9. 30)

○▲予告

〔講談〕乃木大将伝〔来月一日より掲載〕

早川貞水講演

千古武士道の典型たる乃木大将一代の事蹟は、講談の形を以つて来る一日より本紙上に連載せらるべし。講演者は斯壇の大家にして現に本紙の為に「武士道銘々伝」を講じて喝采を博しつ、ある早川貞水なり。貞水軍に三十七八年役に従ひて観戦の経歴あり、故大将にも面謁して其の高潔なる風格に接したることあり、大将の薨ずるや、平生手録せる処の材料に、新らしく蒐集したるものを加へて一篇の「乃木大将伝」は組み立てられたり。此の篇陣営に於ける大将はもとより、生立の初めより、家庭に於ける大将の生活、並びに貞烈無比の最後を遂げたる大将夫人の日常にも及び、有髻男子の必読を要するのみならず、婦人小児の読みものとして教訓の中に幾多の高雅なる趣味を掬するを得ん。尚従来掲載の「武士道銘々伝」は中止することなくして続載し「新版御伽草子」は第五面に移して、是れまた続載すべし。
大正元年十月一日 (1912. 10. 1)

●乃木大将伝

早川貞水講演

第一回

(本文省略)

大正元年十二月四日 (1912. 12. 4)

○ (広告)

伊藤痴遊先生著●討人の巻 (再版出来)

痴遊義士伝

義士に負ふ処多き乃木大将は明治の花也赤穂義士は元禄の花也共に武士道を全ふし世道人心を驚醒せし偉大の傑士也痴遊先生夙に義士伝に深趣味を有し其壮烈なる快拳を賛して最も正確なる実伝を公にし研纂多年本伝銘々伝及び外伝を完成せんとす今や先づ討人の巻成れり徒に無根の事実を吹聴羅列せるものと其撰を異にし義士の義士たる真面目を發揮せる無類の好著 (大売捌 東京 北隆館書店)

大判形美装約三百頁

正価六拾錢送料八錢

東京神田区北乗物町四番地

日本書院

振替口座番式〇八六

大正元年十二月七日 (1912. 12. 7)

○ (講談) 岩見重太郎

(新春元旦の紙上より続載)

早川貞水講演

明治四十二年の秋より本年しかも去月五日の紙上に至る迄約四ヶ年間の長月日に亘り大好評の下に続載し来りし武士道銘々伝も紙面の都合に依り遺憾ながら乃木大将伝掲載中は一先づ是れを中止し乃木大将伝の大団円を告ぐるを待つて再びもとの如く新豪傑伝を掲載する予定なりしが読者諸君の切なる御希望に基き断然此予定を変更し武士道銘々伝をして復活せしめ好評を以て迎へられつ、ある乃木大将伝と併せ貞水独特の岩見重太郎伝を続載せんとす演者はお馴染の講談界の大家而して岩見重太郎伝は彼が十八番中の最も優なるものとして夙に世に定評あるもの其如何に面白くして如何に傑出せるものなるかは今茲ににに囀々を要せざるべし乞ふ是れを新春元旦よりの紙上に見よ

〔武士道〕銘々伝の復活

十一月十三日 (1912. 12. 13)

○ (広告)

歳末年始の絶好贈答品

内務次官床竹二郎先生書簡

〔文部省普通学務局長〕田所美治先生序文

文学博士芳賀矢一先生題言

文学博士黒板勝美先生題言

松林伯知

錦城齋典山

三遊亭円右

橋家円蔵 講演

挿画 昇雲画伯

講談落語選

ポケット入

美本全一冊 ふりかな付

挿入図画二百個 紙数八百頁

定価金一円也 送料内地八銭

本書は何れも斯界の名人が三寸不爛の舌頭に凡そ百種の面白き講談落語を読み込んだ蓄音機で殺伐な事柄や卑猥の話がありませんから家庭でも学校でも大きな声で読まれても少しも憚る所はありません

本書目次(総計壹百種)

出世の盃 車丹波守 碗茶の湯 滑稽相撲 武士氣質 阿閉掃部 平賀源内

二十四孝 春日局 半井法眼 助言 小楠公 道具屋 兜の由来 山田義

齋 蜀山人 出来心 鹿の裁判 天災 新羅三郎 稲荷の車 一休禪師

厩火事 熊王 日蓮上人 売り声 河村瑞軒 紅蓮尼 地震加藤 百人一首

大石良雄 相馬大作 芝居好 市川白猿 粗忽 二宮尊徳 素人芝居

松雲禪師 横田勘平 大婆 和歌三郎 山鹿素行 大高源吾 眼医者 新井

白石 倉橋伝助 芭蕉 牛の講釈 熊沢蕃山 馬琴 無筆の親 曾我兄弟

太田道灌 下女 伊能忠敬 小町娘 掛取 甘薯先生 忠僕直助 中山大

納言 酒井の太鼓 眞壁平九郎 探幽の屏風 花見の趣向 清正の誠忠 出世

の春駒 隅田川乗切 木村長門守 将棋の意見 大岡越前守 水戸西山公 木

下藤吉郎 脊割り正宗 謙信と信玄 槍持の義侠 三方一両損 豪傑の和歌 使

者の頓智 徂徠の報恩 柳田角之進 曲垣平九郎 三井の大黒天 秀吉明の封冊

を裂く 佐野山庄兵衛 最明寺旅日記 板倉内膳匠重矩 鳥居強右衛門勝忠 紀

国屋文左衛門 曾呂利新左衛門 芝浜の革財布 朱舜水と安東省庵 長柄堤の訣別

山内一豊の妻 赤垣源蔵重賢 宝生血塗の仮面 神崎与五郎則安 鬼小島弥太

郎と直江山城守 三村次郎左衛門 勝田新左衛門 幡随院長兵衛 以上

東京市神田区小川町一番地

電話本局一四二一

振替東京三五一三

文会堂発行

読売新聞に見る明治期講談(追加)

「読売新聞に見る明治期講談」(その一)(その二)における採録洩れを追加する。

明治八年(1875)

八月七日(1875.8.7)

○今年箱根の宮の下塔の沢をはじめ熱海その外の湯治場は一入にぎやかにて其内箱根辺へは東京より落語家(はなしか)、演史家(かうしやくし)、浄瑠璃かたり、芸妓などもまゐつて居り中々さかりで有るといふ

明治九年(1876)

一月十七日(1876.1.17)

○貴社の二百八十一号の落語家の欄一件は道外歳晩書の御厄介になつて漸く済口になりましたが亦もや新年早々から苦情が出来ましたその訳は正史の諸軍談のと立派に看板は出しながら読物はいつも白浪五人男だの国号をけがす日本左衛門或は国定の忠次杯にて放逸無慚の所ばかり読で多くは末を附ぬゆゑ勸善懲惡の教にならず亦甚だしいのは賽や壺皿のいはれを高座で申す人もあり(尤も真うち先生方にはないにもせよ)実に害に成とも為にはなりませんがい併し当今は追々開けて新聞に味を附塩梅よく聞せる先生も有るゆゑ一様には申せませんが是からは忠孝義の正しい事を讀で聞せて下さるやうに御頼申します今一つ申事は真うちが不快だとて三日も四日も続けて席へ出ぬことが有ましても以前と違ひ昼席には半札も出さずに仕舞ますが多くは空病で吞つぶれか何かで怠ると申ことよしや前座の者に得分を附るにもせよ真うちの先生を当に聞にゆくお客に対しては不体裁な訳ではありませんか謂ば代を取て品物を渡さぬやうなもの故以後は一際勉強してよろしく御教導をお頼み申す彼やうに悪口を申すも僕は講釈が大好ゆゑ抜かれぬ先に御年玉の横鎗を一本突入るものは三羽鳥に因みある

通二丁目 安田

一月二十八日(1876.1.28)

○貴社の二百九十三号に安田さんのお説を拝見致しましたが真に御尤でござります私も先日ある席へ参りましたら神稲水許伝を話して居りましたがあれは一体天明の頃に神刀徳次郎といふ盗賊があつたのを鎌倉時代にして小幡小次郎といふ忠義の士が不幸にして時に適ず却て讒者のために身を苦しめ所々流浪して度々管領家の討手を引受て戦ひに及んだやうに作つた稗史だとか聞きましたが彼やうな時代も事実も齟齬つたことを立派な先生方が高々と読では少と可笑いではありませんかどうぞ是からは確乎な聞て置けば為になるやうな事を讀で貰ひたいものでござります 南伝馬町村田

二月十八日 (1876. 2. 18)

○貴社の新聞第二百九十三号に隣町の安田兄いが咄し家の鬮一件から講談師のすつば抜しの事を投書でございましたが私も篤よりいひたかつたから尻馬に出かけ最ひとついひたい事が有ます咄しにもせよ講談にもせよ所々の張出しのびらに晴雨とも無相違出席又は今日より無間違出勤と断書が有ますがあれと見ますとすつばぬかしは常式のやうに聞えますが病氣なれば其時に断ても済さうな物また座料の半価はいふまでも無しなんとあの断書は止てもらひたい物でござります儲又聞人の方にもいひ分が有ます聞かせる身では骨を折て居ますにあたりへもかまひなくすうしく寝そべつてグウグウ大軒をかいて寝る者が有ますが百でも二百でも座料を出して寝に来ずともよさそうな者そんなに眠れば家に寝て居ればい、事に頭の上でカチ／＼パチ／＼た、き立られても目の覚ぬ白痴だから家に寝て居て若し泥坊でもないつて体ごと盗んでいかれてもしらぬくらゐで有りませうやう呆れるでは有りませんか式丁目の兄さん 通三丁目 高嶋屋の小僧

十月三十一日 (1876. 10. 31)

○信州松代紺屋町の山崎国次郎といふ者が同所の伊東伯山といふ軍談師へ三十円金を貸し夫がもつて二度も裁判官の御厄介となり国次郎は代言もするほどゆゑ弁舌巧者かた／＼は高座なれた口さきで立板へ水を流すやうに互ひにいひ張り終に伯山が負て証書を書かへました其文は原告人の指揮で元金は身上を持直すまで据おき利子は毎年春と秋に十席づ、軍談をして取つた金のうちお上へ納める税を差引き残りの金を半分にわけたものを利と極ましたがいからの利に当りますか

十一月二日 (1876. 11. 2)

○牛込神楽町の寄席へ田辺南林が出て熊本新聞を一席づ、話すので大層な入でござります

明治十年 (1877)

三月三十一日 (1877. 3. 31)

○西京の道場東側町の講談場へ尾崎南海が出席して昼は西京日々新聞、東京読売新聞、大坂

日報と諸国珍談をよみ夜は西京日々新聞と読売新聞を讀み可なりの入りだと聞きました
七月十九日 (1877. 7. 19)

○今年箱根または熱海辺の温泉は近来に無い不景気ゆゑ当込にして出かけた芸妓や落語家軍談師も咽喉が乾あがりそうて困つて居ります
七月三十一日 (1877. 7. 31)

○西京では鹿兒島暴動記などいつて軍談師が寄せて聞かせるのをその筋よりお差止めになつたといふ
十一月一日 (1877. 11. 1)

○此ほど東京府の社寺掛より区戸長へ口達に「旧談議僧体の者村落を徘徊し辻講談に異らざる説教をなし且願聴者の耳目を歛ばしめ募財の所業及び人民も亦之を是とし其説教の間に双盤伏鉦等を鼓鳴放歌類似の念仏を唱へ其音声の善悪を評するを以て快楽となすの風習之れ有る趣きに付区戸長に於て注意右体の所為あらば懇々説諭して矯正すべし」と有りました

明治十一年 (1878)

一月六日 (1878. 1. 6)

○土族が貸座敷渡世をしたり娘や女房に芸妓だの娼妓だのをさせては成ないと先ごろ御指令に成つたが土族で新聞讀みまたは軍談講釈の営業は許しても苦しく無いかと滋賀県より伺ひになると内務省より許しても苦しく無いが音曲を取交せて風儀を紊す類は決して成らないと御指令に成ました
二月十四日 (1878. 2. 14)

○美事は勉て探すから思ひも寄らない種を得ます是は飯倉町五丁目の石渡角蔵といふ男で早く親父に離れ十一二の時より読書を好み殊に軍書本が好で十九の年より芝赤羽根の門前へ出て大道講釈をいたし日々貰つた銭は少しも浪費にせず母お芳の好きな物を買つてあてがひ夜る家へ帰ると母の気を慰さめ足腰を揉でやり母が寝つくと種々の本を讀み常々の願ひといふは外になし母を案に送つて若しや死んだ時は人の厄介に成らずに可成りの葬式をしたいと心がけ母の吊ひ金として少しづつ貯た高が五十円これいつ死なれても葬式に差支へなし是からは氣立のい、女房を貰つて猶も母へ安心させやうと媒妁を以て相応な女房を娶り親子三人睦ましくして居るうちに角蔵は労症を煩らひ日に増し病が重るので際期るとき母に向つて先へゆく不幸の罪を只管わび眼を眠つて夫ぎり死んでしまひ母は勿論女房の歎き又兼て知り合ふ人々も孝行息子を失なつたとて他人ながらも涙を催し何にしても大道講釈で世を渡つた者ゆゑ残つた家族が憫然だとて芝の一貫堂、並木伝七その外が深切に後々の方法を立てくれ母も女房も大よろこび偕とりかたづけも済して簞笥の抽引を明て見ると兼て角蔵が貯へた五十円

が紙に包み是は母様の吊ひ金として有つたゆゑ近所の人まで驚ろくほどで有りましたが一寸聞くとナニ大道講釈ぐらゐと思ふが心がければ是此通り何と死人を置いて金の工面をする士族さん杯はチト面目ありますまゝ

十一月十六日 (1878.11.16)

○今月のお調べに東京府下の芸人にて鑑札を受けて居るものは富本節が十三人、河東節が九人、新内節が七十四人、富士松節が四十一人、歌沢節が三十一人、一中節が四十四人、岸沢節が十三人、長唄が九十九人、常磐津が三百人、荻江節が四人、義太夫が三百三十五人、清元が二百三十六人、あやつり人形が廿三人、落語が三百廿八人、謡曲が七十一人、吾妻能狂言が三人、吾妻狂言が五人、今様白拍子舞が一人、道薫派のあやつり人形が四人、手品が廿八人、道化踊が廿五人、軽業倭獅子が三十人、軽業が八人、足力曲持芸が一人、洋犬遣ひ芸が二人、鳥遣ひ芸が一人、硯円鏡手品が十一人、歌左衛門が十六人、演劇場持主が十一人、俳優が三百五十七人、女俳優が廿八人、踊が百七十七人、軍談師が二百八人で有りました

十二月二十九日 (1878.12.29)

○大坂府下難波新地の貸座敷かね定の悻徳太郎は子供のころから講釈が大好きにて台所で料理人が蒲鉾を拵へる俎板を借りて真柄々々々十郎左衛門が一尺八寸の太刀を振り廻して頻りに叩き立て居たが軍談師に成るには是非一度東京へ上らなければ本物に成らないとて稲荷の官位でも受る氣に成つて先ごろ東京へ出掛けて来て南林といふ名を貰ひ是でこそ日ごろの本望が協つたと此ほど大坂へ帰り同所の四ツ橋南詰の寄席へ出席し東京言葉でしやべりするので大層に景氣がよく聴人も可なり有る処から奴さんはいよ／＼乗地になり前席が済むと客に鬨を引せ一より十までを当り鬨として第一番の当鬨の者へはお手前物の娼妓を一晩づ、抱寝の切手を出すので独身の書生連が講釈は其方除今夜は一番鬨を引き当るなどと大張込みにて日が暮れると我も／＼とドヤ／＼詰め掛けるといふが變つた趣向だ

明治十二年 (1879)

一月九日 (1879.1.9)

○浅草代地の河長に手伝として居たおさくといふ女は田舎産れの野育ちにて二目と見られな醜婦の癖に浅草小路の大道講釈米吉を見染めなけ無しの鼻も埋まるほど白粉だか胡粉だかを塗り立て毎日子供の傳をしながら米吉の講釈を聞きに行くうち遂ひに日頃の念が届き米吉と割れ鍋に綴蓋の離れない中に成つたのでおさくは懐妊になり米吉の跡を追つ駆け歩くゆる流石の米吉もうるさく思ひ成るだけ隠れ逢はない様にするとお作は氣を揉み眼の色を替て方々を探し廻はる有り様は本氣の沙汰とは見えなといふが悪女の深情けにも困る

一月十七日 (1879.1.17)

○横浜佐の松座の今度の狂言は大岡政談と西南事件で昨日は同座へ松林伯円を呼んで俳優一同が西南事件の講釈を聞きました

一月二十一日 (1879.1.21)

○此ほど講談師のうち中座読みや若手の真打が寄合つて是までの悪弊を改ため大真打の圧制を受けないで自由に家業が出来る様に規則を立たとかいふ

二月二十三日 (1879.2.23)

○講釈師の頭取は是まで余り人数が多過ぎるので今度更に改正して燕尾、南龍、貞山、鱗慶、桃林の五人が頭取に選ばれました

三月十二日 (1879.3.12)

○淡路町二丁目三番地の温泉新泉楼にて来る十五十六の両日には午前十一時より午後五時まで松林伯円が新講談会を催します

四月二十二日 (1879.4.22)

○今度大坂にて講釈師の石川一口が催して尾上多見蔵の家を借りて始める演説会は俳優の実川延若市川蝦十郎などが出席するといふから定めて女の聴衆が多い事でありまじやう

八月十二日 (1879.8.12)

○今度大坂府にて有名の講談師石川一口が社長勝能進が編輯長近松八十翁が幹事となり同所本町橋西詰の和田清三郎の扣家にて劇場雑誌といふを発兌するといふ

九月四日 (1879.9.4)

○蠅殺町二丁目の鈴木良平の二男宇吉(十三年)は寄席や大道講釈で因幡小僧や鼠小僧杯の盗賊話しを聞き己も一番盗賊になり狸小僧とか鼯小僧とか人に呼れ講釈師の御厄介に成らないまでも新聞位には載せられて見たいと途方も無い心願を起しまつ手初めに近所の家へ忍び入りまたは往來の人の懐中物を抜きなどすることが両親へ知れて厳く異見を加へると宇吉は此様な氣の小さい親の側に居ては逆も立派な盗賊には成れないとて此ほど家を駆出して諸所を漂ひ歩くうち持合せの金も無くなり小遣ひに不都合な処から一昨日浅草の仲店で買物をして居た下谷金杉下町の安間喜六の風呂敷包より金三十錢を抜き取つて逃げ出す処を巡査に取押へられて分署へ拘引されたが此様な横道を働き自分のみか親の名まで出て世間へ恥を晒すのが望みとはさて／＼因果な性分だ

九月十二日 (1879.9.12)

○西京にては米価騰貴について市中の米屋の中には店を閉めて売り出さぬ者もあるので一般の人氣が悪いへコレヲ病予防に付て魚は売らせず諸興行物は一切停止ゆゑ丸で火の消えた様であるが今月三日ごろより追追魚商一統、塩物商人、芝居俳優、講釈師、落語家、俄狂言師、諸見世物師などが十人二十人づ、連印して毎日数百人府庁へ歎願に出るが府庁にては一

人もコレラに感染するものが無く成るまでは差し免されぬと厳しく申し渡されたので残らず青い息を吐いて居るといふ。

十月九日 (1879. 10. 9)

○今月四日の新聞へ出した浅草馬道町一丁目の寄席雷明亭の平野総兵衛は寄席取締規則に背き掛合軍談難波節を興行中演劇に似寄りの所作をさせたので昨日東京裁判所にて罰金五十銭申し付けられました

十一月二日 (1879. 11. 2)

○神田和泉町の養育院の貧民へ講釈師の田辺南龍より初代南龍の追善として金七円施し深川の何某より金三円下谷の横山雲南祥より金壹円を施されました

明治十三年 (1880)

三月四日 (1880. 3. 4)

○昨日警視第二課より各区寄席の年行事へ左の通り御口達に成りました

自今寄席に於て興行すべき技芸科目左の通り当分相定め候条此旨組合中へ漏なく相達すべき事但し四月一日より本条に抛り施行候儀と相心得べき事

軍談講釈、落語、浄瑠璃及び諸唱歌、移し画、手品、音曲、操り人形

四月十三日 (1880. 4. 13)

●お女中方の道楽は一がお芝居だとは落語家の前座が話す文切形だが是は近ごろ珍らしい道楽浅草門跡の地中運行寺の住職何某の娘おみを（十七年）は相撲と講釈が何より好きにて其内にも相撲が大好にて……

十月七日 (1880. 10. 7)

○扇で虚言を打ち出すとかいふ講釈師の虚言も言ひ尽し今は九尺二間の籠城も覚束なく数人の掛取勢に毎日詰め掛けられる苦し紛れに二三日跡の夜に御台おせいの方諸ともなく落ち失せ賜ひしは天晴一方の旗頭と見受奉つるは浅草阿部川町の伊藤燕里といふ修羅場読み

十一月二日 (1880. 11. 2)

○一昨日芝高輪の泉岳寺にて彼の田口恵氏が発起の義士遺物保存会の月並会を開き同日は安場保和氏（大石良雄を介錯せし安場一平の後）富森篤氏（富森助右衛門の後）も出席あり浅野家其外より百余円寄附金も有り軍談師貞山が大高源吾の逸事を講じ以後は同業四人と申合せて毎会義人の講談をする事に約束したといふが同会は追々盛隆に成るとのこと

十二月三日 (1880. 12. 3)

○府下鮫洲六丁目の魚屋村石藤次郎（五十九年）は村内の者が御布告類を心得ぬが歎かはいゆゑ夜分村の者を集めて御布告を読み聞かせたいと其筋へ願ひ出たに付き身分に似合はぬ奇

特な事として早速聞済まれしところ布告を読み聞す杯とは表向きばかり東流斎琴糸といふ講釈師を雇つて軍書を読ませ一人前燈火料として一錢三厘づつ取つたのが頭はれ先月三十日の夜藤次郎は其筋へ拘引になりました

明治十四年 (1881)

一月十九日 (1881. 1. 19)

○来る二十一日の午後一時より九段の偕行社員が数百名同社にて親睦会を催され当日は在京の各鎮台司令官をも招待して余興に講談師数名を招かれるとの事

二月九日 (1881. 2. 9)

○下谷徒士町壱丁目の伊藤斧兵衛は未だ十三の小童ながら手長猿の隊長とも成べき生立で昨十三年の二月中窃盗の科に依て七十日の懲役に処せられ同年十月又懲りずに働いた科で同四十日の御処分になつたが又もや一昨日二長町の小栗又三郎の剣術の道場に脱いであつた西鳥越町の土族村田幹の駒下駄を持つて逃る処を捕押へられ浅草猿屋町の警察署へ拘引に成たが此斧兵衛は軍談師伊藤燕龍の悴だけ下足に目をつけた物と見える

二月二十七日 (1881. 2. 27)

○浅草花川戸町の永田清次郎（二十一年）は兼て講釈を聞くのが好きな処から一龍齋貞山の弟子となり芸名を貞鶴と付けて師匠の前座を叩いて居たが少し薄馬鹿なのを友達が付けたんで芸人といふものは色が幾許も出来るものだからお前もチト女に掛り合つて見るが宜いお前位な男振り一人で一人ボンヤリして居るは腕が無いと油をかけられて其気になり寄席の茶売女や近所の娘たちへ押を強く片端当つて見たがどれも出来ず其中に浅草観音の仲見世へ珠数屋店を出ず鶴屋かたに雇はれて居るお糸（十九年）を暇に飽して口説落し無理算段で其処此処と料理屋などを連れ廻し最う宜い頃ゆゑ親元へ掛け合ひつけて手切金を沢山せしめんと去る十四日一旦連れ出したお糸を飯田町辺の親元へ返し置き夫より人を以て是非女房に貰ひたいと云ひ込むと不束の娘を御懇望で有難い早速嫁にあげますが当今必迫の中ゆゑ支度金二百円お遣しのおへお糸の母親を生涯お世話下さいと逆捻ぢに掛合はれて胸算用がガラリと外れ是まで注ぎ込んだ錢の埋処がないと鬱いで居るのが物堅い師匠に知れ其様な不品行な男は頼んで弟子にして置けぬと追出されて猶弱り此せつ友達を頼んで師匠へ詫びの最中だとサテ〜

三月九日 (1881. 3. 9)

○先月廿七日の新聞に載せた講釈師一龍齋貞山の門弟貞鶴（本名永田清次郎）が浅草観音の仲見世の珠数屋に同居して居たお糸を連出した悶着話しは此ほど終に貞鶴より逆まに金五円の手切を取られた上お糸の事に附いては以来一切構ひませぬといふ一札を入れて漸く事済に成たは宜いがお糸の母おかね（五十六年）は近ごろいろいろ不幸が続いて難渋の折から今度

お糸が不埒を働いたのを大きに立腹し飯田町三丁目の親類中田豊吉と相談して活計の多足かたゝ懲しめの為めお糸を新吉原角町の貸座敷稲本樓へ金三百五拾円の前借にて娼妓にする事に話しが調ひまづ内金百円を借りて跡は店へ出る様に成れば相違なく渡さうとの約束にてお糸親子は其百円を持って辰の口の勤工場へ出掛て行き部屋の飾り道具をいろゝ買調へて稲本へ持ち運びいよゝ店へ出ると成ても跡金を一文も渡さぬゆゑ親子は大弱りにて昨今頻りに悶着中だといふ

三月十五日 (1881. 3. 15)

○大阪府下西区京町堀四丁目の児玉庄七林喜助外数名の目論見にて同府下西区御霊社へ間口七間奥行十四間の東京講談場といふを建て此程落成したので来る十九日に開場式を行ふとて東京より松林伯円を十日間五百円にて雇ひ入れ昨日九州丸に乗組で横浜を出帆したが此講談場へ出るのは東京の講談師に限るゆゑ同地の講談師は大不平で居るといふ

七月十七日 (1881. 7. 17)

●本八丁堀一丁目の三浦半五郎の長男卯之吉 (二十五年) は十三三の年より芝口一丁目の紙商出村銀次郎方へ奉公に來り何の仕落もなく定めの年期も十年勤め上げ礼奉公とてまだ一年勤めて居るほどゆゑ主人銀次郎も二なき者に思ひて目を掛ければ卯之吉もまた主家大切と勤めるにぞ金銀出入りも懸念なく打任せ置きしが去る八日主人の代理に取引先の金集めに廻り九十円ほど請け取りしゆゑ七十円は皮財布に入れて懐中し二十円は小風呂敷に包んで右の手に提げ久保町の原の大道講釈に不図聞惚て立て居るうち日も暮れ方に成たれば遅くなつては主人も案じ玉はんと思ひ立帰らんとして心付ば風呂敷包はなし……

七月十七日 (1881. 7. 17)

○鼠小僧だの因幡小僧だのと俗に義賊と唱へる盜賊話の虚八百を扇子で叩き出す親父の講談から思ひ附た訳でも有るまいが下谷徒士町志丁目の講談師伊東燕凌の長男斧兵衛 (十三年) は未だ乳臭い頑童の癖に大人も及ぬ大胆者にて三度まで懲役に成たれど更に改心の色なく此ほども窃盜犯にて板橋警察署へ拘引になり一応お調べの上二局へ送られるとき掛りの巡査何某に向ひ借て私も一度ならず二度三度も御処刑を受ながら今度また当御署の御厄介になるは何は御職掌とは云へ重々恐れ入た訳にて今度といふ今度は始めて前非を悔ひ吃と改心する心得で有れど是から裁判所へ送られて又ぞろ懲役の御処分に成たす多満期放免に成ても御承知の通り懲役場は悪人の寄合場所ゆゑ朱に交れば赤くなる譬の通りうかゝ外役杯に出て居てはますゝ悪意が募るばかりで所詮改心は覚束ないと思ひますゆゑ今度懲役になれば何にも有れ此身相應の職業を覚え満期にて娑婆へ出た後は天晴一人前の職人と成り親父に苦勞を掛けたく無いから何とぞお慈悲に此願ひの届く様に御周旋を願ひますと年には勝せた嘆願に虚か真か白浪の寄る辺なければ詮方なく知りつゝ、悪き荒浪の底に沈むが不便さに此趣を巡査よ

り長官へ話されたものか頓て斧兵衛は二局を経て裁判所へ廻された後兼ての願通り懲役の御処刑に成て佃島へ送られ建具職人の下働きを申し付られたは世に有り難き政府のお慈悲と是まで懶惰三昧に身を持ち崩した放埒に引替へ毎日身を粉にして稼いだ甲斐ありて此頃は手斧遣ひも少しは腹へ入り満期の頃は立派に職業が覚えられると思へば頻りに心嬉しくて是ぞ全く板橋警察署の掛り巡査の賜物なれば如何か此由を報じてお礼が述べたいと思ふに甲斐なき囚徒の身のうへ心に任せぬを本意なく思ふ折から娑婆に居たころ懇意にした栃木県葛生町の山崎音吉 (十五年) に出会たを幸ひ兼て思ふ仔細を明すと同人は早速彼の巡査の許へ趣き斧兵衛の話した一伍一什を物語り厚くお礼を申し上て呉との伝言で有りますと話し帰宅の後子供心につくゝと思ふに囚徒とは云へ友達の斧兵衛は懲役場にて職業を習つて居るといふに此身は何処へ奉公するとも自由な身体で有りながら是といふ業もせずブラゝ遊んで居るは本意では無いと考へ附た処までは宜つたが寧ろ己も斧兵衛と同様余り気は進まないが懲役に成る規模に何処か盜賊を働いて懲役場へ遣て貰ふと職工学校へでも入校する心得で下谷竹町の石倉二郎吉方ほか三ヶ所へ忍び入り窃盜を働いた事が早くも其筋へ知二三日跡に板橋警察署の手で召捕れたは飛だした簡違ひ

七月十九日 (1881. 7. 19)

○近來講釈師は一体に寢入姿にて修羅場説は勿論世話講談も以前ほど聞人が無い処から大頭の南龍を始め何れも格を外して思ひゝに新奇妙案を工夫する中に当今麻布宮下町の寄席へ出る柴田南若といふ講釈師は大絵入講談といふ新聞紙か雑誌の様なピラを下げたはどういふ工夫かとだんゝ聞て見ると大将其日の扮打には杯と着附などをながゝと読み立る事を廢し手短に其日に話す人物の姿を講座の後へ貼り置き抑も此処に安置し奉つるは右大将頼朝公が主従七騎にて豆州真鶴ヶ崎を落させ給ふ時の御姿なりとお開帳のとき坊主が言立をする様に一丁目見て婦女子にも其扮打のよく分る様にする工夫だとか

八月二十八日 (1881. 8. 28)

●東京府甲第百廿二号布達郡都営業税雜種税賦課規則昨日の続き

……

第十二条 遊芸師匠 (自宅又ハ指南所ニ於テ諸淨瑠璃、諸唱歌、諸音曲、舞踊ノ指南ヲ業トスル者)、遊芸稼人 (人寄席又は興行所ニ出テ軍談、講釈、落語、声色、諸淨瑠璃、諸唱歌、舞踊、諸狂言、手品、輕業、写シ絵、八人芸、人形遣ヒ、曲馬ヲ業トスル者) 俳優、相撲、幫間、芸妓ニハ左ノ税ヲ課スベシ

……

九月三日 (1881. 9. 3)

●鹿島屋の話昨日の続き ……栄次郎を講釈師文勢の弟子として芸名を文立と呼び諸所

の前座へ出るを……

十月六日 (1881. 10. 6)

●……先月三日同駅へ下谷坂本町に居るデモ講釈師村田金窓（二十七年）が来て五日の夜より十日の間同駅のお亀団子といふ茶屋の座敷を借りて講釈をはじめたのを下女を連れてお兼が聞に行つたのが間違の始まりで此金窓といふ奴是までも場末の席へ掛つて女の悦ぶやうななまめかしい落話じみた講釈をして裏店住の浮気娘をたらすのを片商売にして居る患者なれば……

十月二十一日 (1881. 10. 21)

○八丁堀仲町に居る講釈師室井琴凌は黒塗の自分車を拵へて諸席は乗廻して居たが今月三日の夜其車を盗まれてしまひしゆゑ困り切つて居ると一昨日四谷船町の都亭へ出て昼席を打ちまだ前座の出で居る間木戸に座つて居ると丁度此車を盗んだ平河町一丁目十一番地の野口六兵衛（三十四年）が車を表へ置いて聴に入つて来たは天の与へと直に同人を取押へて其筋へ訴へ出ました

十月二十九日 (1881. 10. 29)

○神田秋葉の原は昨年十一月中より地所を拝借する事を免されたゆゑ度々張の辻講釈や屋台店が大分出来たが今度其筋より残らず取払ひを申し渡されたのでいづれも差向き活計の道に困るとして昨日同所営業人一同より其筋へ歎願に出たと云ひまた九段中阪の右側の写真屋鳥屋はじめ残らず取払ひになりますと

十二月十六日 (1881. 12. 16)

○本郷の春木座にて落語家と講談師が合併で催す茶番狂言はいよゝ来る二十日が初日の由にて昨日番附を配り土間棧敷代は平土間壱間に付金五十銭高土間が七十銭棧敷が九十銭にて初日は半直で有ます

十二月二十七日 (1881. 12. 27)

○能楽をはじめ茶の湯や香も追々盛んになるが蹴鞠はとんと蹴る人も無いゆゑ此道をまた旧に復さんと大村民部太夫高橋雛掌として以前は其道を以て聞えたる人が来一月一日より大阪中の芝居にて先帝より賜はりたる紫の差抜を穿て曲鞠を興行し此口上は講釈師の石川一口が勤めるといふ

明治十五年 (1882)

一月二十一日 (1882. 1. 21)

●……悴交道（二十一年）に学文を仕込み父の業を続せたいとて種々に氣を揉み医学校へでも通はせたく思へど……ナト時候には後れて居れど講釈師が宜からうと母親の説に交道も

同意して早速左る講釈師の門弟となり親父が存命中業を盛た唐机を持出して毎日朝から晩まで頃はいつなんぬり天正の四年三月二十七日羽柴筑前守には三百余騎を随へて杯と一生懸命に稽古し終に芸名を神遊齋交道と名乗り此程より諸方の寄席へ修羅場説に出掛けるは變つた思ひ附きだと譏る者も有れど僅な公債証書の利子を当に無職業にてブラ附て居る腰拔士族杯よりは遙に見上た大奮発で有ります

二月九日 (1882. 2. 9)

○赤坂中町一番地の魚屋近藤定吉（二十年）は一昨日の午後三時ごろ久保町の原の辻講釈に聞き惚れ盤台を傍へ置いて人の中へモグリ込んで聞いて居るうち鱈十一本と数の子三升干海苔十帖を盤台天秤棒と共に盗み去られ真青になつて同所警察署へお訴へ

六月二十八日 (1882. 6. 28)

○浅草北富坂町のデモ講釈師正流齋南潮と同所北元町の一五齋文子の兩人は名前ばかり御大層で虚を打ち出す智慧も無ければ錢も無くて納税を怠つたにつき鑑札を取上げられた同所東仲町の同業伊東花丈は無鑑札で営業をした事が露頭して二十銭の罰金

七月二十日 (1882. 7. 20)

●●本所竹町の藤木秀治郎（二十一年）は芸名をといふも大層らしいが西尾慶秀といふごろ釈師にてゆくゝは出精して芝居掛けりの講釈でもして方に一つ女の氣に入らうといふ身にも応ぜぬ大望が有ゆゑ太陽の照臨あまねきも陰を踏んで土鼠を真似、五体は不具なる処なけれど眉毛を剃り付けて癩病を氣取り否味な身振り気障な風を一身に集めし困り者なれば當るを幸ひ臆面なしに根よく女の袖を引けど子守でさへ後を見せて返し合せる者なければ一人長剣を握つて世に逢ぬを歎息せしが世の余沢には斯る者の憤ほりをも晴す事の出来る貸座敷といふものあれば……

七月二十一日 (1882. 7. 21)

○浅草東町の講釈師旭堂南慶が去る十六日の夜夜席へ出た留守宅へ盗賊が忍び入り衣類二十品程を盗み取つて逃げ去たにつき南慶は大きに驚き早速此由を届け出たにつき其筋にてだんゝ探偵されると此南慶の弟子にて慶玉（本名和田藤吉十九年）が大層立派な身形をしてブラゝ遊び歩いて居るは何でも怪しいと内々目を附て居られるとも知らず一昨日慶玉は数寄屋の衣類に白縮緬のヘコ帯を締め身分不相応な形をして向島の土手を通り掛る処を浅草田町警察署の刑事巡查朝日藤仙吉小林次郎の両氏が取り押へ同署へ拘引してお調べになると此慶玉は南葛飾郡押上村の者にて十五の年より南慶の弟子となり前座の修羅場説から打ち上げて近ごろは減切り上達し随分聞ける様に成たので師匠南慶も末頼もしく思ひ此ほど天一坊一代記を読み習はせた処或る日慶玉はツクツク思按するに近ごろ流行に後れた講釈師の中座位では所詮思ふ様な錢にはならずと云て師匠ほどになるには容易な事では無いから寧ろそのこと

今度習ひ覚えた天一坊の様に太く短く盗賊の旗揚をなし様子知たる師匠の宅を初陣としてドリヤ宗旨を愛へやうかと胆太も南慶方へ忍び入りましたと白状したにつき其ま、拘留に成てお調中で有ります

八月十九日 (1882. 8. 19)

○今度警視庁にて何故か俳優を始め講釈師落語家浄瑠璃語り角力道化踊手品遣ひ其外諸芸人の履歴を明細に取調べになるといふ

十月二十二日 (1882. 10. 22)

○神田東紺屋町の髪結職小野沢鏡五郎 (二十七年) は他へ渡す金を十二円五十銭或人より預かりて一昨日外神田の秋葉の原を通ると野店講釈が有るので思はず立止まつて聞くうちいか彼の金を掏摸にしてやられ跡で気が付いて気違ひの様に騒いでも其甲斐なく、彼金がなくて生ては居られぬと其夜永代橋より身を投たが橋間に千葉原下足崎村の稲葉金蔵が繫つて居たゆゑソラ身投げだと直に船を漕ぎ出して助け揚げたが鏡五郎といふはなか、の男ゆゑ危なげなさそうに身技の場を一狂言かいたのでは無いかと近所で評判する由なれどマサカ十二円五十銭でそんな危ない芸をする者も有るまい

十一月二十日 (1882. 11. 20)

●花川戸に鳥越に髪結床の親方には随分奇人が有る中にて之を加へて三奇人とも謂はんか向柳原三丁目十三番地の髪結職殿槌伯五郎 (三十二年) はなか、多芸な男にて三味線踊をはじめ月琴でも笛でもなま、の師匠に尻込みをさせるほどなう、講釈師の真似をよくするので松林伯円より伯といふ字を貰ひ伯五郎と通称にするほどなるが……

明治十六年 (1883)

四月二十八日 (1883. 4. 28)

○むかし新内語何某とか、本所吉田町の寄席へ出て綱五郎の浄瑠璃を語つた時いぬめ夜鷹めと綱五郎が罵る処で吉田町は夜鷹の巢なるに心附いていぬめ鷹めと語つたので流石太夫はゑらい者だとはめものに成たといふが是と違つて一昨日駒込追分町の道登菩薩へ奉納の軍談講釈に出た南龍が三代将軍がお湯殿で侍女へ戯れたまひし引言に將軍のお湯殿だから草津の温泉のやうに臭くは無し浴衣でも草津温泉の浴衣のやうに虱などが這ては居ないと言たのでサア其席に詰て居た道了の世話人の部分なる草津温泉の主人藤谷金兵衛は勿論同町に居るものが一同怒り出し温泉の硫黄臭いのは当然の事だが虱の這て居るやうに不潔な浴衣を出して着せるなど、い、加減の嘘つ八をナンボ講釈師でも口から出まかせに晒弁り散し営業の妨げをされてたまる者かと既に講座から引ずり下して袋叩きにするといふ騒ぎを同じ駒込の中でも口き、といはるんく辻の後藤弥太郎といふ人が力を尽して説諭したので先づ南龍へは其内幕

の騒ぎを知らせずに奇麗に帰したといふがまた草津温泉の方では何の遺恨で近処へ来て妨害になる事をいふのだらうと怒り切て居るといふから人の鼻根を榮譽とする芸人などは某太夫のやうに其町内へきたら其近辺の妨げになる事や悪まれ口などは慎しむべき事だと縁日商人が話して居ましたが一寸した話でも其先々の関係は薩陀な事が有るものです

十月三日 (1883. 10. 3)

○神田五軒町の軍談師先醒堂覚明 (誠の名は奥宮健之) 下谷池の端七軒町の同業森林黒猿 (本名奥宮健吉) の両氏は演説に紛はしき軍談を成したるに付き昨日鑑札を取上げのうへ営業停止と申し付られ此を掛けた席亭浅草東仲町の浅草亭藤本竹次郎元大工町の若松亭山本平兵衛の二軒も演説に紛はしき軍談をさせた科で営業を停止されました

十月六日 (1883. 10. 6)

○高等法院にて判決に成た河野広中の小伝また画入自由新聞社出版の高等法院の傍聴録金松堂出版の福島奇聞自由の夜譚は一昨日其筋より発売を禁止せられたまた講談師等にて河野等の伝記を講ずる事は総て停止せられたり

十月二十一日 (1883. 10. 21)

●警視庁配布

○甲第十八号

明治十年二月甲第六号布達寄席取締規則左ノ通り改定ス

寄席取締規則

……

第六条 寄席ニ於テハ左ノ項目ノ外演芸セシムベカラズ

一 講談、一 落語、一 浄瑠璃、一 唄、一 音曲、一 写絵、一 手品、一 操人形

……

明治十六年十月二十日 警視総監樺山資紀

十一月二十日 (1883. 11. 20)

○駿河台西紅梅町の講談師桃川国栄が千葉原下の寄席にて自由の激動といふ題にて福島事件を講じたうち官吏侮辱の件ありとて其筋へ拘引に成た事は前号に記載したが右につき国栄は今月十三日下総八日市場軽罪裁判所へ召喚せられ公判開廷の上翌十四日重禁錮四ヶ月罰金二十円申付られしが夫につき感心なるは席主清左衛門にて国栄が入檻中毎日欠さず差入物をなし満期放免の節は下足賃丈にて客を入れ席料を国栄に与へると云つて居るといふ

十一月二十日 (1883. 11. 20)

●太閤記を読んで謀叛気を出したとは辻講釈で聞く由井正雪、京伝の粹書を見て勘当帳に付くは天明のころの遊蕩息子……

明治十七年（1884）

一月十八日（1884.1.18）

○読売雑譚

○大道講釈の利害 任天主人

バタン／＼此時軍師孔明が計略にて鷲坂伴内を挫ひしぎ華聖頓府へ往をりしも後醍醐天皇笠置に籠られ楠参れとの勅諭に取ものも取あへず游君阿古屋を誑惑し色にはなまじ連は邪魔独り魁がけ高名せんと鉄材料を振まはし長坂橋へ押出すとは是れ見て来た様に嘘を吐く大道講釈の声色なり今や主人は斯る贅言を仮り来りて殊更に喋々するは果して何の要あるかとするに蓋し彼の大道講釈なる者は目に一丁字なき下流の人に向ひ直接に感覚を与ふること最も多し故に其利害を云はんとして扼ころなく饒舌を致すのみ我れ豈弁を好まん乎

夫れ人は事に触れ物に感じ日久しうして習ひ性となるは常理に於て免許れざる処なり是を以てか寺町の男子は葬礼の真似を為し妓街の女兒は宴席の遊びを取る此れ孟母の賢三たび転宅せし所以なるべし見よや彼の大道講釈を見よ其演師は果して何等の人ぞ本筋の学問あるに非ず学者並の知識あるにも非ず只だ其師に依て受し講釈本を読み又は耳に挿みしに過ず言は軍談物語の本が口を聞くと論じなばそれにて余地は無るべし去れば其机上に叩き出す演題は宮本武蔵荒木又右衛門若見重太郎等の一代記にして未だ嘗て人智を促がす趣向の講釈を聴かず然し此等の演題は聴者をして爽快ならしめ自から勇氣を鼓舞するが故に振武の今日に當つては多少利益を与ふると雖ども彼の白浪五人男平井権八稲葉小僧等の履歴の如きは所謂侠にして意気なり是を以て宮本や若見の荒者よりは学び易く且つ速やよし夫れ学び易く速やよき時は悦んで之を聴く少年の心裡に如何なることを画き出す歟必らず謂ん平井権八は色男だナア日本左衛門は強気だナア稲葉小僧は泥棒だナアと日々聴て之を欣慕し終には斯の如き悪漢を通例人視して怪まず且つ又嗜好の甚だしき家を外にして日々此が聴者となるや必らず父母の叱責を受くべし此叱責の積る処る彼れ此を嫌厭して家を飛出し窮迫の果は日頃見聞の本色を顕はし我れ稲葉小僧を学んで一世に横行せんと先づ掏摸より窃盜学に入べし此れ秋葉の原及び佐竹の原等其他大道講釈並びに上州左衛門等の演師多き所に少年の掏摸群生する所以なり故に斯る忌むべき講釈場は断言して窃盜の教育場とするも決して誣言にあらざるべし果して然らば大道講釈は廃止すべき歟曰く否な其忌避すべき演題に換るに忠孝節義の演題を以てせば群集する少年は終に之に感化せられ善良の天性を喚起し純然なる学校よりも得し教育よりも速かに会得すること猶ほ泥棒咄しを聴て起るが如くならんと主人筆子を叩いて先今日は此ぎり

一月十八日（1884.1.18）

○講談師の洋航 府下の講談師伊東凌朝外二名は海外の実況を経験せんため此ほど願濟のう

へ近日出帆の軍艦筑波艦に乘組み先づ支那へ赴くよし

一月十九日（1884.1.19）

○総計 当今府下にて角力営業の者は四百六十五人同行事が三十九人軍談師が二百十人落語家が三百八十人又雇人請宿が五百十六軒旅人宿が千八百一十一軒にて昨年中宿泊した旅人の総数は三十万七千二百四十一人なりと

二月二十九日（1884.2.29）

○親睦演話会 来月二日三日の両日午前十一時より浜町壹丁目の東華樓にて親睦演話会といふを催し当日講談師は南龍、南玉、燕尾、如燕落語家は円朝、燕枝、玉輔、しん生、文治、柳枝、小さん、円遊、円太郎其ほか岸沢仲太夫、同仲助、竹本相生太夫、同綾瀬太夫等の浄瑠璃連中も出席するとの事

四月十七日（1884.4.17）

○講談師自訴 扱其次は代り合まして代り栄も仕らぬ軍談師桃川明玉（三十六年）は桃川燕林の門弟なれど飲だくれにて職業を勉めぬ師匠も呆れて破門された後は向柳原町二丁目伊藤花栄の世話になつて居りしが先月二十七日神田皆川町の寄席皆川亭より花栄へ渡すべき金を三円明玉に届けて貰ふと同人は其金を着服して其ま、何処へか逃げ去りしが其うち金は残す遣ひ棄て便る処の無いに弱り果て終に一昨日此由を小川町警察署へ自首して出たにつき是も昨日二局へ送り

五月七日（1884.5.7）

○追善興行 来る十一日午前八時より午後十一時まで故竹本綱太夫の一週忌追善として先頃中より浜町の東華樓に興行中なる西川伊三郎一座の人形芝居へ打交せ興行する軍談落語義太夫の人名は、貞山、伯円、伯山、円朝、燕枝、円橋、播磨太夫、津太夫、才治、新靱太夫はか数名にて会主は宮本賀助なりといふ

七月四日（1884.7.4）

○遊芸品評会 浜町壹丁目の東華樓に於て来る五日六日の両日席主の発意にて遊芸品評会と云ふを催はし軍談師落語家義太夫語り其外音曲師等数十名を招集し各々得意の技芸を演ぜしめ聴衆より一々其の可否の評を取るとの事

八月一日（1884.8.1）

○ウト／＼五十八円 青山北町二丁目の酒屋船橋猪之助（四十年）は一昨日の朝京橋近傍へ商売用で来たところ十二時近く成つたので銀座四丁目の天金で一杯やると暑さがいよ／＼身に染みて連も日中は帰られぬと同町の寄席銀座亭へ入て紙入手拭をも前に置き肌脱ぎで講釈を聞きながら酒の酔と人の呼吸に蒸れてウト／＼睡りかけしが中人といふに心づき不図前を見れば五十八円入れた紙入が無いに仰天し席亭の主人に云々と云へば主人も気の毒に思ひ居

合せた客を一人ごとに改めたが更に知れぬも道理其の前に一寸買物をして来るとて出口に在つた水汲下駄を履て出た男が盗みしならんと一決し跡に残つた北品川本岩楼と印しの有る手拭を持つて其筋へお訴へ

十一月十四日 (1884.12.14)

○南龍死す 講談師田辺南龍(四十六年)は先月中千葉地方へ出稼ぎして去る十日無事に帰宅せしが間もなく卒中症にて死去したりといふ

十一月十九日 (1884.12.19)

○忘年会大奇 明日明後日の両日両国広小路の寄席福本亭にて落語家講談師其他の諸芸人が忘年会と名けて大奇を催し余興に講談師の掛合が有る由にて其問題は常警と袈姿は何れが貞なるや、武蔵坊弁慶は正しくありや否や、三成光秀の謀略何れか勝れるや等なりとぞ

明治十八年 (1885)

三月十二日 (1885.3.12)

○無理勤め 本所亀戸町へんのあるの人力車夫は一昨日の六時ごろ本所駒止橋際に客待して居て通りかける講釈師山本龍虎へ強て乗車を勧めたので同人より元町警察署へ告訴されお調べのすゑ桑次郎は拘留十日

四月一日 (1885.4.1)

○府下各地寄席の現数 久松町、坂本町、京橋の三警察署内は二十五戸○愛宕町、麻布、高輪、品川の四署管内は二十五戸○本郷、小石川、小川町、板橋は二十戸○下谷、和泉橋の二署は廿二戸○浅草は猿屋町、田町千住の三署内にて十九戸○深川は富岡門前、同八名川町本所元町、同吾妻橋にて十九戸○牛込、四ツ谷、麴町、赤坂、内藤新宿にて十八戸合計百四十七戸なり

五月二十二日 (1885.5.22)

○聴死 去る十九日の夜神田平水町の寄席常本亭へ五十余りの老人が来たり高座の下へ座つて静かに聴いて居たと思ふ間に前へ倒れて寝入りし様子なりしが寄席は果て客は一同立帰りし跡にも目を覚さず居るゆゑ茶番の者が揺り動かしモシノと云へど答へなく如何やら変な様子ゆゑ外の者呼んで抱き起して見ると疾に死んで居るに仰天し直に其筋へ訴へ出で検死を受け何人なるかと調べると通り新石町の細川新次郎(五十二年)と分りて死骸は親族へ引渡されたが桃川燕林の講釈を引導がはりに聞て十萬億土へ旅立とはヤレ

六月三日 (1885.6.3)

○保見会寄附諸芸有志会 来る六日正午十二時より下谷広小路角の呉服店松坂屋の楼上に於て催す同会第五回の出席員は小金井蘆州(味方ヶ原合戦酒井誓の太鼓) 桃川燕林(赤穂義士

伝の内岡島常義の伝) 三遊亭円朝(花菖蒲沢のむらさき) 春風亭柳枝(柳栄美談) 三遊亭金朝、柳家枝太郎(古今滑稽落語) 竹本熊玉、政玉、多満玉、京枝、京駒(阿古屋琴責の段) 竹本熊子、熊玉(先代萩御殿のどん) 岸沢仲太夫、和佐吉(古市貢十人切の段) 此外大切鶴亀長歌はやしは下谷すきや町芸妓連なり

六月二十五日 (1885.6.25)

○共遊会第一回 寄席講釈場の混雑を避けて諸芸の真味を玩ぶもの有名会亦有会また保見会等あれど尚未だ貴顕紳士の夫人方令嬢方一般の楽みとするに足らずと今度諸有志者の発起にて共遊会といふを設け毎月第四の日曜日に開会(会費五十銭)される由今月第一回は都合ありて明後日東両国井生村楼にて開演される其の番組は劇場正本囃(三遊亭金朝) 松前鉄之助の伝(放生舎桃林) 布晒しの早業(蝶柳齋) 小春治兵衛紙屋の段(相生太夫、語助) 共遊新話の祝(三遊亭円朝) 三番叟(花柳寿輔、長唄連中) なりとぞ

八月五日 (1885.8.5)

○胎育 番町辺にお住ひの某武官の奥方は昨年の冬より御懐妊にて遠らず出産せらる、につき西洋にて胎内の児に勇氣を付る為め産婦の居間へ有名なる猛将勇士の油画を掛け置くと云ふ処より思ひ付かれしものか近ごろ伯門燕尾など云ふ軍談師を日々邸内へ招き昔の名将の勇しき戦話を一くさりづ、語せて聴聞せらる、由

明治十九年 (1886)

一月二十日 (1886.1.20)

○寝耳に水 下谷上車坂町の塚本銀次郎の弟玉嶺(三十年)は或る講釈師の弟子となつて頻りに机を叩いて見ても東京では思はしからぬゆゑ修行を兼ねて一昨年の十一月より田舎稼ぎに出かけ埼玉群馬長野新潟地方を廻りて此ごろ漸やく帰京し去る十三日久しぶりで兄の許へ来ると兄銀次郎は入口をまたぐ弟の顔を見ると赫と怒りヤイ己れは何様な事をして田舎を廻つたぞ己の面皮に係はる事を何故仕出かしたと叱られて玉嶺は化転し兄貴何を云なざる私には都合な事をした覚えはないと弁解しても聞かず論より証拠これを見よと差出したは欠席裁判の云渡書にて宮城県下仙台東二番町東座主近藤七蔵方に出席せし折り同人の金三円と物品を取逃げしたる科に依り重禁錮四ヶ月監視六ヶ月に処すとして有るに玉嶺は肝を潰し是れはとんだ事だ此様な事をするも仕ないも全て仙台地方へは足を踏み込まぬが是は全く名前を騙られしものならんと直に其趣きを其筋へ訴へ出たといふ

四月十三日 (1886.4.13)

○黒田内閣顧問の美談 ……同夜は近き頃講談師桃川如燕が不忍池の辺に開きたる江の島料理店に一宿し……

十一月十八日 (1886. 11. 18)

●ノルマントン号沈没事件

○沈没の講釈 時好に投ずる松林伯知は今度烏森町の大国亭にて沈没一件を口演するといふ
……

十二月九日 (1886. 12. 9)

○画解 講談師花井晴山が会主となり烏森町の大国亭にて十一日より十四日まで教導立志基と題したる一枚摺の錦画(板元両国の大黒屋)の人物に付き講談師落語家が其伝記を話すといふ

十二月二十六日 (1886. 12. 26)

○自身出頭 俳優講談師落語諸芸人及び諸芸師匠等の者が警視庁へ鑑札を願ひ出るには其頭取が調印して区長の奥印があれば代人にても下付せられしところ今度は初めて出願の者は必ず本人が出頭する事に定められしといふ

明治二十年 (1887)

一月五日 (1887. 1. 5)

○ツリ逮捕縛 築地新栄町一丁目の炭屋下田春吉は先月二十五日例の二円札だから炭を五俵とツリを九十銭持ッて来て呉るの騙りに逢ッて九十銭奪られたので金は僅少なれど斯る者がしばしば出沒しては一般商業上に甚だ害を与へるゆゑ以後の懲しめ是非捕へて呉んと心を用ひられると一昨日の正午ごろ年始廻りの婦り道八丁堀亀島橋で出逢つたは先の騙りゆゑ逃げんとするを川口町にて取押へ巡査へ引渡したは手柄で有りました此賊は浅草南松山町に住む講釈師の前座にて旭堂南栄本名は榎本伝次郎(二十一年)といふ者と知れ昨日検事分局へ送らる

一月十八日 (1887. 1. 28)

○爰にも一ツ 講談師放牛舎桃林の弟子桃一が昨夜十二時ごろ本所の寄席より帰りがけ両国橋へかゝると二十四五の男が欄干に手をかけ今や飛び込まん有様なれば此処ぞ実地の腕を振ふところと傘投げ捨て、走り寄り危ふきところを引止め元町警察署へ引渡したが此の助けられた男は愛知県の書生にて京町一丁目北越樓の娼妓三芳野に陥りし果が身を此川へはめんと為たとの事なるが左りとは不了簡も新しくなし

二月四日 (1887. 2. 4)

○一世一代 軍談師花井晴山は来る六日正午より夕刻まで新右衛門町の翁屋にて大説切を催し講釈ばかりでなく落語浄瑠璃等の諸芸人が会主の為に腕を振ふといふ

三月十一日 (1887. 3. 11)

○大講談 花井晴山の催しにて来る二十三日の両日新右衛門町の翁家にて講談師大勢出て続物の腕競べをするといふ

三月十六日 (1887. 3. 16)

○大寄 日本橋区新右衛門町の翁屋にて来る十九日より三日間午前十一時より午後五時まで講談大集遊と云ふを催し落語家音曲家等も出席する由

五月十二日 (1887. 5. 12)

○技芸会 東両国の中村楼にて来る十四日午後一時より樓主が知己の諸芸人を招きて腕競べあり落語は円馬、金朝、小さん講談には如燕、都一中一広の松の羽衣、越路太夫の中將姫雪責等の番組

五月十二日 (1887. 5. 12)

○奉納講談 来る十四日正午より高輪泉岳寺に於て倉橋伝助の伝「放牛舎桃林」赤垣源蔵の伝「錦城斎一山」大石良雄の伝「伊東燕尾」を述べ傍聴無料なり先年此の奉納講談名ばかりにてろくな者が出ず大いに信用を落したれば今度は間違なしとの事ゆゑ定めて聴衆が多かるべし

五月十四日 (1887. 5. 14)

○諸芸人の現数 府下諸芸人の現数は猿楽男百七十一人○俳優男式千五百四十四人女四百廿八回振付男六人○道化踊五百五十人女百八十人○踊男二十二女二百九十四人○角觥五百九十三人行事五十五人○吾妻狂言男十人○昔噺し男七百三十八人女四十二人○講談男四百二十九人○手品男八人女三十三人○写画男九人女一人○操人形男百三十一人女二十四人○軽業男四十一人女九人○曲馬男二十四人女十二人○曲独楽男五人○足芸男二人女十八人○綱渡女一人○大神楽男百一十一人○倭獅子男四十三人○万作踊男二十七人女八人○義太夫男七百二十四人女五百七十七人○常磐津男百四十六人女四百六十八人○常磐家男五十四人女十七人○岸沢男十人女十人○清元男五十一人女三百八十八人○富本男十四人女九人○富士松男四十三人女三十一人○一中男十九人女八人○河東男八人女五人○新内男七十三人女七十人○松廼家男十一人女三人○蘭八女十二人○春柳男三人女十三人○春園男一人○長唄節男二百七十七人女百九十八人○小唄男一人女五人○荻江男十三人女七人○歌沢男六人女四十人○歌沢節男四人女三十七人○桜川男十四人女十三人○浪花男九十三人女二十六人○都節男四十九人女二十二二人○歌祭文男四百二人女三十八人○芸妓千三百三十三人

五月十四日 (1887. 5. 14)

●面接談話会 ……右終りて桃川如燕得意の講談數題を演述し……

五月二十日 (1887. 5. 20)

○泉岳寺の講談 去る十四日高輪の泉岳寺にて講談師桃林、一山、燕尾の三名が催したる講談会には雨天なが千五百の来聴者ありしが猶また以来は毎月十四日に同所にて講談会を催し其講談は皆義士に係る事のみ由

六月八日 (1887. 6. 8)

○談話小集 来る十二日東両国の井生村にて放生舎桃林の催しの大会は清元菊寿太夫の四季三葉草、一山の正宗の伝、如燕の西山茶話、小さんの落語し、燕尾の三羽鳥、燕枝の三題話、伯円の講談、円朝の人情話で外に狂言二番ありと

六月十四日 (1887. 6. 14)

○談話小集 一昨十二日向両国の井生村樓に於て放生舎桃林が催したる談話小集会は久々の天気日曜にて午前より陸続と詰め掛け午後三時には立錐の余地もなき程なりし殊に来客中貴顕紳士の最も多かりしは常に催主が上流社会に愛顧を得るの余慶なるべし

六月二十八日 (1887. 6. 28)

○奉納講談の景況 去る廿四日高輪泉岳寺にて開講せし奉納講談会は凡そ千八百人程の聴衆にて頗る上景気なりしと

七月一日 (1887. 7. 1)

○書面親睦会 明後日三日午後八時より浅草須賀町鷗遊館にて斎藤連三氏が幹事伊東専三氏が周旋員にて「錦織剛清氏書面親睦会」と云ふを催し余興に円朝の落語、伯円の講談、山勢の三曲等がある由

七月十九日 (1887. 7. 19)

○中洲一瓢亭 中洲第一号地へ今度建て設けたる温泉料理一瓢亭にては来る廿二廿三の両日開業祝ひとして落語、講談、浄瑠璃等の大催しが有るといふ

七月二十三日 (1887. 7. 23)

○芸人の営業停止 日本橋区蠣殻町一丁目の講談師柴田淵龍ほか一人、嘶家五人、義太夫語り二十人は何れも営業税不納につき一昨日営業停止を申し付けられたり

八月二十四日 (1887. 8. 24)

○泉岳寺の講談 今廿四日正午十二時より高輪泉岳寺へ講談師が四名出席し講談会を催す由

十月二十八日 (1887. 10. 28)

○奉納講談 今日午後より芝の泉岳寺で奉納の講談には柴田南慶、田辺千山、柴田南玉が出席するといふ

十一月八日 (1887. 11. 8)

○燕旭堂 講談師中の老練家と聞えし伊東燕旭堂は一昨々夜神田和泉町の或る寄席にて講談中何か天皇陛下に対し不敬の言を発せしとか当路の官吏を侮辱したりとか云ふ事件にて其筋

へ拘引の上一昨日検事へ廻されしとの事なり

十一月十五日 (1887. 11. 15)

○講談師の処刑と予審 浅草阿部川町の講談師伊東燕旭堂(岡本栄治郎)は去三日の夜神田和泉町の寄席和泉亭において講談をなしたるとき恐れ多くも 天皇陛下は前世は柳原の易者にもありしや前にイトウサイゴウのサンギ(算木)を並べてゼイチク(笠竹)夫れは三世相といふ本にありました云々また住吉踊は昔はサ、ヤアトコセイと申し今ではサ、ヤアトコセイ、ヨイヤセイ、アリアランセイ、コノナンデモセイ云々の語を發したるは 天皇陛下に対し奉り不敬の所為ありとて昨日東京輕罪裁判所の公判に附せられて審問を受けたる末刑法第一百七条第一項に照されて重禁錮四月罰金二十円に処せられまた講談師松林伯円は同人が去る十五年中に演ぜし安政三つ組を筆記者若林珪造氏が筆記したるを脚色みて先ごろ本郷の春木座にて演劇せしがその内の鈴木藤吉郎が元と穢多にて安政年間不正の所業をなしたる様になしあるは死者に対し誹毀したるものなりとて藤吉郎の末胤前川清吉、菅谷お八重より請求して春木座の興行を中止せしめたるうへ講演者伯円を告訴したるにつき同人は去る十二日および昨日東京輕罪裁判所に於て予審の取調を受けたりしが此日は講談師如燕、燕尾、晴山、桃林、一山、一、桃葉、右田等が傍聴したり

十一月二十二日 (1887. 11. 22)

●伊井伯の祝宴 ……余興として如燕の講談薩摩琵琶喜多文十郎喜多千代三等諸氏の仕舞数番あり……

十一月二十二日 (1887. 11. 22)

○醉月新話 安政三組の件にて訴へられたる講談師松林伯円は今度また両国の福本にて「醉月新話」と題し花井お梅の事件を話すと云

十一月二十六日 (1887. 11. 26)

○伯円免訴 安政三組の件につき告訴せられたる講談師松林伯円は悪意の誹毀即ち刑法上の犯罪を構成したるものに非ずして罪と成ざるものと認められ去廿二日免訴せられたり

十二月十三日 (1887. 12. 13)

○燕旭堂の有罪 浅草阿部川町の講談師伊東燕旭堂(岡本栄治郎)は去月三日神田和泉町の和泉亭にて講演をなしたるとき恐れ多くも 天皇陛下に対し奉りて不敬の言語を吐きたる所為にて刑法第一百七条に照し同月十四日東京輕罪裁判所に於て重禁錮四月罰金二十円に処せられたるを同人は不当として代言人小川三千三氏を以て東京控訴院へ控訴したるが昨日原裁判を認可されたり

十二月十四日 (1887. 12. 14)

○芝居茶屋開業 春木座の茶屋万金の跡を神田の白梅亭が引請け明日より開業するに付き講

談落語の連中にて面白き催しありといふ

明治二十一年 (1888)

二月二日 (1888. 2. 2)

○解停 日本橋区三代町の桃花(須賀おひさ)は女子講談を営業中去る十五年六月仔細ありて営業を停止されしが昨日解停せられし由

五月四日 (1888. 5. 4)

○自全会 明五日浅草の井生村にて昔々亭桃太郎が催ほしの演芸自全会は岸の家吾妻のお紺貢、綾瀬太夫の腰越状、延寿太夫の北洲其ほか文楽伯知円朝も出席し終りには文治柳橋円極の靱猿の振事ありと云

六月七日 (1888. 6. 7)

○演芸矯風会の発会式 曾て帑々本紙に記載したる日本演芸矯風会は万端の準備整ひたる由にて来る十七日鹿鳴館を借り受け発会式を催すよし当日は講談、落語、義太夫、三曲等の種々の催しある中に高崎正風氏の新作挿頭の幾久(杵屋正次郎節附市川団十郎舞踏)物集高見氏新作水の江(岸沢式佐節附尾上菊五郎舞踏)の二つは見もの聴ものなるべしとのことなり同会にては当日皇族大臣を始め在朝在野の紳士を数多招待するよし

九月二十二日 (1888. 9. 22)

○講釈師の投身 神田鍋町の講釈師一海事藤井彦兵衛(三十三年)は毎日向柳原町辺の定席へ出勤して居るうち不図胃病に罹り種々治療を尽したるも何分薬の効も見えず去りとて席を休んで居ては活計も立兼るより此程席の浅草瓦町の旅人宿中村辰世方へ自分一人で止宿せしが身体の次第に弱り宿料も滞ほるを気に病んで一昨夜十時三十分ごろ全町の共同井戸へ身を投げて死んだと云ふ

十一月十四日 (1888. 11. 14)

○追善風調会 前号にも一寸出した近松門左衛門の追善を兼て来る二十五日東両国中村楼にて二世近松門左衛門氏の嗣号披露会を催し書画抹茶より講釈落語踊りの外竹本喜笑軒と竹本綾瀬太夫の浄瑠璃其他の余興あり此日は府下の俳優芸妓をはじめ諸芸人大かたは出席するとの息込みにて諸所に入場券の取次所ありといふ定めて当日は盛大なる事なるべし

明治二十二年 (1889)

一月六日 (1889. 1. 6)

○芸人の総数 昨廿一年十二月下旬其筋にて取調られたる府下の諸芸人は総数は一万千五百五十八人にて此うち俳優二千三百七十三人、力士四百六十七人、落語家六百八十九人、講談

師三百九十九人、義太夫四百七十六人、常盤津六百卅二人、清元四百三十五人、長唄四百四十三人、芸妓千五百八十八人なりとぞ

二月十九日 (1889. 2. 19)

○寄席へ内論 講談師松林右円が諸方の寄席にて森文部大臣を殺害せし彼の西野文太郎の履歴を講じる筈なりし処ある筋よりの論しに依り見合すべしとの内論にて寄席はピラも看板も取り除きたりと

二月二十四日 (1889. 2. 24)

●○燈台下明しの記 饗庭篁村

……折しも講談師桃川燕林子佐久間象山の伝を講ずるに付き面白き逸話もあらば聞たしとの事に……太華山人と幸堂得知氏と燕林子と拙者の四人なり……

釣針のやうに流る、滝の川 桃川燕林

まがり腰で海老屋にぞ入る

時に午後二時を過ぎたり是より拳に負けて燕林屏風を開き興に乗じて雪湖衝立に画く等の事あれど……

三月十三日 (1889. 3. 13)

○義士銘々伝講談 明十四日正午より芝高輪泉岳寺に於て同講談を開く由当日は故浅野長矩公の祥月忌日に付奉納の爲め放生舎桃林、真龍斎貞水、伊東燕尾等が出席するといふ

六月九日 (1889. 6. 9)

●○呻者盲人の財布をとる 三田四国町中村伝助の長男直太郎(十七年)といふは盲目にて按摩を世渡りとして居る者なるが一昨日の午後四時ごろ芝赤羽橋の露店講釈を頻りと聞て居たるところ其透を窺ひ一人の掏摸が直太郎の懐中へ手をさし入れ財布を抜取らんとする処を何をするかと云ふくさま確と手首を押へ……

六月二十三日 (1889. 6. 23)

○奉納講談 明廿四日午前十一時より芝高輪の泉岳寺に於て演ずる義士伝の講談者の松林右円、伊東燕尾、放生舎桃林、神田伯山等にて傍聴無料なりと

六月二十五日 (1889. 6. 25)

○改良演芸会 同会も不日開場の運に付廿四日演芸人一同会合の上開場式を三日間と定め中入前は落語、講談、浄瑠璃唄、音曲等面白く組合せ中入後は菊川金蝶の門弟子供手踊及び日本橋と芳町芸妓の踊と定めたる趣きなり

六月二十五日 (1889. 6. 25)

○日延 昨日高輪泉岳寺に於て開く筈なりし奉納講談会は当日雨天に付本日に日延したりと

七月二十日 (1889. 7. 20)

○伯山の慈善 講談師神田伯山は兼て慈善の志し厚く福田会育児院へ寄附の爲め去月中馬喰町の常盤亭と協議の上一席に二銭五厘づつ、積置く事に定め永久実行すると云

八月三十一日 (1889. 8. 31)

○賄路事件の講談 今度松林右田が浅草茶屋町の寄席恵比須亭にて見出しの如き講談読物を読むので同亭に非常の大入りしと

十月十三日 (1889. 10. 13)

●日本演芸協会演習筋書

……

第二 再会一対武者風 関根正直作

此講談の大意は……

……

○再会一対武者風 関根正直作

……

十月十五日 (1889. 10. 15)

●水害義捐演芸会 各地水害罹災者救恤のため寿座主三浦小太郎落語家頭取談州楼燕枝が発企人となり春風亭柳枝三遊亭円遊齋語楼小さん桂文治三遊亭円右古今亭今輔麗々亭柳橋真龍齋貞水の数名賛成者となり来廿一日より十日間毎日午前九時より午後五時まで本所寿座に於て興行する……

十月三十一日 (1889. 10. 31)

○義士伝講談 今日午後一時より芝高輪泉岳寺に於いて奉納義士伝講談を開かれ出席講談師は邑井吉瓶(俵屋玄蕃正伝) 放牛舎桃林(堀部妙海女噺) 伊東燕尾(大石良雄実記) 柴田南玉(積雪の夜討入) 等なりと

十一月十二日 (1889. 11. 12)

○改良演芸会 来る十六日午後二時より蠣殻町二丁目の友楽館に於て催はず改良演芸会の出し物は劇場正本話(文治)ところてん(円太郎) 鳥居恒右衛門(燕尾) 忠臣蔵四段目(綾瀬太夫、豊造) 三勝半七酒屋段(播磨太夫、紋左衛門) 文七元結(円馬) 長恨歌(松声正尾松韻藤千) 赤垣源蔵伝(貞山) 等にて余興には丸一の手練の曲があるよし

十一月廿三日 (1889. 12. 3)

○改良演芸会 来る七日八日の両日午後一時より蠣殻町三丁目の友楽館に於て改良演芸会を催す由其初日(七日)の出物は滑稽唐茶屋(文治) 芝居風呂(金朝) 寿くらべ(娘連中) 地獄廻り(円右) 夕霧伊左衛門(延寿太夫、美喜太夫) 佐野鉢の木(如燕) 三十三間堂平太郎住家(播磨太夫、紋左衛門) 名人くらべ(円朝) 手品(正一) 二日目(八日)は浮世話(文

治) おとし話(円左) 岸連波常盤の松島(常盤津兼喜久、小満吉、和佐豊) 素人洋食(円遊) おこま治郎兵衛(清元菊寿太夫、菊尾太夫、家恵太夫) 楠公桜井の巻(伯田) お俊伝兵衛(播磨太夫、紋左衛門) 名人くらべ(円朝) 手品(正一) 等なり

明治二十三年 (1890)

一月十二日 (1890. 1. 12)

○小安の慈善 新場の小安は来る十六日が実母の七週年に相当する故右追善供養の爲蠣殻町三丁目の友楽館を借受け平常懇意にする落語家、講釈師、手品師、太神楽等其他諸芸人を招き各得意の芸を演じさせ十才より十五才以下の宿下子供のみを無料にて入場させ小安が自身に一人毎に蜜柑を与へる由なるが当日は子供のみ遊覧さする趣意なれば大人は入場を断るといふ

一月二十日 (1890. 1. 20)

○石原烈氏 名古屋金城新報記者なる石原烈氏は日本屋東男と芸名を附し講談遊芸家稼業の鑑札下附願ひを一昨々日名古屋第一警察署へ願ひ出でたりと

五月九日 (1890. 5. 9)

○改良演芸会 来る十一日午後一時より蠣殻町の友楽館に於て催す改良演芸会の番組は百人坊主(新朝) 国定忠治の伝(桃葉) 火えんだいこ(遊三) 夕霧(清元葉、梅吉、里八) 伊達高尾の伝(桃林) 鏡ヶ池(円朝) 新荷雪間市川(常盤津小満吉、文字近、兼喜久、兼小代) 等なり

五月十六日 (1890. 5. 16)

○改良演芸会 来る十八日午後一時より蠣殻町の友楽館に於て催す改良演芸会の番組は佐倉宗吾の伝(柳冬) 義士銘々伝(貞水) 上方うたほこりた、き(里朝) 栗津ヶ原合戦(燕尾) 長唄外記猿(柳ばし美代、小糸、徳松、小くみ、小つる) 世界じまん(小さん) 江戸気性(燕枝) 夕ぎり(常盤津太夫林中、若翁、組太夫、岸沢八百八、八百三三) 等なり

八月一日 (1890. 8. 1)

○松林伯田 東京軍談師の泰斗と云る、松林伯田は来月早々京都に赴き新京都極道場京角座に於て衆議院議員の列伝を口演するとの評判

八月十三日 (1890. 8. 23)

○寄席の新趣向 近來米価騰貴のためにや諸興行場の中就中場末の寄席などは不気景(ママ) 甚だしく如何なる出物を掛るも客足尠なくして到底営業に成兼ねる処から何れも休席を届置きし上表向手踊の大さらひ杯と唱へ小劇場の閑な俳優が高座に現れ芝居同様の衣装を着て狂言をなし木戸銭は取らぬと唱へて一人前一銭五厘若くは一銭の下足料を請求し且場中にて

菓子蒲団茶杯を売るもの続々として之あり山の手辺にて殊に流行し何れも客足非常に多くし場所によては四五百名より二三百名以上の大人をなすので却て尋常の落語又は講釈師を掛けるより利益多しといふ右は一方の出方俳優の方にも一連漸く四五名に止り太鼓、三味線外一人の七八名で興行する事ゆゑ其配分も可成多しと

十月三日 (1890. 10. 3)

○横浜の壮士翻然遊芸人となる 有名なる横浜の壮士伊藤仁太郎氏は昨二日横浜市役所より二等遊芸出稼人の鑑札を受け爾今講談に従事する由なるが其芸名は双木舎痴遊といふ由

十月二十九日 (1890. 10. 29)

○嘯月亭吟花 日本労働組常議員宮田甚太郎氏は一昨廿七日神田区役所にて講談師中等鑑札を受け芸名を嘯月亭吟花と云ふよし

明治十四年 (1891)

一月二十三日 (1891. 1. 23)

○自由党懇親会席上の講談 別項に記す如く小久保喜七氏開会の主旨を述べ終るや事務員大井直三氏起て曰く各員若し演説をなし或は祝詞を朗読せんと欲するものは此の間に願ひたしと然るに誰一人演台に上るものなくサテは弁士論客星の如き自由党の会合にも不似合の事よと思ひ居たりし折柄黒紋付の着流にて演台に現はれ出でたるものあり是れ誰ぞと問ふに横浜の壮士伊藤仁太郎氏にして氏は近頃政治的講談に熱心なりと聞つるが果して一場の講談を始め巧にヤツてのけたり次に龍野周一郎氏に一場の演説を所望するもの多かりしが氏は止を得ずと云ふ見えにて登壇し前者の響に働ひてか矢張り演説的講談をなしぬ此の講談終る頃は最早や配膳となるべき手筈なりしも臨時に出席を申込みしもの多かりしより中々配膳の運びに至らず一同退屈気なるを見て取り伊藤仁太郎氏再び演台に現はれ赤井景昭脱獄の一段を講じ大に満場の感を惹きたり殊に赤井景昭が鍛冶橋監獄より石川島に送らる、とき霊岸島の川岸にて其の母親と潜かに訣別する一節の如きは殆んど聴者をして襟を濡さしむるの力あり氏の講談とは如何なるものかと思ひ居たりしに實際聴てみれば存外旨きものなりと感心せしもの多かりしと云ふ

五月七日 (1891. 5. 7)

○妖怪屋敷に於る井上文学士と松林伯鶴 本所緑町の金貸杉山某は去る二月中賊の爲めに殺害されてより近所近辺誰言ふとなく其空家に幽霊現る、と言触せしかば日暮になれば娘小児杯怖惶れて其前を通らぬまでになりしを頃日講談師松林伯鶴五十五円にて其家を買受けしと聞き或人眉を擧めて外に家も多きに何故さる気味悪き処を扱ひしぞと問へば伯鶴笑つて御不審は御道理なれど講談稼業の小生永く此家に棲む中に若しも噂の如く妖怪変化が出たらば其

模様を委しく見届け之を趣向て講談となし世上の高評を得る曉には独り小生が出世のみならず今日の五十五円は他日幾百円の利潤を得て戻らふかと存じますと答へし由之に對する一話は文学士井上哲次郎氏も同じく妖怪屋敷と風評ある本郷西片町の邸宅を購なひて氏が畢生の力を尽しつ、ある哲学の材料に供せんものと日夜妖怪の姿を現すを待ち居るといふ井上氏と伯鶴と素より日と同じふして語るべきにあらねど其奇を好む心は一なり

五月二十七日 (1891. 5. 27)

○府下講談師の懇親会 府下講談師の葛藤は所謂正論派の分離を以て落着に歸したり右に就き同派は一層の親睦をなさんため小金井蘆洲、桃川如燕、旭堂南慶、松林伯鶴、真龍斎貞水、清草舎英昌の六名が幹事となり来る三十一日を期し上野桜雲台に於て大懇親会を催す由にて来会者は全派講談師は勿論府下の各席亭（睦組と唱ふる七八の席を除く）とも無慮二百余名なりと云ふ因に記す全派の新富座の一番目狂言は松林伯鶴が全座主守田勘弥の依頼を受けて其筋を口演し作者竹葉其水氏に其原稿を贈りたる因みにより伯鶴及び伯知の二人が幹事となり全業者中の全志を募りて明二十八日に惣見物を為すと云ふ

六月二十三日 (1891. 6. 23)

○講談師正論派の決心 先頃中より府下講談師中に一の紛議を生じ遂に同業二派に別れ益々競争の模様ありし由は前号に記す処ありしが今度正論派即ち伯鶴、蘆洲、燕尾、如燕、伯知、貞水其他の数十名の連中は協議の上断然睦組と称する寄席へは昼夜とも出勤する事を謝絶し且睦組を賛成する同業者とは一切同席せざる事に取極めたりといふ

七月十四日 (1891. 7. 14)

○講談師の政談演説会 今度新に講談師社会に入りたる双木舎痴遊事横浜壮士伊藤仁太郎は本日午後八時より神田区連雀町寄席白梅亭に於て独演説をなす由にて其論題は（不体裁なる政治社会）（美人小町の成れの果）（講談師となりて睦派に加はりたる理由）（日本の経済社会を乱るものは誰ぞ）以上四題なりといふ

八月二十日 (1891. 8. 20)

○俳優兼講釈師 似顔番附で故人中村鶴蔵と組合せられし壮士俳優木村武之祐丈は素京阪地方にて講釈師をなせし趣きなるが今度川上一座に加つて居ても毎日芝居がはねると浅草千束村外二個所の寄席にかゝり張扇を手にして講談をなし昨今は滑稽腕力節とかを作りて相変わらず稼ぎ居る由

八月二十六日 (1891. 8. 26)

○講談師の還暦会 講談師旭堂貞寿は龍口法難論者の一人として四ツ谷の杉大門に重野小倉阿氏の駁撃講談をなし頻りに聴衆を喜ばせつ、ありしが同人は夙に太白堂に従ひて俳道を修め今は一派の宗匠とも言はるべき程にて其の門人もまた少ならず然るに同人は今年六十一年

になりたれば杉大門の講談終り次第浅草鷗遊館に還暦の大会を催すと云ふ尤も此会には在京の俳優落語家講談師は勿論二兄(全人の兄は二人共俳優の宗匠なり)の縁故を以て愛知三重其他の同好者に出句を求むる都合のよし

九月二十二日 (1891. 9. 22)

○講談師芝居 来る二十六、七、八、九の四日間毎日午前十時より囃鼓町の友楽館にて講談「師芝居を催す筈にて其名題は「張扇慈善會」と下し四番続に藤田中野出合夢の場、山口県城下の場、十段目尼ヶ崎の場、義士討入の場、国ちがひ、瓦漢寺雪の場等を演ずる由にて其の役割は左の如し

時坊主、花和尚 如燕

小林平八郎、車夫金蔵、汐田又之丞、師直 琴凌

光秀、政岡、弥兵衛 桃葉

ふか七、みさを、史進、源蔵 貞水

加藤、竹林、車夫伯次 伯治

中野梧一、オツペケペー 伯知

羽柴、田辺公、菅谷 小燕林

大石、初菊 燕林

書生、義士 吉雄

大?部、桂公 伯円

此の他燕尾の小牧山合戦、伯龍の水滸伝、南慶の柳沢昇進録、文慶の紀の国や蜜柑船、文車の西遊記、蘆州の大徳寺、邑井一の太閤記、桃林の伊達大評定等の講談あり

九月二十八日 (1891. 9. 28)

○講談師慈善芝居 如燕、伯円、貞水伯知等の(講談師)が催せる慈善芝居は一昨二十六日より浜町の友楽館に於て開場せり記者は僅に其の一幕をのぞきたるまでなれば委く評するを得ざれど兎に角滑稽諧諷能く観者をして絶倒せしむるの一段に至ては流石に枯れたるものなり

十一月五日 (1891. 11. 5)

○講談師の義捐 講談師桃李、伯知等の發起にて来月一日より愛宕下東桜館に於て震災被害救助義捐講談をなすよし

十一月十七日 (1891. 11. 17)

○池田邸臨幸の御模様 天皇陛下には予て仰出されし如く昨十六日午前十時三十分御出向にて芝区白金猿町の同邸へ行幸遊ばされたり今其御模様を聞くに御道筋の家々は何も国旗を掲げて御盛徳を歡仰するの意を表せし由にて同邸の準備は勿論善し美しして至らざる所なく

坐に大藩の昔日床しく思はれし趣きなるが聽て十一時廿分主人池田侯爵同夫人と共に音楽洋々の裏に奉迎し便殿へ御案内の後家族一同拝謁を賜り夫より同家伝来の品々を献じ御昼餐後暫時庭内を御散歩遊され尋で設の席に於て梅吉実の満仲宝生九郎の橋弁慶等の能楽を天覽に入れたつて便殿に入御せられ御余興として数十の煙火を打揚げ御晩餐後更に表座敷に於て松林派の講談を聞召され一日便殿へ入御の上龍顔麗しく還幸仰出されし由

十一月二十八日 (1891. 12. 28)

○一昨日の日本演芸協会 一昨日午後一時より帝国ホテルに開きし日本演芸協会の諸芸演習は兼て我紙上に記せし如き番組にて奏琴講談落語義太夫長唄清元踊等ありて何れも皆其道の屈竟なる技芸者なりし故会員満場頗る盛会なりし

明治二十五年 (1892)

一月十三日 (1892. 1. 13)

○演芸奨励会 来る十五十六十七の三日間木挽町の厚生館に於て演芸奨励会と云ふを催す筈にて其番組は左の如し

第一席 一初芝居 一五人廻し 一しの字きらい 三遊亭円花

第二席 三日続 吉原七人切 松林伯庭

第三席 一朝顔日記 一葛の葉 一明がらす 三遊亭花子

第四席 三日続 井筒女之助勤王譚 松林伯知

第五席 一ざぼし 一地獄めぐり 一野ざらし 一菅原伝習 三遊亭円遊・住之助

第六席 一三十三間堂?子別れの段 一玉藻前三段目道譽館の段 竹本住玉・小住

第七席 三日続(歌舞伎座春狂言の筋) 塩原多助の伝 三遊亭円朝

第八席 三日続 曾我物語由井ヶ浜より小袖越迄 松林伯円

二月四日 (1892. 2. 4)

○浅草公園の常盤座 は去月廿九日より差換への狂言蜘蛛の糸が非常の好評を博し已に一日以来は殆んど売切れの姿なり尚ほ次回狂言は桃川如燕が得意とする姫妃のお百を演ずる事となり如燕は過日来従来の説物に多少修正を加へ一昨日読合せを了し兩三日中に其筋に届出づる筈なりと

二月十八日 (1892. 2. 18)

○貞寿翁還暦の賀句 日蓮記の素読を以て聞えたる講談師貞寿翁は傍ら俳諧の宗匠として太龍堂寿量坊の号を斯道に知られたるが先頃還暦祝賀の為同好の清宴を張りし由にて其節の即吟なりといふを寄せられたれば茲に記す

若やぎぬ身は貧しくも菊の主 貞寿

三月三日 (1892. 3. 3)

○慈善演芸会 来る五日六日の両日正午より日本橋区蠣殻町三丁目の友楽館に於て催す慈善演芸会の番組は左の如し

五日○伊達評定(伊東燕尾)……黄門記(桃川如燕)……

六日○……和田合戦(松林伯知)……英国娘日本男?情夫(松林伯円)……

三月九日 (1892. 3. 9)

○講談師の起因併びに近況 落語家と並び立ちて近頃世にもはやさる、講談師の流派は今六家に分れたり伊東派、神田派、桃川派、田辺派、一流(ママ)齋派、松林派各々長所とする所はあれど其最も旧家と称すべきは伊東派なり抑も講談の始祖と云つば九州方の浪人赤松清左衛門(有馬藩士とも云ふ)にて元禄の末江戸に來り浅草見附内の土手下に立ちて太平記太閤記又は難波戦記等の実況を演じ行き來う人の足を留めしめたりされど素と營利を目的とせざれば其跡を継ぐ人もなかりしに徳川八代の將軍吉宗公の頃に至り湯島に伊東燕晋と云へるあり此人素と然る藩の士にて和漢の學に通じ詩歌俳諧をも能くして門弟三百余名あり(入門帳に市川團十郎の名も見ゆ)しが尚ほ教への足らざるを憂ひて自宅に講談を催し赤松清左衛門の遺業を繼いで廣く英雄豪傑の事柄を物語りけるに素より營業と云にあらねば聽問人は講談終れる時志ざしの料若干文を納めて謝物とするを例とせり然らに講談師の格式非常に高く將軍向島御成の時御前に於て一席を演じ又上野寛永寺の宮に召されて教席を演じけるに格別面白しとも思召されざるよし承まはりて更に一場を演ぜんと乞ひ富士の裾野の狩場を講じて當時頼朝が幕下に連なる大小名の旗幕の紋所をいと細かに演述し大に宮の御意に叶ふ後世此の一と節を「曾我の紋尽」と称へて世にもて囃されぬ講談師の格式既に右の如くなれば近頃まで席亭の木戸番客を呼ぶを許さず料錢を木戸錢と云はずして座料と言はしめければ万事窮屈なりとて女子供あるは八熊の連中之を聴くを好まず講談師又燕晋程の豪傑あらざるより勢漸く衰へんとするより初代貞山(眇貞山と云ふ今の貞山より五代の祖)八丁堀に起りて八熊適當の講談を初め始めて一流齋派を起したり(初代貞山は商機に敏きも品格後代の貞山に及ばず)爾來一流齋派の野鄙なるを矯めんとて神田伯龍は神田派を興し田辺南鶴は田辺派を興し勢再び昔に還らんとするより桃川如燕は伊東派より出で、桃川派を興し松林亭伯円(今の松林伯円の先代なり)は松林派を興したるが如きは皆自然の勢に由るものなり尤も桃川如燕の如きは己れが性質より枉げて此新軸を出だしたるものなれば常に同業に向つて衷情を訴へ精神更に伊東派の高尚を捨てずとなり然れ共星移り物變りて素徳義に出でし講談も今は純粹の營利的に陥らんとし一方に松林右円、柴田南玉、邑井吉瓶、同貞吉、神田伯山、桃川燕林等相結んで講談社會を併存せんとすれば一方には松林伯円等の一派相謀りて正論派と云ふを組立て以て互に競争しつ、あり然れど先祖赤松清左衛門伊東燕晋の如き美風を引起す事能

はず精神漸く衰へんとするより此社會に氣骨あり財産ある老成家又一派の団體を結んで大に講談師の美德を養成せんとて尽力し居ると云ふ

三月十一日 (1892. 3. 11)

○ヤツケロ節の取締 近頃ヤツケロ節と云ふを唄ひあるく壯士體の者処々を徘徊するを以て警視總監は嚴重に取締るべき旨訓令せしが途上に留り人寄を為す者は街路取締規則第十五條の明文「途上に於て軍談講釈をなし其他人寄をなすべからず」といふに依りて罰し又右の歌を唄ふは途上に於て新聞冊子等を読売り為す者の條項に依り嚴重に処分する事となりしかば昨今各警察署に引致の上拘留及び罰金に処せらる、輩毎日あるを以て全くヤツケロ節の跡を絶つに至るは兩三日中にあるべしと

三月十九日 (1892. 3. 19)

●演芸大習會 今明兩日午前十時より神田錦町の錦輝館に於て催す同會の出席者は昨日の紙上に記せしが其の役割は左の如し

(十九日分)

……

(二十日分)

……

返咲浪花梅

……

新作十二番の内此ぬし(二日続)

……

小楠公吉野桜(二日続)

……

三月十六日 (1892. 3. 26)

○慈善音樂會 本郷春木町二丁目の中央會堂にて今廿六日午後六時より日本養老院の爲め催す慈善音樂會は荒木古童並に社中宮春岩次郎、ガントレット、桃川如燕の諸子出席し薩摩琵琶には潯陽江、宇治川先陣等悲壯なる曲を演じ又ガントレット氏の調奏する大風琴は曲奏中伝閃を発せしめる新趣向にして其他三曲明笛大幻燈狂言講釈演説等數番あり頗る有益快絶なるものなる由

三月十八日 (1892. 3. 28)

○養老院慈善音樂會 一昨廿六日本郷春木町中央會堂に於て開きたる同會は會するもの凡そ五百名にて宮春岩次郎氏の薩摩琵琶の潯陽江の曲及び宇治川先陣の曲、桃川如燕の講談録の木、荒木古童町田杉勢の三曲合奏吾妻獅子、中村鑑三氏の演説、小野利三郎氏の明曲等三味線合奏、荒木古童氏の尺八鶴の巢籠等ありて中々の盛會なりし

四月七日 (1892. 4. 7)

●慈善演芸会 来る九、十の両日正午十二時より日本橋区蠣殻町三丁目の友楽館に於て催す慈善演芸会の番組は左の如し

……

一黄門記 桃川如燕

……

一柳生親子の試合 一龍斎貞山

……

一安田国次の伝 邑井一

……

四月十四日 (1892. 4. 14)

●落語家と講談師の花見 ……又正論派と唱ふる講釈師等にも松林伯円を先棒として二十日ごろ飛鳥山へ出掛け何れも壮士の扮装にて綱曳き棒押し運動会を催すよし

五月二十一日 (1892. 5. 21)

○五味堂の還暦雅俗筵 講談師華井晴山事五味堂路丸翁は明廿二日午前十時より江東井生村楼に還暦雅俗筵といふを催す由当日は書画展覽聯合縦覧及び(百韻一順文台)井盧物外、無為庵木髪、兼題、若竹(評者伯円、如燕)運座半廻し(談洲樓燕枝邑井一両評)通題は四季二十巻にして祝言余興は暁鳥(柳橋)三十三間堂(こま之助)恨葛露の濡衣(常盤津芳寿齋岸沢扇微)種時三番(橋之助)其他能狂言和洋手術或は燕尾、桃林、柳枝、野呂松連中の演芸尺し等ある由

五月二十一日 (1892. 5. 21)

●劇評

○市村座評判 芋兵衛

今回開場したる川上一座の演劇「ダンナハイケナイワタシハテキズ」と題せる狂言は予て講談師松林伯円が読物なる熊本神風党の暴動記を今度新たに書生芝居に仕組しものにて……

五月三十一日 (1892. 5. 31)

○幕臣の大法会 来る六月十二日下谷通り新町の円通寺に於て上野、箱館其他旧幕に縁故ある戦死者の為に大法会を執行する由全日は剣術、空也念仏、音曲尺八、松林伯円の講釈、木魚講回向其他各種の奉納ありて旧幕臣及び俳優諸芸人等参詣すると云ふ

六月四日 (1892. 6. 4)

●川上音二郎各国漫遊の計画あり 俳優川上音二郎は元人も知つたる関西の一壮士所謂自由童子其人にして曾て民権拉伸の演説に舌を誤つて牢獄に繋がれたる事三十余回、一年三百

六十五日の七分の六は赤衣麦食に牛馬の勞を取りたる不幸を嘆じ且つ不文の脳髓に自由の種を卸さんは大いに舌と五体とを以てするの勝るに如かずと悟りて落語家又は講談師となり遂に今の壮士俳優となりたれば……

六月十一日 (1892. 6. 11)

●第三演芸奨励会 同会は今明の両日午前十一時より神田錦町錦輝館に於て開会す入場料は特別席一名金三十錢通常席一名金十五錢のよし其番組は左の通り

……

一壮士の夢(両日) 松林伯円

……

一四君子討論花の大玉(両日) 松林円月女

……

一中村道太豪商伝 松林伯知

……

七月三日 (1892. 7. 3)

●後藤邸奉迎準備の様 明四日高輪なる後藤邸へ行幸仰出されたるが今予め其の御模様を承はるに……又た天覧に供すべき手品は多分帰天齋正一講談は如燕が召さる、事ならん又能組二番狂言三番を催す由伯爵家の光榮大なりといふべし

七月十三日 (1892. 7. 13)

○松林伯円氏の名譽 去九日主上鍋島邸へ行幸の際講談師松林伯円は御前に於て赤穂義士伝の内赤垣源蔵の条並びに豊太閤桃山の二席を聖聴に入れたるに叡感斜ならず相撲御覧の後再び桜井駅楠公訣別の条を講ずべき旨仰出されれば伯円は身に余る光榮とて精神を籠めて講談したり依つて宮内省より慰勞として金十円を下賜されたるよし

八月二十日 (1892. 8. 20)

●友楽館の慈善演芸 来る廿一日午後三時より開会する番組は左の如し

……

一徳川公代々記越藤家の伝 桃川如燕

……

八月二十一日 (1892. 8. 22)

●劇評

○春木座評判(続) 芋兵衛

松林円玉の芸妓お梅大ぶ麗くしく粹に出来たれど唯だ旦那の附添までにて別に見せ様なくお氣の毒○松林寿鶴の雲助のゆすりと白須賀六郎の追手これは真実甘いものにて中通りの本職

俳優も跣足で逃るばかりなり○松林伯鯉の上杉謙信、これはそっくり談洲の身振声色で着附も金びかのぼつちりしたる模様にて立派でありイヨ成田屋(2)と褒たかつたが入道の事なれば唯だ口の内でイヨ影法師だけで廢にしたり○松林伯遊の武田勝頼、……○松林伯門の八重垣姫、これも珍らしく且つ大道具衣裳の立派なること歌舞伎座尻喰へなり……

八月二十六日 (1892. 8. 26)

●○友楽館の演芸会 蠅殻町の友楽館に於て来る廿八日午後三時より催す演芸会の番組は左の如し

源平盛衰記 燕路

太閤記賤が獄立読 如燕

太閤記立読賤が獄 燕尾

九月一日 (1892. 9. 1)

●○水害義捐演芸 今年中国四国諸県水害の惨状は実に目も当てられぬ有様なることは世人の知る処なるが今度一二の慈善者発起となり来る三日より三日間午後三時より神田錦町錦輝館に於て義捐演芸会を開き其取得金を水害地へ寄贈する筈なりと其番組は左の如し

奴の小まん 松林伯知

九月三日 (1892. 9. 3)

●○友楽館の演芸 明四日正午十二時より日本橋区蠅殻町友楽館に於て催す慈善演芸番組は左の如し

一義士引揚立読 放牛舎桃林

一全伊達門前 伊東燕尾
一全泉岳寺 桃川如燕

九月八日 (1892. 9. 8)

●○堂々たる代議士張扇の材料にならんとす ……今は梶田屋も欲徳放れ腹を立て昨今は毎日の様に美男代議士の邸へ押かくるを最寄に住居ふ川上張りの講談師双木舎痴雲と云ふが聞付けて大に美男代議士の置処を悪みヨシく我れに趣向あり一番お味方代議士の鼻柱を折つ

て遣るべしと勇み立ち近々本所の或る席亭にて代議士茶禪と題して此の魂胆を張扇にかけて其敗徳を攻撃するよし

九月十七日 (1892. 9. 17)

○平沼退治物語 講談師双木舎痴遊事伊東仁太郎は今回奸商攻撃に従事するよしなるが其第一着手として一昨十五日より馬喰町の常盤亭にて平沼退治物語と題する講談を始めしに時節柄とて大に人気よしといふ

九月二十日 (1892. 9. 20)

●○学園大会の模様 同会は一昨日午前九時より木挽町の厚生館に於て催したり……午後引続き余興として会員吉住小三郎杵屋六四郎の荻江節、会員松林伯知の「奴の小万」の講談、……錦城斎貞豊の堀部安兵衛の伝、……

九月二十日 (1892. 9. 20)

○双木舎痴遊の気転 双木舎痴遊事伊藤仁太郎が馬喰町の常盤亭にかゝれるよし予て聞く所なるが痴遊曾て日本橋区の落撰候補者安田善次郎氏へ勸告書を送り以て其自退を促したる事ありしより其開札

の夜痴遊は常盤亭の前に「更に安田氏へ送るの書を朗読すべし」と大書して掲げたれば桶派の人々は勝利を喜の余り之を聞かんと続々押かけ非常の大人を取れり仍て痴遊は又一策を設け此大人に方りて明夜は魚河岸諸君の義侠を嘉する感謝状を朗読すべしと告げたるに此夜も非常の大人なりしと人気は妙なものなり

十月一日 (1892. 10. 1)

●○福田会慈善演芸 明二日正午より友楽館に於て催す福田会慈善演芸番組は左の如し

一九囉巴天草事件 伊東燕尾

十一月十一日 (1892. 11. 11)

○京都の聯会 同地京極の連中にて催はしたる聯会は去七日受楽亭にて開きをなしたるが題は講談のよみ物にて就中其秀逸のものを挙ぐれば楠公記の桜井訣別(琴書) 菊の小形の手拭を巻きて巻物とし勸世水の扇へのせたるもの意匠斬新といふべし、曾我物語の夜討(幾代)手拭を富士形に折たる半面と蝶千鳥古代模様様の銀扇を藁にて括る用意周到只藁括りの金剛を利せて裝飾を害したる為め彼に一歩を譲れり……

十一月二十五日 (1892. 11. 25)

○友楽館の演芸 放牛舎桃林・三遊亭円遊の兩人発起となり来る廿七日午前十時より日本橋区蠅殻町友楽館に於て催す講談師落語家聯合大演芸会の番組は左の如し

一 曾我兄弟大磯廓連 桃葉

一 三家三張合 桃玉

一 素人のうなぎや 遊三

一 静法楽之舞 南慶

一 祐経箱王箱根対面 伯龍

一 ざぼし 円遊

一 朝比奈門破 貞水

一 一口剣女の顔 伯知

一 かつぎや御幣 小さん

一 東丹波守の伝 如燕

一 天目山軍記 芦州

一 笠置の村雨 伯円

一 お駒才三鈴ヶ森 播磨太夫・?左衛門

一 大石十八ヶ条申開 桃林

一 手品 美蝶

十二月十七日 (1892. 12. 17)

● 演芸忘年会 今十七日明十八日の両日午前十一時より木挽町厚生館に於て題号の如き会を催す筈にて其出席人名は左の如し

……

講釈 伊東燕凌

全 松林伯遊

全 松林伯知

全 松林伯?

全 松林伯円

……

明治二十六年 (1893)

一月一日 (1893. 1. 1)

● 京浜間紳士紳商の新年会 京浜間紳士紳商の新年会は数年間継続し来りたるが本年は洪沢栄一・安田善次郎外五氏の幹事にて明二日帝國ホテルに開会すといふ当日会合の紳士紳商は三百余名の見込にて余興には円朝・小さんの落語・如燕の講談あるよし

三月二日 (1893. 3. 2)

○ 如燕教を侯爵に受く 講談師桃川如燕は予てより諸侯の邸へ出入りして得意の講談をなす由なるが或る時毛利公爵の御前に召されけるにお望みとありて最後に元就陶攻の船評定を読む事となれり常には数多の聴衆を馬の糞とも思はぬ講談師も本家本元にて御先祖の事を読む事なれば大に心配したれどまさか読まぬ訳にも行かねば予覚えたる所を一心に演べ去り脊に汗して一座の批評如何と窺ひ居けるに公爵は微笑み給ひて如燕よ汝が読みたる所彼処は斯々の誤りなり此処は又云々なりと御家に伝はる巨細の実記を語り聞けられしかば如燕も大に恐縮し唯有がたく教を受けて引下り夫より数々同邸へ召されしが其都度此船評定の事に付きて公の訂正を仰ぎ今は悉く其事実を得たるより同人も此上なく打ち喜び同邸へ伺候せる毎に御礼として必ず此一節を演じ且つ前置として公より教を蒙りたる一伍一什を述べて本を忘れぬ志を表はすとらん

三月四日 (1893. 3. 4)

○ 松林伯円の一世一代 軍談師の大立物松林伯円は追々老年に及びたるを以て今度浅草雷門前恵比寿亭に於て昼席の一世一代として本月二十一日まで打ち通す由

五月六日 (1893. 5. 6)

● 友楽館慈善演芸会 同館は設立後五年に相当するを以て祝ひ旁明七日正午十二時より慈善演芸を催して収益金は悉く悲田会に寄付するよし其番組は左の如し

……

伊達政宗朝臣の伝 小桃林

阿倍陰陽問答 桃葉

孝婦於豊の伝 桃林

……

六月三日 (1893. 6. 3)

● 土方宮内大臣邸行幸 天皇陛下は昨二日午後一時二十分御出門にて小石川林町なる土方宮内大臣邸へ行幸あらせ玉ひたり……余興として桃川如燕の講談・西幸吉の琵琶を聞かせ給ひたるが御還幸は十一時過なりしと承りぬ

七月三十日 (1893. 7. 30)

○ 講談師の手打、燕枝の口上 講談師の葛藤の顛末は既に前号に記載したる通り本月廿四日正論派は両国広小路福本亭に総集会の上双方円満に和解を整へたるに付き明三十一日江東中村楼に一同相会し手打に就ては種々の議論もありしが其の結局は当日参会者の余り多きは反て混雑を生じた如何なる行違ひの出来ざるとも保証なし難ければ両派より重立しもの七名づつ、を出し猶ほ顔役の仲裁人立会ひ席上の周旋は仲裁人総代として落語家談洲楼燕枝が古今侠客社会の口上を折衷して演述し且つ諸般の労をも採るといふ

八月二日 (1893. 8. 2)

○●手打後の講談社会 講談師の和解手打は愈々一昨日其局を結びたるに就ては自今正論睦の党派なく何れの席に出勤するも差支なき筈なるに付仲裁人は念の爲め正論派に其旨を申入たる処同業社会の習慣として已に來九月までは各々出席場も予定しある事なれば十月より兩派を公平に割付くる事にすべしとの返答なるも畢竟睦派が今回一步を譲りて和解したるは全く相当の出席場所なきに依りたるものなれば枉げて本月より以前の如く公平の新法を採用ありたしとの照会ありたる為有無は昨日中に回答する筈なり、また近頃睦派の席亭にて反旗を翻したる下谷区広小路の本牧亭跡の末広亭は兩派の調和なりたる為め昨一日に開らきをなしたる由

九月七日 (1893. 9. 7)

●偽紳士の喰逃 木挽町一丁目の待合茶屋春泉亭へ一人の講談師を取巻に連れられた紳士客あり……

九月二十八日 (1893. 9. 28)

○●松林伯知と竹本住之助の祝宴 改進黨新聞芸人投票に最高点を得たる女義太夫竹本住之助講談師松林伯知は本日自祝の宴を上野松源楼に開く由

九月三十日 (1893. 9. 30)

○●伯知と住之助の祝宴 竹本住之助と松林伯知は改進黨新聞芸人投票に優等賞を得たるに付一昨日廿八日上野松源楼に知己数十名を招待して祝宴を張りたり余興には落語茶番等あり殊に住之助の三国妖婦伝道春館の段(三味線小住)には満座感賞せぬ者なく只時間の後たる為め伯知の講談なかりしは遺憾なりき

十月六日 (1893. 10. 6)

●春風館と新声館の演芸 今明六七の両日日本橋蠣殻町春風館に於て悲田会慈善演芸を催し又同日神田裏神保町新声館に於て大演芸会を催す由出演者は左の如し

○春風館 伯知……

○新声館 ……燕枝等

十一月十七日 (1893. 11. 17)

○●星亨氏の履歴話寄席に上る 双木舎痴遊とは世を忍ぶ講談師の名、本名伊藤仁太郎(既に自由党支部員)は昨日より毎夜芝区琴平亭に於て衆議院議長星亨氏が洋行中の奇談・偽党撲滅の大運動・新潟の入獄事件・保安条例退去の奇聞等荷も星氏の名譽談に係るものは悉く講談する由

十一月二十五日 (1893. 11. 25)

○●上野桜雲台の同遊会 一昨日上野桜雲台は自から主人となり同遊会を催したり円遊・円

朝の講談を始めとして種々の余興ありしが中に最も喝采を博したるは同家の娘堀ふさ子の娘道成寺なりし

明治二十七年 (1894)

二月九日 (1894. 2. 9)

○三派大集演芸会 柳・三遊・浪花の三連は來十一月の両日間午前十一時より神田錦輝館に於て聯合の演芸会を催はし伯山・貞吉・桃林等の講談師も加勢に出る由

四月二十二日 (1894. 4. 22)

●劇部雑俎 ……▲明二十三日午前九時より開場する浅草座の講談師芝居切符定価は棧敷一人金二十五銭、高土間同金二十銭、平土間同金十五銭、大入場金四銭等なり……

四月二十七日 (1894. 4. 27)

○●自由党婦人会 同会は今二十七日正午より芝浦海水浴に於て開く余興には講談師伊藤痴遊(仁太郎)の講談あるよし

五月一日 (1894. 5. 1)

○●松林伯知京坂に行く 講談師の泰斗と称さる、松林伯知はかねて病気に罹り大磯塔の沢の間に療養を加へ居りしが今度保養かたゝ地方出稼を思ひ立ち浜松、福井、神戸、大坂、京都、伏見等を歴遊の爲め出發したりといふ

七月四日 (1894. 7. 4)

●講談師修羅場を实地に演ず 日本橋区中洲第二号地の矢場今井およね方雇女金田おつる(二十年)といふは予て講談師松林伯知の門弟にて深川区富川町三十一番地に住石井市太郎事芸名知教(二十九年)と疾くより二世までの深誓ひを立し中なれば夜毎日毎に來る幾多の客に万遍無く愛嬌を振時きセシメシ金円は右から左りに知教に仕送るを……

九月六日 (1894. 9. 6)

○●警視庁、講談師落語家を諭す 日清交戦以來諸興行物及び觀世物乃至寄席等の不景氣は實に甚だしかりしが講談師某は時節柄早くも日清韓事件を演じて不景氣を挽回せんとしたるに大に人氣に叶ひ毎夜大入なるより同業者は勿論落語家まで此れに習ふて読物は日清事件に限れる如くなりしも要する処は大島公使の入場豊島の海戦牙山の陸戦のみにして言はゞ種少なの為め半ヶ月とも読続能はざるより何んでも朝鮮に關係の読物こそよけれと豊太閤の朝鮮征伐或は神功皇后征韓等を演述するも武内宿弥の外は名前だに知ぬ旧記なれば觀客も從つて倦み自ら不入の姿に余儀無く無理にも牙山豊島の戦争に種々虚偽無根の事さへ交へて演るものあるに至りしが夫れかあらぬか警視庁に於ては昨五日第三部室へ講談師小金井蘆洲・伊東燕尾其他伯痴・桃林・如燕・伯山・貞山・鶴窓及び落語家燕枝・柳枝・小さん・今輔

・文治・円生・円遊・遊三・円太郎重なるものを召喚して左の如くに達したりと
 近來日清事件を演ずるに当り往々虚偽無根の事を説き愚夫愚婦を惑はし或は少壮血氣の者に
 浮跳突飛の心を起さしむるもの、及び猥褻に渉る事柄を演ずれば従つて人心を懦弱ならしめ
 遂に風俗上に関するの害少からず故に此等有害の事は最も注意して演ずべからず

明治二十八年 (1895)

一月六日 (1895. 1. 6)

●高島の神易と伯円の盗難

松林伯円田臘広島に行きけるが出發の際兼て愛顧を受くる高島嘉右衛門氏方へ至りたるとき
 吞象先生は伯円が旅行の可否を易せしに水山齋の二爻を得たり先生之を解して曰く進めば必
 ず害あり乍去前約は是非なし汽車中及び旅泊等は充分注意せよと伯円も其教を守り一月一日
 の夜岡山市の公園なる常盤木樓へ泊せしに其夜盜賊の為に衣類数点(代価三百円計)を奪取
 られたり……伯円は始て八卦の当れるを感じ是より道中が恐ろしくなりて広島の年頭は総て
 書面にて詫び斯く物凄き土地には何分居がたしと三日の一番汽車にて帰京せしといふ阿々
 三月十日 (1895. 3. 2)

●講談師の渡清

此ごろ技術材料蒐集の爲めに画工は勿論写真師、書生俳優に至るまで続々従軍を願ひて戦地
 の実況を模写し来れること我が文芸社会の最も美挙とする処ならん爰に又講談師伯円の弟子
 にして若円といふ者も斯道の爲に渡清を志し戦場の有様を実地目撃し帰朝の上日清の修羅場
 を滔々演壇に叩き立んが爲め唯だ一本の張扇と手帳を懐中にして近々彼の地に出立するとい
 ふ

三月二十六日 (1895. 3. 26)

●松林伯鶴の戦地慰勞講談

講談師中の大立物松林伯鶴事本名大島光利は兼て本所区緑町四丁目に住し日清開戦以來府下
 各郡区特志者が従軍者家族の爲めに慰勞撫恤の挙あるを聞き己れも応分の力を尽さんと欲せ
 しも微力なるを遺憾とし毎夜寄席の上り高の幾分を割き興行席所在区ない従軍家族撫恤費中
 へ寄贈する事を思ひ附き爾來今日迄此素願を実行したるは日本橋区役所内恤兵義会へ金五
 円、神田区協和会軍人奨励部へ金二円、四谷区義捐恤兵部へ金二円、本所区徴兵慰勞義会へ
 兩度に金二円等にて皆其奇特を感じざるもの無かりしが同人は今第一軍司令官野津大将の
 内命ありしとして去る廿二日清国盛京省旅順に向ひ出發したるが右は軍人慰勞の爲め同地に於
 て得意の講談を演じ其傍ら戦地の実況を視察し帰京の上は日清戦争に関する新講談を爲すと
 云ふ

五月一日 (1895. 5. 1)

●患者慰問として講談と能狂言の寄贈

東京陸軍予備病院に入院せる負傷病患者の無聊を慰せんと先きには住吉踊を寄贈せしものあ
 りて患者の喜び大方ならざりしが今度某学校女教員山川某の発起にて来十二日第二日曜日
 を以て伯円の講談と外に能狂言を寄贈するよし無聊を医するには屈強の寄贈と云ふべし

五月七日 (1895. 5. 7)

●三楽亭(寄席)の開業 猿楽町の無名亭を今度円遊・遊三・燕林・貞水外十二人が引受
 け三遊俱樂部の意味にて三楽亭と改称し来る十九日より開業する由

七月三日 (1895. 7. 3)

●藤の帰り咲

本所区横網町二丁目八番地なる講談師中の大立物桃川如燕の居宅は以前侯爵池田章政氏旧邸
 の物見にして家屋の構造は勿論庭園の結構実に人目を驚かす程にして目下庭内の樹木一円に
 繁茂したる中に藤の帰り咲ゆかりの色を呈して紫房五六寸に延びし風情得もいはず通行人
 は皆々足を停むるといふ

八月二十日 (1895. 8. 20)

●石橋忍月北国に講談師となる

曾ては幼稚なる批評壇上のレツシングとまで評されたる石橋忍月居士一度飄然として北国の
 天に去し以來北国新聞記者として日々の紙上流麗雅健の筆を揮へる由は何人も知る所なるが
 去十四日の事なり居士自ら主人公となり其知己親友を金沢市浅野河畔の花月庵に招て開業半
 周年の祝宴を催はす酒三行居士起て挨拶していふ是れより粗酒粗肴の御埋合せに東京新下り
 の講談師を御目見え致させ升と客皆以爲らく松林伯円過日福井に來れり忍月の所謂東京新下
 りと云ふ豈に大講談師ならざらんやと待つこと少時忽ち黒絹の五ツ紋にて刺へ金縁の眼鏡を
 かけて徐々と壇に登り机に向ふものあり諦視すれば何ぞ図らん忍月ならんとは客先づ翻弄せ
 られたるを悔ゆ居士得意面に満ち咳一咳、打一打、紋切形の前口上より始めて源清き徳川家
 譜代の臣に其人ありと知られたる阿部豊後守が三代將軍を仕合に懲らし參らせたる一条を語
 る言々聞くべく語々人を頷かしむ客驚いていふ吾子何ぞ其れ巧みなる其東京新下りの講談師
 と自称す宜なる哉

八月二十八日 (1895. 8. 28)

●改良講談『平壤包圍攻撃』(読売新聞立案・松林伯知口述)

右は従來有触れたる従軍記の類にあらず則ち今回凱旋したる征戦の將校に就き精確にして未
 だ世間に知られざる我將校兵士の実験を我社に於て親しく聞取り之を講談様に仕組みたるも
 のを當時売出しの講談師松林伯知をして口述せしめたるものなり之を掲載するの主旨は歴史

上の真事実を後世に伝へ軍事思想を一般に普及せしめ併せて講談の改良を図るに在り而して其の九月一日より之を掲載する所以は野津第五師団長が京城を発して平壤に向ひたる当日なればなり

八月二十九日 (1895. 8. 29)

○改良講談『平壤包圍攻撃』（読売新聞立案・松林伯知口述）

右は従来有触れたる従軍記の類にあらず則ち今回凱旋したる征戦の將校に就き精確にして未だ世間に知られざる我將校兵士の実験を我社に於て親しく聞き取り之を講談様に仕組みたるものを当時売出しの講談師松林伯知をして口述せしめたるものなり之を掲載するの主旨は歴史上の真事実を後世に伝へ軍事思想を一般に普及せしめ併せて講談の改良を図るに在り而して其の九月一日より之を掲載する所以は野津第五師団長が京城を発して平壤に向ひたる当日なればなり

八月三十日 (1895. 8. 30)

○改良講談『平壤包圍攻撃』（読売新聞立案・松林伯知口述）

右は従来有触れたる従軍記の類にあらず則ち今回凱旋したる征戦の將校に就き精確にして未だ世間に知られざる我將校兵士の実験を我社に於て親しく聞き取り之を講談様に仕組みたるものを当時売出しの講談師松林伯知をして口述せしめたるものなり之を掲載するの主旨は歴史上の真事実を後世に伝へ軍事思想を一般に普及せしめ併せて講談の改良を図るに在り而して其の九月一日より之を掲載する所以は野津第五師団長が京城を発して平壤に向ひたる当日なればなり

九月二十四日 (1895. 9. 24)

●平壤包圍攻撃に就て（米僊外一氏の書面）

本月一日の本紙上より掲載し来りたる本社改良講談平壤包圍攻撃の記事につき左の如き書面二通編輯机上に舞ひ来れり一は其の当時征清役に従事せし久保田米僊画伯（錦隣子）他は中國生と記し其何人たるやは詳かならず……

十一月二十二日 (1895. 11. 22)

○●授芸会 神田猿樂町二丁目六番地三楽亭（旧無名亭改め）は来る廿三廿四の両日午前十二時より落語講談義太夫の第三回授芸会を開くよし

十一月五日 (1895. 12. 5)

○●可児大尉の遺子

旅順の戦ひ可児大尉進軍の途次病を得て苦悶進む能はず一は己率ゆる所の部下の士氣挫折せんことを恐れ一は攻撃の大任を全たふする能はざるを恥辱と為し慷慨悲憤遂に死を決し後事を同郷の人野田野戦監督長に托し且つ一子某をして我が跡を嗣がしめんことを懇囑して終に

旅順の砲台に於いて自殺す忠勇義烈今に其の芳芬を伝へて戦場の美談と為せり去ぬる三日の夜野田男爵熊本出身の軍人及び諸士を招きて宴を紅葉館に張る会するの旧藩主細川侯爵・長岡男爵・安場貴族院議員・清浦司法次官・米田侍従・松永佐倉聯隊長・北里医学博士等無慮二百余名余興に昨年日清戦争に従ひ実地視察を遂げて帰朝したる松林伯鶴来りて「赤穂義士夜打始末」及び「旅順口唇の砲台」といへる二席の講談を為しぬ前なるは事細川家に関する顛末を語り後なるは可児大尉の美談なり得意の口調は抑揚あり頓挫あり満座の賓客皆感情に堪へざりしが就中大尉が死に臨み野田男爵に一子を托するの条に至り男爵本年十六七斗りと覚しき少年の手を携へつゝ突然席の中央に進み出で衆賓に一札して徐ろに口を開き傍なる少年を指してこれなん大尉が余に托したる一子某にして父の遺志を嗣ぎ当時幼年学校に在りと紹介して尚当時の事情を物語るに及び満座の視線は一斉に彼少年に注がれて肅然水を打つたる如くいづれも大尉があらはれなる心事を思ひやりて袂を絞らぬはなかりしとなん

明治二十九年 (1896)

二月二十六日 (1896. 2. 26)

○●曾我兄弟七百年忌

本年は建久の昔富士の裾野に不倶戴天の父の仇を討ちたる曾我兄弟の七百年忌に相当するを以て来三月十日頃より本所区元町回向院に於て法会を執行し駿州より其物体を迎ふる由にて目下準備中なるが着京の当日は俳優落語家講談師は勿論芸妓仲間義太夫常盤津長歌清元歌沢節等を始め遊芸社会の人々は奮て出迎ひする筈なりといふ

五月一日 (1896. 5. 1)

○●講談師伊東花溪は初の名を蜻蛉桐平八と云ひ川柳に巧みなり今度手踊庵化笑の名を襲ぐに付先代化笑二十七年忌を兼ね嗣号披露会を米沢町の鶯春亭に開く由

六月二日 (1896. 6. 2)

○●殿様の御注文

二三日前子爵華族數十名星が岡茶寮に宴会を開き余興には講談落語ある筈にて話の種類は何なものを扱ふべきやとの相談なりしが元より猥褻不倫の種類は脱にして馬鹿息子などの話こそ好かれと云ふものあれば夫は少々此度に禁物なり当障りなく酔漢の話は兎角下司に落ち一国一城の主たりし我々の耳に通ぜぬ嫌あり芝居の話は如何と云へば我は元来芝居嫌ひなり相撲ならば少々は我慢すべしと云ふ評議区々にして何れとも定めかねしが旧桑名藩主松平定教子忽ち一の新案を出だし然らば「書生が芸妓に慕はれると云ふ情話」を演らせては如何此ならば誰にも不服あるまじと云へば満座拍手して其議に同意し遂に松林若門として之を演ぜしめ一同大満足の様子なりしと諸君反つて自ら落語の材料となるを免かれず

八月七日 (1896. 8. 7)

○●版權侵害の談判

講談師の講談を集めたる「百花園」と云へる雑誌ありしが近頃又「花の色」と題せる類似の雑誌出で本月三日第三号を發行したるが其中に桃川如燕の百猫の講談を掲げたり此は曾て百花園に於て版權を得たるものなればとて其發行所神田佐久間町文治堂主人は四五日前版權侵害として花の色發行人に対して二百円の賠償を請求し其請求に應ぜざる時は告訴を為さんと談判中なるが結局之れを公けにせば桃川如燕の落度となりて刑法の制裁を受くる訳ともなればとて双方目下交渉中なれば多分示談にて事済となるべしと云ふ

明治三十年 (1897)

四月十六日 (1897. 4. 16)

●侯爵の御隠居

氏なき美婦あはれ玉の輿に乗りそこねけり本所区松坂町二丁目に市川すぎ(三十八年)といへる美形の寡婦あり元は或る義太夫語りの妻なりしが夫の不身持を嘆きて前年夫婦別れを為し其後は一人手内職して小奇麗に暮し居けるが一昨日午後六時頃かねて知合の軍談師桃川燕林一人の客を伴ひ來りて此お方は某華族の御隠居なりといふに……隠居は何の氣も付かず言葉に威厳を装ひてコリヤ女と言ひ掛けしにおすぎはすかさず陵潮(伊東)さん何御用ですと答へたるに隠居は急所を刺されて忽ち顔色を変へ此りや女何を申すかと叱り付くればおすぎは口惜くエ、其白々しい顔が憎くらしいお前の顔は浅草広小路の寄席で能う見覚えて居るに華族の隠居様もづう／＼しい其証拠は此扇子と金切声になつて詰寄られ陵潮今は返す言葉なく以前の服紗包片手に胡鼠／＼と逃げ行きしがおすぎは余り徒戯が過ぎるとて燕林の宅へ怒鳴込みたるに流石の燕林高座の弁舌も今の用には立たずこうしやくはこうしやくだが少し身分の違ふ御隠居と言訳してもおすぎの聞入れぬに燕林只管閉口して化け損ねし陵潮の云甲斐なきを恨んでも追付かず

五月十三日 (1897. 5. 13)

○●演芸開会 来十五十六の両日午前十時より伊東燕尾会主となり両国福本亭に於て講談落

語浄瑠璃の演芸有名会を開く由

七月二十九日 (1897. 7. 29)

●寄席の捕り物

大坂市西区阿波座仲通り二丁目十七番屋敷土族当時本所区緑町二丁目廿三番地横村弁吉方寄留高口政春(二十三年)といふは兼て同町二丁目津軽原の破落漢軍鶏長事渡辺長平の乾兒となり……其実窃盜犯のある曲者なる事を本所警察署にて探知し去廿五日同人が日本橋区馬喰

町郡代の寄席常盤亭に於て柴田南玉の講談石川五右衛門の釜入を演述するを一心に聴聞し居る處を難なく捕縛拘引して……

八月十七日 (1897. 8. 17)

○●故桃林の辞世

講談師放生舎桃林の死去したる由は前号に記載せしが同人は本年六十八才にして其辞世は左の如しと

秋桃の水にひたせば匂ひかな

筆投て月にも言ばかりなり

尾花まで待たで折れたる芒哉

消防の恵みを受て

冥途まで纏ひじるしは笠に着て

あつき恵みの旅立をせむ

尚同人は消防の纏印の仕着せをつけたる假入棺せりと云ふ

明治三十一年 (1898)

一月二十日 (1898. 1. 20)

○●円朝の講談

三遊亭円朝は先頃より興津に赴き居りしが此程帰京し轟真客の勧めによりて浅草茶屋町の大金亭に出席する事となしたる由

二月二十日 (1898. 2. 20)

○●葉山御邸に如燕を召さる

此程の事なりとか 東宮殿下は桃川如燕を葉山の御用邸に召され「四十七士の内大高源吾の伝」「加藤清正大坂地震の際豊公を見舞し事蹟」「三名伝」(檜、馬、柔術)外一件を聞こし召されたる由如燕の光榮此の上やあるべき

三月一日 (1898. 3. 1)

○●講談師桃川如燕死す

講談師中の大立物桃川如燕は先頃横浜へ出稼中病氣に罹り治療の為帰京して京橋区木挽町の門弟若燕方に於て療養中なりし処昨朝遂に死せしと云

五月三日 (1898. 5. 3)

●講談師の家へ入りし強盜就縛

先月二十一日の夜下谷区御徒士町二丁目三十六番地講談師松林右田事大宮庄次郎の別宅へ押入りたる強盜犯人林徳松(二十三年)が一昨日下谷警察署の手に捕縛されたる次第を聞くに

……

五月五日 (1898. 5. 5)

●藍田翁と杉野重平次

一世の宿儒として文章経学夙に世の重んずる所なる谷口藍田翁は其義烈の気象よりして昨日まで本紙に連載したる義士杉野重平次伝の講談を愛読せられ毎日講筵に對する前必ず之を一読すること、なし居られしといふされば右重平次伝の了るや左の辭を寄せられたり……

五月三十日 (1898. 5. 30)

●地方人士の文学趣味（中国の某新聞記者談話）鉛筆生

……一時『大坂朝日』に「毛谷村六助」といふ講談物を出した時、読者が非常に歓迎しました、つまり六助は芝居で其の名が知れて居るから、其の六助が如何いふ事をしたか、と一種の好奇心に駆られて読んで見ると、お園も一味斎も出て来るといふ訳で、兎に角、芝居で知れ渡つた人物とか、又は芝居風になつて居るのを好むです、『大坂朝日』へ社会小説風な物を出した事がありました、私共の地方では受けが悪かつたです、講談物も近頃は地方新聞まで流行して、私の社へも載せないかと照会して来ましたが、私の地方では余り悦ばれません、如何も『牡丹燈籠』より外には受けたといふ事を聞きませぬ、……

六月二十四日 (1898. 6. 24)

●講釈師神田国治強盗を働く

浅草北富坂町十七番地の組系商内田梅吉（四十七年）と云ふは可なり財産あるものなるが……此曲者は同所森下町十五番地に住居する講釈師神田伯山（玉川金次郎）の内弟子神田国治本名安井健次郎（二十七年）偽名を木村季吉と名乗る空板叩きなりしが目下尚取調中なりとぞ

六月二十五日 (1898. 6. 25)

●強盗講釈師の後談

神田伯山の門人神田国治が強盗を働きて現場に捕縛されたるよしは前号に記したるが……右の關係にて昨日召喚されたる神田伯山同伯治の物語には伯山の弟子に琥珀と云ふ者あり此男強盗の科にて北海道に苦役の処昨年大赦減刑にて放免され今は伯鶴と名乗りて一箇の講釈師となり己が経歴せし強盗事実談を特色の読みものとし居るより国治も其前座を叩きて之を聞つ、終に強盗心を起せしには非るか云々

明治三十二年 (1899)

三月七日 (1899. 3. 7)

●双龍斎貞鏡、袋叩に遭ふ

日本橋区久松町三十五番地に知られし講談師の大立物双龍斎貞鏡事本名早川与吉（三十八年）は一昨夜十一時頃赤坂区田町の寄席梅の家より帰途久松町自宅近傍にて車を降り三歩々行の折柄七八人連れの壮漢に不図衝突せしが双方共酩酊同士なれば……

三月二十八日 (1899. 3. 28)

●改名 講談師双龍斎貞鏡は来四月一日より真龍斎貞水と改名し両国広小路福本に出席すると

六月二十四日 (1899. 6. 24)

●諸芸大演 明二十五日午前九時より東西国井生村樓に於て講談三遊柳派落語其他諸芸の大演ある由

九月二十二日 (1899. 9. 22)

●大演芸会 明日及び明後両日午前十時より両国広小路の福本亭に於て松林伯知權主となり軍談落語の大演芸会を開き講談師一同及三遊派の落語家拳つて出席する由

十二月二十三日 (1899. 12. 23)

●醉漢溝中にはまる 昨日午前一時頃風雨劇しき折から本郷区内なるお茶の水橋の袂なる高等女学校前の溝際に蛇の目傘と高下駄が捨て、あるより巡回の巡査は不審に思ひ近辺を捜るに果して溝の中に一人の男が倒れ居たるより直に駆下りて引き揚げんとせしも死人同様にて始末に困り居たる折から本郷署の宮本警部が巡回して此処へ来懸りしより協力して引揚げし処殊の外泥酔せる上に溝中に陥り居たる為め身体水の如く冷へ人事不省の模様なるより元町派出所へ担行き炭火にて身体を暖めなどして手当を施したるにヤウウ心付きたれば問ひ糺せしに此の男は浅草区寿町に住める講談師神田伯山勇事岡村成祐（三十四年）とて李太白も三舎を避くる程の鯨飲家なるより泥酔せしにも係はず風雨を冒して帰る途にて誤つて溝中に陥落せし次第と判りしより酔の醒めて後送り還したりとぞ

十二月三十一日 (1899. 12. 31)

●失敗忘年会

神田小伯山伯鶴等幹事となり一昨夜は日本橋区住吉町なる小料理屋金万方にて軍談師忘年会を開きたりしが……やこれは失敗たと軍談師は〴〵として散会なしけるとぞ

明治三十三年 (1900)

三月三十日 (1900. 3. 30)

●四谷坂町人殺し第二回公判

同公判は昨日午前九時三十分前回の通り地方裁判所刑事第一号法廷に於て開きしが傍聴人は定刻前より続々詰掛け席に充満し講談師松林伯鶴も出で来り特に新聞記者席に入りて熱心に

筆記し居たり此は本件を講談に仕組まんが為めなるべしとぞ、……

四月二十九日 (1900. 4. 29)

○伊藤仁太郎の告訴 壮士講談師伊藤仁太郎は下谷同朋町の鷹頭原山平五郎を被告とし詐欺取財の告訴を東京地方裁判所へ提起し石井検事の係りにて仁太郎を召喚の上被害の理由を取調べられたりと

五月四日 (1900. 5. 4)

○彰義隊法要 来十三日執行の筈なる彰義隊戦死者の三十三回忌法要当日には能楽、講談、落語其他種々の演芸奉納ある筈にて落語には円遊社中多人数出席する由演芸場所は円通寺なり

五月二十一日 (1900. 5. 21)

○名士の口演 改良講談会は一昨日牛込清風亭にて開かれたるが演題は『売国疑獄 鬼界ヶ島』高田早苗氏、『鮪釣』江見水蔭氏、『独国劇話 クリズマン』和田垣謙三氏、にて喝采の中に閉会したり、其筆記は例に依りて本紙の『口演百譚』欄に収むべし

七月二十九日 (1900. 7. 29)

○落語家遊涼軍 三遊派の円遊、円右、若円、むらく、金馬、橋之助外数名は今回遊涼軍の名目を附して来月四日東京を出発し名古屋を経て京都、神戸地方へ乗込む由なるが講談師の伯円も同行の筈なりといふ

九月十三日 (1900. 9. 13)

○赤十字社病院船便乗記
八月二日於天津

講談師 森林黒猿

(本文省略)

十月十一日 (1900. 10. 12)

○講談師黒猿北清より帰る 講談師森林黒猿は既記の如く去る八月廿五日出発講談の材料を得んが為め渡清の途に登り其通信は本紙に掲げしが同人は天津に上陸し沿道北京に入り殆んど四十余日の内彼の地の実況を視察し昨日午前新橋に帰着したるを以て同業者桃川実、一立齋貞山、村井操等はその歓迎会を組織し音楽隊を先頭に早朝より新橋に出かけ伯知、伯鶴、円鶴、小伯鶴、蘆洲、潮花、貞水等其他縁故のもの百数十名出迎へたりと

十一月三日 (1900. 11. 3)

○鉞毒事件の新講談 講談師松林伯鶴は今回尾銅山鉞毒事件の顛末を講談に仕組み去一日より神田今川橋の染川亭に出演し居れるが同人は同事件公判廷を傍聴する為め先頃前橋地方裁判所に出頭し尚各弁護士に就きて同事件の模様を聞き取りたりと

十二月二日 (1900. 12. 2)

○日本演芸改良株式会社 曾て記せし如く寄席的演芸(講談、落語、義太夫等)の日に衰退する姿あるを慨し竹本播磨太夫、松林伯円、松林右円の人々主唱者となり題号の如き会社(資本金十万元)を起し東西京坂の都会を土台として凡ての演芸者を株主たらしむると共に斯道に忠実なる通人を株主として大に演芸の改良を計らんと既に着々歩を進めつ、あれば日ならず開業の運に至るべしといふ

明治三十四年 (1901)

三月六日 (1901. 3. 6)

○芝公園内の追剽騒ぎ 一昨夜七時四十分頃本所区石原町十九番地講談師一立齋貞昌事田中音次郎(五十三年)が麻布の小林亭より芝区大門の寄席喜笑亭に赴かんと芝公園山下なる弁才天の際まで来りし処車夫体の男二人と洋杖を携へたる書生体の男三人頭れ出で突然此野郎と同人の胸倉を捕へたるより大に驚き何をするのだと叫びたる折から一輛の人力車向ふより駆来りしかば彼等は何処ともなく消失たるが……

十一月二十四日 (1901. 11. 24)

●今様朝当筋

何でも芸人であれば浮気な後家や蓮葉娘にちやほやさる、が今の通例ながらこれはまた世間の噂にも乗らぬ円橋の弟子吉川赤蔵(二十三年)と講談師貞一の倅貞勇(二十一年)の二人、兼て懇意の間柄とて芸は二の次のお互ひに色男がり……

十一月二十九日 (1901. 11. 29)

●腕力講談師袋叩きに遇ふ

長腕差のお椀に大申打の看板掲ぐる講談師の松林円鶴、今年は四十二の大厄と云ふ訳にか春以来家業も面白からねど兎に角佐竹の宝集亭に国定忠次を叩きてこの月もはや暮れなんとすれば、来月からはツイ隣席の新柳亭へ出る積りにて四五日前同亭へ出かけたなり、新柳亭は元の若松亭にて今は釈師仲間の一龍齋貞海が所有なりしに、此時貞海風邪の気味にて臥床の俣応対せしかば大天狗の円鶴大に憤りてさりと怖ろしき席亭の権式、出方を踏付けにするも程こそあれとて、直さま立帰りに折角纏りかけし来月の出席を断り、その上新柳亭へか、り居る兄弟弟子の松林円龍を勧めて看板を上げさせたり、……

十二月二十五日 (1901. 12. 25)

○伯円の改名 講談師松林伯円は今度東主と改名したるに付き伯円の名は右円が襲名する事となり来る廿七日下谷区同朋町の料理店伊予紋に於て改名披露をなすと

明治三十五年（1902）

三月十一日（1902. 3. 11）

○●松林東玉の一世一代 講釈師松林伯田が名人東玉の名を襲ぎたるよしは先頃の紙上に記せしが同人は久しく中風に苦しみ昨年銀座亭にて卒倒せし後は生涯講演せじと断言して、只後進の取立のみに意を傾け

五月六日（1902. 5. 6）

○●席亭福本のお目出度 両国に有立の講談席福本の娘イソ（三十九年）といへるは女長兵衛の仇名さへある男優りの性なれども先年良人に死別れてより遺子の二人を育て傍ら親の手助けをなし居りしが恋は思案の外にて始終出入る講談師の宝井琴凌（四十二年）と浮いた噂が立ち初めたるを師匠の馬琴が聴込みて幸ひ両方も独身の事なり琴凌も不日日本橋区浜町十番地へ引移るといふ事になり居れば自ら仲人となりてイソを同人に娶はせんとし此程約も調ひたればやがて結婚の式を挙ぐる由、目出度し〜

六月四日（1902. 6. 4）

○●釈師対席亭の悶着 寄席と芸人との悶着は毎度の事にてイヤハヤと云ふより外別に評し様も無き次第なるが此頃も日本橋馬喰町の講談席常盤亭の主人西口芳次郎と釈師連との間に葛藤を生じたり其仔細は近來釈師の不勉強よりか其とも他に原因ありてか兎角不印の景気なれば何れの講談席も頭痛鉢巻の体にて右の常盤亭主人も信と思案を仕換へ先月の下半は釈師を断りて浪花踊を掛けたるに釈師連の苦情一方ならず英昌、南玉の二名を談判委員に選みて規約違背の苦情を持ち込みしが常盤亭も浪花踊を掛けても思はしからぬ処なれば一も二も無く頭を掻いて閉口せしかば兩名は仲間の許を廻りて謝罪すべしと芳次郎を伴ひ蘆洲、小伯山、太疏、貞水、鳴鶴杯の許を引廻せしが其中の鳴鶴は壮士上りの事とて地金を現はして大に筋張り張扇を斜に構へ車懸りに責付けたれば芳次郎も腹に据え難ね、左う逆に出るなら此方にも了簡があるから以来は決して釈師共のお世話にならぬと談判再び破裂せしが馬喰町の顔役西戸の金五郎柳橋の坂本直吉が仲裁に入り両三日前下谷の伊予紋にて漸く手打になりたりとは先づ以て結構なるが愚にも附かぬ紛擾は勢ひ斯道の衰替を招くを知らざるか！

九月十六日（1902. 9. 16）

○●講談師の遺族（餓に泣く） 浅草区馬道八丁目三番地講談師松林伯狸事佐原金藏（三十六年）は宮城県仙台市にては可成の資産家に産れし者にて妻スマ（三十六年）との間に長女ハツ（九年）次女ホノ（八年）及び長男友之助（六年）次男忠蔵（二年）あり母キン（五十六年）と共に一家六人暮しなりしが不凶せし事より種々の不幸に陥り終に伯田の門弟となりて講釈師の前座とまで零落せしが生来温和にして実直なれば仲間の人々も憐み世話し呉る、ものもあれど其日の糊口をも為し難き苦しさに去三月頃より発狂の気味となりたれば母や妻

の心配大方ならざるを見知れる近傍の人々も気の毒に思ひ病人をば下谷区根岸瘋癲病院に入院せしめたるがスマは早朝より納豆を売り廻り必死に稼げども女の瘦腕に米代の一部分だにも足らざる中に長男友之助は麻疹に罹り去七日死亡したるを病中の伯狸は聞き伝へて落胆の末本月十一日に死亡したるにぞ素より貧苦を重ねたる折なれば鏝一文の貯蓄とてもなく如何ともなし難きを同病院院長及び浅草区長並に衛生係員講談師頭取小金井蘆洲等が同情の涙を流しそれぞれ金円を恵与し漸く式ばかりの葬式を営みたりしも後に遣れる老母妻子等は此上如何にして其日の煙を立て行かんかと一家額を集めて途方に暮れ居れりと

九月二十一日（1902. 9. 21）

○●同情の涙 去十六日の紙上『講談師の遺族』と題したる薄命者浅草区馬道八丁目三番地佐原金藏方へ左の恵金ありたり

金一円也 芝 静賀氏

金五十銭 麻布飯倉六丁目 山城屋

九月二十三日（1902. 9. 23）

○●同情の涙 去十六日『講談師の遺族』と題したる薄命者浅草馬道一丁目の佐原金藏遺族へ又もや左の恵金ありたり

金一円 日本橋 無名氏

九月二十七日（1902. 9. 27）

○●同情の涙 彼の哀なる講談師佐原金藏の遺族へ又々

金七十五銭 芝桜川町 中村定次郎氏

金三十三銭 無名氏

十月二十六日（1902. 10. 26）

○●実業学校の科外余興 徒弟職工の爲めに設くる夜学校には教科の外に慰安を与ふ可き趣味を有たしむるの必要あるより神田の実業学校にては毎土曜日講談若くは幻燈会を催ふし内外実業家の実歴肖像内外商工業地等を撰みて生徒の視聴に慣れしむるに努むる由

十一月十七日（1902. 11. 17）

○●貞水秘蔵の一軸 当今東京市内に於て営業せる軍談師は、其数百四十余人ありて、同社会の者に硬骨漢と呼ぶる、真龍斎貞水は一と風替りし男にして、同じ芸人でも、俳優の如きは昔の河原乞食、団洲が馬車で飛び歩いて、元を糺せば何の其の……軍談師がへこ垂れて、彼等に軽蔑されるのは、平生品位を高める心懸けが無いからだ、大気焰を吐きつ、貼り扇を叩き立てる程ありて、自分の読物に就ても、専門家に故実を聞き質し、野卑なる言語を避けて、専ら改良に志

ざし、一生の内には、是非高貴の御前にて演じて、差支へ無き程ならんとて、種々苦心しつ、ありと云へば、余り最屑過ぎたる誉め方なれども、同人は全く業体に似合はぬ風流の心得もありて、書画の嗜好を有し、先頃も某所より、墨絵の四季山水なる、探幽の一幅を手に入れ、野狐が宝珠を獲たるが如く、朝夕礼拝して珍重せり、併し真筆なるや否、自分の鑑定にては不安心なれば平生愛顧を蒙る駿河台なる重野成斎博士の許に至り其幅の真偽の鑑定を請ひしに、博士は一見して、其真筆に紛れなき由を語られしかば、氣も狂はんばかりに喜び勇みたるを、其道に堪能なる川村雨谷氏が聞付けて、其幅を一覽し、博士の鑑定に違はずとの口上に、此頃同人の自慢は是れ一つ、探幽の講談を仕組まんとて、目下寢食を忘れ居るとぞ、芸人としては先づ善き心懸けなり。

明治三十六年 (1903)

四月二十八日 (1903. 4. 28)

○東北飢饉義捐講談 今明の両夜両国福本亭に於て催し余興には伯鶴南玉齋両人の義太夫及那須祐直氏の薩摩琵琶ありと

五月八日 (1903. 5. 8)

○錦輝館の義捐講談 真龍齋貞水催主となり明後十日午前十時より神田錦輝館にて東北飢饉義捐の為講談会を催す其番組は

鈴木鯉(桃玉) 南部の相撲(桃林) 王陽明(小伯山) 鐘権三郎(貞丈) 孝子宗(伯龍) 高田の馬場(小貞水) 神崎与五郎(如燕) 印籠場(陵潮) 可兒大尉(伯鶴) 伊賀の水月(貞山) 山内一豊の妻(操) 倉橋伝助(鏡水) 不破数右衛門(英昌) 紀文(吉瓶) 忠僕直助(貞水) 渡辺昇(伯知) 長短鎗試合(南窓) 細川忠興の妻(邑井一) 双喋々(小燕林)

七月十五日 (1903. 7. 15)

○福田会寄附の大演芸会 今日より三日間京橋区南鍛冶町山村亭にて午前十一時より福田会育兒院へ寄附のため講談師仲間の演芸会を開き余興には掛合大角力、喜劇等ありと

七月十七日 (1903. 7. 17)

○亡妻の手向に泥坊の放生会 壮士講談の開山と云はれし双木舎痴遊事伊藤仁太郎は近頃下谷区谷中真島町一番地に住み相変わらずでぶくした身体を持披ひ講談のはうも売出しの時程持離されず切角の張扇も蜘蛛の巣に封じ込められ、昔の元氣は何処へやら久しく実地の修羅場も演ぜず盆の遺練に頭腦を悩す折柄昨年來病の床に打臥したる恋女房(池の端の寄席吹抜亭の娘)が医薬の効なく去十三日精霊の迎ひ日といふに冥途へ旅立、流石我武者の痴遊も鬼の目に酸漿程の涙をこぼし、式の如く茶毘の煙となし野辺送りを済ませたるが……

七月二十九日 (1903. 7. 29)

●演芸だより 清国奇術師玉福林、玉福順、座長李彩の三名は今回英人ブラック、講談愛造等と共に日英清三国同盟演芸一座といふを組織しその第一回を来月一日より両国の立花家、日本橋の木原亭の両席に於て開演する由……

八月二十一日 (1903. 8. 21)

●下谷竹町の情婦斬り 一昨夜九時半頃下谷区竹町十九番地元運送業柿沼半次郎長女キヨ(十九年)が同町十二番地の講談席新柳亭事三谷七之助方へ赴き帰宅せんとて同番地の四ツ角へ差掛りたる時一人の男立頭はれ突然鋭利なるナイフにてキヨの帯の上より左の腹部へ突立て逃去りたるが宵の口のこととて界限の騒動一方ならず早速警官も馳附けキヨを自宅へ送りて手当を施したるに傷は左程にあらねど犯人は同人の情夫なる元新柳亭の下足番山田米吉事(本名大塚勇吉(二十六年)と分り……)

十月五日 (1903. 10. 5)

●大山元帥の泣顔

硝煙彈雨の中に談笑して手づから桜を金州城外に植え大和島根の床しき薫りを千歳の後までも海の外に伝へんとせし大山元帥の風流なる志は夙に聞し処なりしが……専ら軍談を好める由尤も元帥の出身地なる鹿兒島は古來武勇を以て本色とせる土地なれば講談師の持離さる、こと頻りにて同地の天文閣と云へる席亭に於ては毎年十二月上半必ず赤穂義士伝を講演する例なるが毎日の大人立錫の余地なく十四日目の討入当日には二枚木戸とて木戸銭を倍額に引揚ぐれども聴客の詰懸ること潮の湧く光景瞬く間に満員となる由されば元帥も幼少の折より講談を聴き慣れしが為今日にても自邸に講談師を招くこと常なるが中にも最も恩顧を蒙れるは松林伯鶴にて赤穂義士伝が何よりのお好み、殊に大石良雄が復讐後細川家へ預けられし際沢村才八郎が大石を天下の義士として待遇す処に至れば元帥は例もながら感歎極まりて両の眼より涙溢れ果てはおい声を立て、泣き出す有様に……

明治三十七年 (1904)

二月四日 (1904. 2. 4)

○釈師の只乗り 下谷区徒町二丁目廿二番地講談師桃川燕好事味南宗太郎(三十年)は群馬県高崎より熊谷までの切符にて一昨夜十一時二十分上野停車場に到着し其筋に告発されたり

七月二十日 (1904. 7. 20)

○軍中講談 軍事講談師松林伯鶴(本名大島光利)は今回法律新聞通信員として従軍せり定めし面白き材料を得ることならん

七月二十一日 (1904. 7. 21)

○◎神田 旅籠町に住む講釈師松林石門夫婦喧嘩の大修羅場を实地に演じ女房お蝶の左眼を叩潰す二世のかためとは是より始まる

八月十九日 (1904. 8. 19)

●飼犬権兵衛 俠客に唐犬権兵衛あれば今の世にも権兵衛大臣がありと云ひ、釈師の桃川実が、飼犬に権兵衛と命じたのも、什麼云ふ訳か、烏の嘴を借りて種の元をほじくつた所で、ズンベラ〜と囃すほどの興味のあるのではないが、兎に角犬に権兵衛とは変つた名称であり、▲実は年来ノン〜ズイ〜の勇ましひ漸に、大山大将の鼻屑を蒙つて居たのが縁となり、先頃大将が満州軍総督として出発せられた時に、随行の中に加はることとなつたが、例の飼犬の権兵衛が、什麼したかと云へば、実は内地に打棄て、行くのは可哀想だと云つて、之をも同行したとの事だ……

八月二十八日 (1904. 8. 28)

○▲釈師の窃盜 昨晚三時頃深川区東元町十六番地千葉生れ講釈師横尾亀吉(六十三年)は京橋区滝山町十一番地博徒辻仙吉方に入り真鍮の葉銜一個を窃取し同区材木町の真福寺橋際まで逃来りしを京橋署の手に捕へらる

九月三日 (1904. 9. 3)

○●従軍釈師 講釈師の組合から、兵士として召集された者や、志願の上従軍することになつた者が、何の位あるか、現在張扇子で稼いで居る釈師の数は、二百五十名と註されてあるが、其中此程兵士として召集された者は、真龍齋貞水の門人小貞水、桃川実の門人若燕の兩名の外、昇龍齋貞山の門人貞丈、貞水の門人真龍齋鏡水、南窓の門人正龍齋南嚙の三名も、近々入営するとの事だ▲其外真龍齋貞水の門人菊水と云ふのが、是非とも従軍しやうと心懸けて居たが、其筋で妄りに許可せられずと聞いて、電信工夫に化けて、愈々従軍の目的を遂げることになつた所、丁度乗合せた汽船が、彼の浦塩艦隊に撃沈された常陸丸で、プワ海上に漂つて居る中、幸ひ救助船に引上げられたが、船はバッテリーの事で、助けられた者が沢山乗つて居るから、又候沈没せぬかと大層心配したのだ、併し無事に陸地に漕附け、漸う一命を取止めて、当時は金州に居るとの事だ▲それから旭堂立志と云ふのが、戦死者の屍骸取扱ひ方の名義で従軍して居るが、謂はゞ隠亡焼のやうな者で、内地に在つては、如何に名の知れない釈師だと云つて、真似にも此んな事が出来るものでない▲中でも一番倥傯な者は桃川実で、是は大山元帥が満州軍総督として出征せらるゝに就て、參謀本部から陣中の無聊を慰むる為め、従軍を命ぜられたと云ふが、当人身体が関取のやうに肥つて居るもの、大の臆病であるから、縦令大山元帥の命令だと云つて、之ばかりは御免蒙りたいと辞退に及んださうだが、仲間の者が、ナーニ総大将の所まで鉄砲弾が飛で来るものか、そんな卑怯な事を言はずと、奮つて従軍するが宜からうと勧めたので、当人も安心して出発したと

の事だ▲真龍齋貞水も野津大将に随行して出発したのだが、病氣の爲め此程帰京した、其外大島伯鶴、森林黒猿の兩名も従軍して居るが、何れ帰京したらば、見て来たやうな嘘どころか、随分輪に輪を懸て大法螺を吹き立てるであらう。

十月一日 (1904. 10. 1)

●戦勝の原因は芝居(大隈伯の談話)

▲大隈伯の応接間 で某外客と我輩と三人で戦争談が始まつた、其時外国人が、……と某国観戦武官が云つたと物語ると大隈伯は、得意満面日本国民の強い原因に付て陳べて曰く、此原因は全く

▲芝居講釈浪花節等のお蔭 であると断言して宜しい、……

十一月一日 (1904. 11. 1)

○●演芸茶話会 橘家円喬、邑井一、伊井蓉峯、六郷新三郎、松永鉄太郎、中村勘五郎、板東八十助、三田八、団吉、竹本歌賀太夫、竹柴梅次、竹柴普吉、竹柴老松等は相談の上毎月一回集合して互ひに芸道の談話をなし進歩を計る目的にて不日規則書を作り第一回を開会する筈

明治三十八年 (1905)

四月十八日 (1905. 4. 18)

○●講釈師の出征 真龍齋貞水の門人鏡水事関川正夫は去十四日出征の途に就けり

四月二十五日 (1905. 4. 25)

○●邑井吉瓶死す 講釈師の古株邑井吉瓶は昨廿四日五十一歳を一期として黄泉不帰の客十一月八日 (1905. 11. 8)

●愛国婦人会の慈善芝居 愛国婦人会東京支部中神田、日本橋、京橋の三区主任幹事堀内艶子、仁杉うた子、宇津木ひろ子の三氏の首唱の下に近々明治座に於て慈善芝居を催す由発表したるに突然中止になりし理由とて某婦人の談話を聞くに伯鶴と云ふ講釈師が戦地より帰来りて従軍講談をなし其の上り高を愛国婦人会に寄贈して有功章を得ると同時に前公爵夫人毛利安子氏(愛国婦人会理事)の信用を得て同会員と懇意を結びたる末が牛込区の幹事仁尾繁子氏の首唱の下に和良店に伯鶴を招きて慈善会を開きたるを始めとして四谷区と同幹事柳谷千代子氏麻布区の小浦義子氏本所区の某氏等を説きつけ夫れ〜牛込同様慈善会を開き昨今は南多摩郡同婦人会の発起にかゝる慈善会に出演の爲め八王子に出張中なるが愛国婦人会東京支部の事務員等は頻りに未だ慈善会を開かざる各区に開会を促し伯鶴も亦た電話などにて提灯持をしてゐるが一部婦人達は伯鶴の講談に反対する者が多く或はバザーを開かんと云ひ或は園遊会に模擬販売店を設けんと云ひ居る中……

- 明治三十九年 (1906)
四月九日 (1906. 4. 9)
● 第四回読者大懇親会
……
- ▲ 講談 真龍斎貞水氏の『本溪湖激戦』は実に勇壮々烈にして梅沢旅団長の苦心、軍隊の困難を目前に見る如く人をして息も継かざらしめたりき
……
- 明治四十年 (1907)
六月十九日 (1907. 6. 19)
○ 婦人博覧会の演題 本日及び明日の演芸は…… 武芸講談、……
六月二十六日 (1907. 6. 26)
○ 婦人博覧会の演芸 今日正午より…… 講談荒茶之湯他一席 (桃川如燕事斎藤嘉吉氏) ……
……
- 六月二十七日 (1907. 6. 27)
○ 婦人博覧会の演芸 今日正午より…… 講談 (田辺南龍事、関川正太郎氏) 明日は……
八月三十日 (1907. 8. 30)
● 社告 九月以後の読売新聞
……
- ▲ 文士講談 ▼
● 南洋開拓の率先者原田孫七郎
町田柳塘
……

Storytelling (*koudan*) Related Articles Quoted
from the *Yomiuri Shimbun* in the Meiji Era (No. 3)

Shin'ichi Kikuchi

Abstract: This paper is a collection of storytelling (*koudan*) articles quoted from the *Yomiuri Shimbun* in Meiji 41–45 (1908–1912).

Additional articles from the *Yomiuri Shimbun* in Meiji 8–40 (1875–1907) are also included.